

---

# 機動戦士ガンダムSEED D-DESTINY

泰貴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED D・DESTINY

### 【Nコード】

N8719J

### 【作者名】

泰貴

### 【あらすじ】

C・E・75。東の間の平和を享受している地球圏に新たな戦乱が巻き起こる。

平和維持組織LOWを組織したキラとアスランらは、ブルーコスモス残党を糾合する謎の人物アザナエルと相對することに。一方、LOWのパイロットとなったシンは、アザナエルの下で戦うエクステンデッドと激しい戦いを繰り広げる。全50話。

## 第01話「発端」(前書き)

本作はアニメ『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』の後日談です。

後日談は劇場版で描かれると思いますけど、それとはまったく関係のないパラレルワールドです。

## 第01話「発端」

### 第01話「発端」

CE75年12月4日 プラント・ザフト軍宇宙港

ディアッカ・エルスマンは軍服の襟を直しながら、隣で緊張しながら制帽をしきりに治すアーサー・トラインを見た。

「あんまり硬くなるなつて。大丈夫だから、さ」

「は、しかし……」

アーサーはオドオドした目で上官を見る。元ミネルバ副長という経歴を買って副官にしたのだが、どうも要領が悪い。ディアッカは苦笑しながらアーサーの肩を叩いた。

「大丈夫だつて、今から来るのは俺の昔からの友達なんだから。お前が何かミスをしてもうまく取り成してやるつて」

「は、はあ、それならば」

強張った笑みを浮かべてアーサーが言う。いつもは調子のいい面白いヤツなのだが、こういう公式の場では変に硬くなってその持ち味を出せない。損なヤツだなとディアッカは少しだけ同情した。

「さて、お出ましだぞ」

「！」

ディアッカの声と共にアーサーは背筋をピンと伸ばす。拳が硬く握り締められ、小刻みに震えているのを見て、ディアッカはまた苦笑した。

（そこまで怯えることもないと思うがな……）

ドッキングハッチが開き、白い軍服をまとった銀髪の青年が姿を現す。端正な顔を厳めしく引き締め、兵士たちを睥睨する姿は鬼教官という感じである。

（こっちも硬くなっちゃつて、まあ）

青年の視線がディアツカに向く。ニヤニヤ笑うディアツカにちよつとだけ眉をしかめた青年だが、すぐに視線を離す。ディアツカは笑みを収めると、音高く軍靴を鳴らした。

「イザーク・ジュール国防委員殿！ 巡洋艦ロドネーへようこそ！」  
ディアツカの声と共に全員が最敬礼する。それをうけてイザークも軍事教本の見本のような敬礼を返す。

「二週間にわたる哨戒任務ご苦労。諸君らの活躍と無事を聞き、我々司令部も大いにうれしい。諸君らにはこれより一週間の休暇が与えられる。英気を養ってくれたまえ」

イザークの言葉に兵士たちから歓声があがる。その歓声の中、ディアツカはイザークに近づき、声をかける。

「イザーク……例の件だが」

「わかっている。すぐに行くぞ」

イザークは後ろに控えている赤服の士官に合図をするとディアツカとアーサーを伴って、ロドネーの格納庫に続く通路へ向かった。

「詳細をもう一度聞こうか？」

イザークがそう言うのとディアツカはアーサーに目配せした。アーサーは慌てて胸ポケットからPDAを取り出し、報告事項を読み上げる。

「今回、本艦はプラント外周部の破損コロニーへの哨戒任務へ向かいました」

「目的は破損コロニーへの妨害工作への牽制とテロリストたちのアジトの摘発だったな」

つつかえながら話すアーサーの報告に、イザークが先回りをする。74年の大戦以後、地球圏は表面上は平和な状態にあった。だが、地球連合の実質的な崩壊と、その背後にいた軍産複合体ロゴスの壊滅によって、彼らの支配から解放された勢力が活発な活動を開始していた。そして、プラントでも対地球強硬派の旧ザラ派や前大戦で破れたデュランダル派残党が地下に潜伏しテロ活動を行っている。  
「は、はい！ その通りであります。そして、出航から十日目に我

々はテロリストのものと思われる輸送船を発見。小戦闘のちに拿捕に成功しました」

「うむ」

イザークがうなずく。その硬い表情を見えますます緊張するアーサーにディアツカは助け舟を出すことにした。

「しかし、お前がまわしてきたパイロットどもは何とかならないのか？ そろいもそろってヒヨッコぞろいでまともな戦力にならないぜ」

ディアツカの言葉にイザークが眉をしかめる。

「ムチャを言うな。二度もの大戦で熟練パイロットのほとんどが喪失しているのだぞ。お前の部隊だけに精鋭を回すわけにはいかん。お前が使い物になるように指導しろ。それも指揮官の務めだぞ」

「へいへい」

コズミツク・イラ70、74年の二度にわたる世界規模の戦争によつて、もともと人口の少ないプラントは大きな損害を受けた。熟練兵の大幅な損失は国防力の深刻な低下を招き、ディアツカたちのような第一線の部隊でさえ定員を満たせないほどである。

「それに例の世界協約で、エース級が何人もひっぱっていかれたからな。しばらくはこの状態が続く」

イザークが不機嫌そうに言う。

世界協約というのは74年の戦争終結後に地球の主導権を握ったオーブとプラントの間に締結された条約で、停戦監視と世界各地の紛争解決のための平和維持部隊の創設を宣言したものだつた。

平和維持部隊には各国から優秀な人材が集められ、ザフトからもエリート士官である赤服からかなりの数の兵士が出向している。

「アスランも容赦がないよなあ。優秀なヤツは根こそぎもっていきやがった」

平和維持部隊の司令官で自分たちの旧友の名をディアツカが告げると、イザークはますます不機嫌そうになる。

「まだ根に持っているのか？ 呼ばれなかったことが？」

「うるさいぞ！ さつさと案内しろ！」

「あ、到着しましたが……」

アーサーが恐る恐る声をかける。イザークはそんな彼に鋭い視線を向けた。

「開ける」

「は、はい！」

慌てて格納庫の解除コードを入力する。相変わらずの感情の起伏の激しさを見せるイザークにディアツカは彼が政治家になれない理由を再確認した。

「ディアツカ……」

「ん？」

「輸送船の中身は間違いなかったんだな？」

イザークの言葉に冷静さが戻る。その変化に気づき、ディアツカの表情も自然と緊張した。

「……ああ、専門的な検査をしてみないと100%とはいかんが。まず、間違いなく」

格納庫の中央には銀色のコンテナが安置されていた。高さ二〇メートルほどのそれはモビルスーツ機がすっぽり入るほどの大きさである。

「エンジンはどうなのだ？」

「一回起動させてみた。間違いなく搭載している」

「開ける」

イザークの言葉にアーサーがコンテナ脇の操作パネルに走る。モーターの作動音が格納庫内にひびき、コンテナがゆっくりと開く。

「……たいしたものだ」

「ああ……テロリストがもてるようなもんじゃないぜ」

緊張した顔でイザークが後ろにいる黒髪の副官のほうを振り向く。

「シホ。すぐにLOW司令部に通信しろ。アスランをたたき起こせ」

イザークが忙しく指示を飛ばす。その横でディアツカは改めてコンテナの中にあるモビルスーツを見上げてみた。

二本のアンテナと二つのカメラアイ。かつてキラ・ヤマトが『ガンダム』と呼んだモビルスーツの頭部に酷似したそれを。

## 第02話「LOW」

同日 赤道連合領モルディブ諸島

アスラン・ザラは管制コントロールルームから青空を見上げていた。

どこまでも高く澄んだ青空は見続けていると吸い込まれそうな感覚に襲われる。そんな空を見上げ、アスランは何かを眼で追っていた。

轟音と共に青い機体が上空を通り過ぎる。その後ろを白い機体が2機通過する。前進翼と機首にあるカナード翼が特徴的な戦闘機。オーブのモルゲンレーテ社が開発したムラサメの改良型ムラサメBである。

青いムラサメBを2機の白いムラサメBが追う。白いムラサメが何度も追いつがるうとするが、青いムラサメは見事な回避運動で2機の追撃をかわす。

「シン」

アスランがレシーバーマイクをもって声をかける。

「はい、なんすか？」

「あまりムキになるなよ。模擬戦にならん」

「あ、はい、すいません」

パイロットの声と同時に、青いムラサメBが速度を落とす。アスランは小さくため息をつく。レシーバーを外し、シートに座る。そのタイミングを見計らって、傍らにいたメイリンがアイスコーヒールを渡す。

「ありがとう」

「いえ」

アスランの感謝にメイリンは笑みで返す。そして、自分のシートに戻ると彼女の仕事に戻った。

地球圏各国の協力によって編成された平和維持部隊LOWの司令官となったアスランは、このモルディブで部隊の練成に明け暮れている。今日はLOWの制式採用モビルスーツであるムラサメBを使用した模擬戦。仮想敵機を務めるのはLOWのトップエースの1人であるシン・アスカである。

「どうだ？ シンの成績は？」

「現在1対2の変則マッチながら8連勝です。さすがですね」

メイリンの言葉にアスランも頷く。各国から選抜しぬいたメンバーを揃えているLOWだが、やはりシンの実力は抜きん出ている。アスランはまたレシーバーを取ると、通信回線を開いた。

「シン、OKだ。各機、帰投しろ。ブリーフィングルームで模擬戦結果の検討に入る」

「え、これからが本気なんですよ」

「あまり新人をいじめるなよ。帰投しろシン・アスカ小隊長」

『了解です。アスラン・ザラ司令』

回線を切るとアスランはレシーバーを置いてアイスコーヒーのグラスを取った。そして、一口飲むとメイリンのほうを振り向く。

「キラはいつこっちに来るんだったかな？」

「あと半月後です。アフガニスタンでの停戦交渉に手間取っているようです」

「そうか」

まだ、ここでデスクワークを続けることになりそうだ。結局自分は苦勞するようになんてできているんだなとアスランは自嘲する。

現在、LOWは世界各国の地域紛争に各実働部隊を派遣している。その中でもアスランと同列にあるキラの担当する中近東は連合時代から紛争が絶えない地域だったこともあって、かなりの戦力を割いていた。

（とりあえずキラが戻れば休暇がとれる。一度プラントに戻ってもいいかな）

そう思いながらアスランはメイリンのほうを見た。メイリンはそ

の視線に気づくと不思議そうな顔をする。

「え？ 何ですか司令？」

「あ、いや、何でもない」

アスランはあわてて視線をそらし、コーヒーを一気に飲み干す。いつまでたつても不器用な自分に我ながらおかしくなり、笑みももたず。

その時、管制ルームの通信機がコールランプを点滅させる。通信兵が回線を開き、アスランのほうを振り向く。

「ザラ司令。イザーク・ジュール攻防委員から緊急通信です」

「ん？ 繋げ」

プラントの軍組織ザフトに所属する旧友のイザークは、LOW創設にも尽力した人物である。本国の治安維持のためとラクスに乞われてLOWには引き抜いていないが、現在でもオブザーバー的立場で協力してくれている。

アスランのシートに備え付けられているモニターに神経質そうなイザークの顔が浮かぶ。そして、その隣には旧友の1人ディアッカの顔も見えた。

「やあ、イザーク。ディアッカも久しぶりだな」

「よ、おひさし」

『挨拶をしている場合じゃない。緊急事態だアスラン』

イザークの顔には旧交を温めるといった感情は無い。あるのは厳しい緊張だけである。雰囲気はただごとではないのを感じ、アスランの顔も自然と硬くなる。

「どうした？」

『先日、ディアッカの乗る巡洋艦が1隻の輸送船を拿捕し、モビルスーツを発見した』

「モビルスーツ？ モビルスーツくらい珍しくないだろう」

アスランが怪訝そうな顔をする。ブルーコスモスの残党が世界各地で暗躍している現在、地域紛争にも多数のモビルスーツが使用されている。輸送船にモビルスーツがあったところで驚くには値しな

い。

『それがただのモビルスーツじゃない』

「ただのモビルスーツじゃない？」

イザークの言葉をアスランが繰り返す。メイリンが心配そうにこちらを見ている。

『ニュートロングジャマーキャンセラー搭載のモビルスーツ。驚くなよ。こいつにはコクピットがないんだ』

「！」

『無人操作の核動力モビルスーツ。どうだ？ これでも珍しくないか？』

「……」

アスランは黙ったままイザークの後ろに見えるモビルスーツを見ていた。南国の基地だというのに、背筋が妙に冷たくなっていた。

### 第03話「ラファエル」

同日LOWモルディブ基地

ムラサメBから降りたシンは、すぐさまアスランに呼び出された。模擬戦での各員の戦術検討を行うと思っていたところに、いきなりプラント行きを明示されたシンは。アスランの説明に顔を青くした。

「新型モビルスーツですか？ それも核動力の？」

新型のモビルスーツを開発するには相当な技術力と工業力が必要とされる。ロゴスやブルーコスモスが事実上壊滅した現在、独自にモビルスーツを開発できるのはオーブとプラント、北大西洋連合くらいしかないはずであった。

「三ヶ国の主な工業施設は嚴重な管理を行っている。間違ってもこんなモビルスーツを開発することなんてできやしない」

イザークたちから提供されたモビルスーツのデータを示しながら、アスランがシンたちに説明する。

「では、どこかに俺たちの知らない開発施設があるというんですか？」

「おそらくな。ジブリールの遺産か、それともデュランダル議長の遺産かはわからんがな」

アスランの表情は硬い。大戦から1年を経過しながら、彼らのシンパは根強く抵抗を続けている。新型モビルスーツを開発する可能性があるとすれば彼らであろう。

「俺はこれよりザフト司令部に向かい、事態の解明を行う。シン・アスカ以下3個小隊8名は護衛として同行せよ」

「は！」

シン以下選ばれたパイロットたちが一斉に敬礼する。彼らはナチユラル、コーディネイターの区別なく編成された精鋭たちである。

カガリやラクスが唱える世界平和への理想に共感している彼らをアスランは誇りに思っていた。

「ついでに留守となるこの基地は、マルコ・ラファエル准将が司令を代行する」

アスランの言葉に傍らに座っていた金髪の青年が立ち上がる。

真っ白い軍服に優雅なウェーブのかかったブロンド。好青年然とした貴族的な風貌のこの青年は、元北大西洋連合最年少の将官であり、現在はLOWの幹部として活躍する逸材である。

「マルコ・ラファエルです。ザラ司令の代理ということで緊張していますが、全力をもってそれに応えるつもりです。各パイロットは、司令が留守といっても気を抜かないように。ちゃんとあとで報告しますからね」

そう言ってマルコは片目をつぶってみせる。実直そのものアスランに比べ、気さくで話のわかる上官であるマルコは、若年兵を中心に人気が高い。

「説明は以上だ。シャトルの出発は2時間後、選抜されたパイロットは機体の搬入を急げ。ほかの者は通常訓練に戻れ。解散！」

アスランの声とともにパイロットたちがフリーフィングルームを出て行き始める。シンは、その間を縫ってファイルをまとめているアスランに近づいた。

「アスラン」

「シン、すぐに出発だぞ。荷物と機体のチェックをしておけ」

「ラファエル准将、大丈夫なんですか？」

シンが小声でアスランにささやく。その言葉にアスランは心なしか顔を曇らせた。

北大西洋連合で最年少の将官になっただけあって、マルコ・ラファエルはきわめて優秀な指揮官である。実際、彼がLOWで担当した北米での独立運動の鎮圧や、ヨーロッパにおけるテロ組織の摘発はかなりの成果をあげている。

しかし、その背後でラファエルには黒いウワサがつきまとい

た。というのも彼は南ヨーロッパの名門貴族の出自であり、あのブルーコスモスの先々代盟主ムルタ・アズラエルとも接触があったとされていた。そして、北米とヨーロッパでの成果はブルーコスモスとしてのコネクションを使ったにすぎないという風聞も密かに立っている。

「もちろん、ウワサは知っている。だが、バルトフェルド隊長はアフリカ。ラミアス、フラガ両隊長は月面。キラは中近東だ。信頼できる人材がほとんどいない。それにラファエル准将のことはウワサに過ぎん。それを疑って彼を遠ざけるのは問題がある」

「そりゃそうですけど……」

アスランの正論になおも食い下がろうとするシンだが、その視界の端にラファエルの顔が見えた。柔和な顔をしながらすっかりこちらを観察している冷静な視線を感じ、シンはそれ以上話すのをやめた。

「大丈夫だ。キラがあと半月もしないで帰ってくる。それにもしも時はカガリが着てくれる。オーブからここまでは艦艇でも1日かからん。心配ないさ」

アスランはそう言ってシンの肩を叩いた。シンは釈然としない表情を見せながらも、準備のためにブリーフィングルームを後にした。

## 第04話「始動する闇」

『各機！ 散開しろ！』

『くそつたれ！ 何て動きだ！』

怒号とともにザクウオーリアが閃光の中に散る。ほかのザクウオーリアが攻撃者を狙って射撃をするが、攻撃者はまるで魔法のようにその攻撃をすり抜けていく。

『司令部！ こちらジロンド隊！ 正体不明のモビルスーツの攻撃を受けている！ 数は……わからない！ とにかくたくさんだ！』

「バーカ……1機だよ」

コクピットの中でザクウオーリア部隊の通信を傍受していた少年が嘲笑を浮かべる。その間にもザクウオーリアが2機撃墜される。

『ちくしょう！ ちくしょう！ ちくしょおおおお！』

少年のモビルスーツが過ぎ去った場所をザクウオーリアのビームが灼く。高機動モード時に発生する機体の発光現象によって彼らは残像を見ているのだ。

「つまらないなあ…… コーディネイターって言ってもこの程度かよ  
少年はサイドボードからチョコレートを1粒取り出すと口に放り込んだ。戦場のど真ん中にいるというのに、彼の顔に緊張感はない。むしろ、リビングで寛いでいるかのような余裕さえうかがえる。

『アルマン・シトリー……テストは終了だ。母艦に帰還しろ』  
通信回線から男の声が聞こえる。少年はその声を聞くと退屈そうに顔をしかめた。

「りょーかい。でもさ、こいつら全然ダメじゃない？ よわすぎ」

『こいつらはザコだ。ただの哨戒中隊にすぎん。ザフトのレベルがこの程度だと思っていると痛い目を見るぞアルマン・シトリー』

男の声はあくまでも冷静である。アルマンと呼ばれた少年は、気分を害したらしく頬を膨らませる。

「帰還する。こいつら全滅させてもいいよね？」  
『手短にな』

アルマンが彼の母艦に帰還したのは、その4分後であった。

アルマンがモビルスーツから降りると、壮年の士官が彼を出迎えた。

茶色の髪と日に焼けた肌を持つ精悍な顔立ちの士官の右目にはレザー生地的眼帯がつけられていた。よく見れば肌のあちこちにも細かな傷がある。歴戦の軍人特有の乾いた厳しさを全身に漲らせた士官は、アルマンをともなつてブリッジへ向った。

「ナイトメアはどうだ？」

「サイコーだね。これならあのフリーダムも倒せるよ」

「勇ましいことだな……」

表情をまったく変えずに士官が言う。アルマンはまた頬をふくらませる。

「で、何か問題があったみたいだね。何？」

アルマンの言葉に士官の足が止まる。アルマンはその様子に満足げな笑みを浮かべた。

「……ナイトメアSが輸送中にザフト軍に拿捕された」

「あらら」

「“アザナエル”からの命令だ。ナイトメアとラピッドダガー4機で奪還に向う。もし、奪還が難しければ自爆させる」

アザナエルとの単語が出た瞬間、アルマンの顔が引き締まる。彼の深層意識に刻み込まれたアザナエルへの忠誠心がそうさせるのだ。  
「作戦開始までは？」

「本艦が作戦ポイントに到着するのは6時間後。先に潜入部隊を派遣し、連絡があり次第出撃だ。おそらく合計で8時間というところだろう」

「栄養補給と仮眠を取る。食事を用意して」

「了解した」

シトリーが踵を返す。さきほどとは違って変わった様子  
のシトリーを、士官は無表情のまま見送った。

少年の名前はアルマン・シトリー。ブルーコスモスが研究開発を進めていたエクステンデッドシリーズの最終完成型であり、新型モビルスーツ・ナイトメアのパイロットである。

## 第05話「イグニッション」

「さすがにLOWの司令官ともなると物々しいものだな」

シャトルから降りてきたアスランにイザークが声をかける。アスランはシャトルの後ろで着艦シークエンスにはいるムラサメBの編隊を見て苦笑する。

「昔のように1人で、というわけにはいかんさ」

「当然だ。いつまでも昔と同じでいられると思うな」

タラップを降りたアスランはイザークと堅く握手をした。イザークは満足げにアスランの手を強く握り締める。その後、アスランとイザークはそれぞれの副官を伴って司令部の応接室に向かった。

「ディアツカは？」

「ああ、今は別の空域へ哨戒任務にでている。例の騒ぎ以来、空域哨戒をさらに強化しているからな。主力部隊のほとんどは出払っている」

イザークはそう言ってガランとしたドックエリアを指差した。いつもなら10隻以上の艦艇が駐留しているはずのそこには、1隻のヴェサリウス級と2隻のガモフ級しかない。一国の軍司令部にしてはあまりに寂しい戦力である。

「そうか……」

ザフトの戦力低下は聞いていたが、ここまでとは思わなかった。その責任の一端が自分にもあることを知っているアスランは表情を暗くする。

「別に気に咎める必要はないぞ。貴様は貴様の職責を果たせ、俺は俺でそうする」

イザークが少し怒ったような声で言った。相変わらずの不器用な態度にアスランも心なしに表情を緩める。

「例のモビルスーツはそつちでも調べるのか？」

「ああ、そのつもりだ。できれば、拿捕までの経緯とモビルスーツ

の検査データも提供してもらいたい」

「了解した。すぐに用意させる」

イザークが隣にいた女性士官に目で合図する。女性士官は軽く敬礼をするとキビキビとした動きでその場を去っていく。アスランの後ろにいた副官のメイリンがその後を追った。

「で、お前の印象はどうだ？ 旧デュランダル派か？」

「おそらく違うな。連合系の技術が多数採用されているらしい」

「やはり北大西洋か……」

現在もつとも紛争が多いのは前大戦で事実上壊滅した北大西洋である。マルコ・ラファエルの尽力で中央政府は機能しているものの、ブルーコスモスの拠点だった地域だけに常に予断を許さない地区であった。

「しかし、あれは残党やテロリスト程度が作れるような機体じゃない。かなり組織だった連中の仕業だ」

イザークの言葉を信じるならばブルーコスモスやロゴスに変わる強力な組織が生まれつつあるということだろうか。アスランは黙ったままその組織の正体を考え続けていた。

「それとな……例の依頼の件だが」

「？」

イザークの口調が心なしかかわる。考え込んでいたアスランは、その声に顔を上げた。

「貴様の部下の……シン・アスカか。ヤツの」

「ああ……シンのことか。どうだ？ 手配できたか？」

アスランが聞くとイザークがうなずく。今回のプラント訪問にシンを伴ったのはイザークと密かに進めてきたある案件に関係がある。「クライン議員やアス八元首の支援もあったので思いのほか早く進んだ。改修はすでに完了しているから、シャトルでもっていけるだろう」

「すまん……恩に着る」

アスランが深々と頭を下げた。その様子にイザークが何事か言お

うとした瞬間、司令部内に向けたたましいサイレンが鳴り響く。イザークはすばやく立ち上がると、壁に設置されているインターフォンをとった。

「イザーク・ジュールだ！ 何があった！」

「は！ 第4モビルスーツデッキで火災発生です！ 現在消火班が鎮火中」

「すぐに警備兵を1個分隊向かわせる。それと基地全域に第二種警戒態勢を敷け」

イザークは手早く指示をしてインターフォンを戻す。アスランも異変を感じ、椅子から腰を上げた。

「どうした？」

「無人のモビルスーツデッキで火災だ。おそらく陽動だろうな。しかけてくるぞ」

歴戦の軍人だけにイザークの判断は的確である。手薄な場所での騒ぎを起こし、例のモビルスーツをどうにかしようという作戦だろう。アスランは胸からインカムを取り出し、シャトルを呼び出す。

「私だ。アスカ小隊長に連絡。すぐにムラサメB全機で司令部周辺に警戒線を張り、敵の攻撃に備えろ」

「了解、伝えます！」

インカムを切り、アスランはイザークのほうを振り向く。その時、警報を聞いたメイリンとイザークの副官が応接室に戻ってくる。

「司令！」

「メイリン、君はイザークたちと司令指揮室に避難。俺はシャトルに戻る」

シャトルにはもしものためにもってきた予備のムラサメBがある。敵戦力が不明な以上は少しでも数を揃えておきたい。アスランは徐々にモビルスーツで出撃することを決心した。

「さて、アスラン。俺も出るぞ」

「司令！」

イザークの副官が叫び声をあげる。イザークはその声に手を振っ

て応えると、アスランと共に廊下に飛び出し、そこで副官のほうを振り返った。

「シホ・ハーネンフース！ 貴様は司令部で事態収拾に全力を注げ。モビルスーツ部隊の指揮は俺がとる」

「……了解！」

副官の声を背中に聞きながらイザークはアスランと並ぶ。お互いの顔を見合わせ、2人の男はパイロットの顔に戻った。

『シトリー様、潜入部隊がのろしをあげました。出撃いたします』  
シトリーの右側から4機のこげ茶色のダガーが前に出る。連合のモビルスーツダガーLを強化改装した高機動モビルスーツラピッドダガーである。

「了解した。ダミーをばらまいてできるだけ派手に暴れるとしようか」

シトリーは金色の髪をかきあげ、ヘルメットをかぶった。バイザーをおろし、コンソールを操作するとバイザーがモニターと連動し、さまざまな情報が明示される。

「へえ、ザフトだけじゃなくLOWもいるみたいだね。面白そうだなあ」

シトリーの声はあくまでも明るい。彼はコンソールを叩き、ナイトメアのメインシステムを始動させる。

「さて、ボクの人形は動いてくれるかな？」

「なんだと？」

ザフト司令部の第1モビルスーツデッキにいた整備兵のヨウランは信じられない光景を見ていた。

ディアツカが先日運び込んだ正体不明のモビルスーツがゆつくりと上体を起こそうとしているのである。

整備班が徹底調査してもまったく起動しなかったシステムが今動き出している。そして、モビルスーツは立ち上がると両眼に冷たい光を灯す。

「！」

瞬間的に恐怖を感じてヨウランは近くの物陰に飛び込んだ。モビルスーツの頭部にあった小さなハッチがスライドし、機銃が火を噴いた。

逃げ遅れた整備兵たちが一瞬で肉塊に変わる。絶叫と血の匂いがたちこめるデッキ内でモビルスーツはまるで悪夢のごとく暴れ始めた。ヨウランはポケットにあったインカムを取り出し、司令部に事態を告げようとした。

「司令部！ こちら第1モビルスーツデッキ！ 例のモビルスーツが勝手に動き出している！ すぐにモビルスーツを回してくれ！ 手がつけられない！」

## 第06話「クロスファイト」

「キンバリー！ 左に回れ！ カウフマン！ 続け！」

敵機の動きを見ながらシンが指示を飛ばす。小隊長になったばかりのシンは、部下への指示をするだけで手一杯という状況である。

（だから、中隊指揮なんて無理なんだよ！）

今回のシンには、2個小隊6機のムラサメBの指揮も任されている。アスランが自分を評価してくれるのはうれしいのだが、さすがに慣れない仕事は精神的にキツイ。

さらに目の前にいるのは、今までとはまったく違う敵であった。

見た目は連合のダガータイプだが、その動きは軽快であり、シンの慣れない指揮ではうまく捕捉できない。

（くそ！）

何度もシンは指揮を放り出して自分だけで戦おうと思いかけた。しかし、それではアスランに任された仕事を放棄したことになる。いらつく自分を抑えながらシンは必死に部下たちの動きを追う。

『隊長！ ザフトから援軍！ 数は10機！』

「！」

ふりかえるとザフトのコロニー宇宙港からモビルスーツ部隊が発進している。見れば予備に積んできたムラサメBの機影が見えた。シンはアスランが出撃したことを知った。

「アスラン！ 別にアンタがこなくても！」

『ザフトの総司令部に空襲をかけてくる連中だぞ。戦力は1機でも多いほうがいい』

内心ではシンはアスランが出撃したことに安心感を覚えていた。これからは指揮はアスランに任せればいい。自分は戦うことに集中できる。

『シン隊長！ 新手です！ 機数は……うわぁ！』

ムラサメBの1機が爆発する。シンとアスランはすぐさま攻撃の

方向を確認し、迎撃のフォーメーションを組む。それに連携するよう  
うにザフトのモビルスーツ部隊も陣形を変えた。

「あそこか！」

シンはムラサメBをモビルスーツ形態に変形させるとビームライ  
フルを連射した。敵の回避方向を考えた予測射撃である。だが、敵  
はそのすべてを軽々とかわしこちらとの距離を詰めていく。

「ちいつ！」

接近してきたのは真っ黒い見慣れないモビルスーツである。シン  
をはじめほかのモビルスーツたちが射撃を繰り返す中、黒いモビル  
スーツは不規則な動きでビームの雨をかわす。

「こいつ！」

『シン！ 熱くなるな！ 前進するとダガータイプに防衛線を突破  
されるぞ！』

アスランの声にシンはダガーの影を追う。数倍のムラサメBとザ  
クウォーリアを相手にダガー部隊はデブリを利用した攪乱戦法を行  
っている。その動きは敵を撃破するというよりもこちらをひきつけ  
るためだけのよう見える。

「アスラン！ こいつらも陽動だ！ 本命は……！」

シンが最後まで言い終えないうちに宇宙港から1機のモビルスー  
ツが飛び出す。その機体を見てアスランとイザークが驚きの声をも  
らした。

『アイツは！』

その機体はシンの目の前にいるモビルスーツにそっくりである。

シンはそれがプラントに来る前にブリーフィングルームで見た核動  
力モビルスーツと同じであることに気が付いた。

「仲間を取り戻してきたのかよ！」

シンのムラサメBがビームサーベルを抜いて切りかかる。前方の  
黒いモビルスーツはそれをかわそうともせず、右腕で無造作にはら  
いのけようとする。

「な！」

ビームサーベルが黒いモビルスーツにあたる瞬間にはじきかされた。驚愕しながらも距離をとったシンは、黒いモビルスーツの周囲を金色の輝きが包んでいるのに気づいた。

「な、なんだよ……これ」

『アルミユール・リユミエール。あらゆる攻撃を弾くシールドさ』  
楽しいな子供の声が回線に飛び込む。それが前方にいる黒いモビルスーツから発信されたことを知り、シンは驚愕に眼を見開く。

「子供だと？」

『そうさ！ お前は子供に負けるんだよ！』

黒いモビルスーツがビームライフルを撃ってくる。すぐさま回避行動をとるシンだが、ムラサメBの反応が追いつかず、右足にビームがかする。

「くそ！ デステイニーなら！」

カスタムメイドのデステイニーに比べ、強化改装型とはいえ量産型のムラサメBではシンを完全に発揮しきれない。シンは機体の限界を感じながらも黒いモビルスーツに肉薄する。

『うざったいな。もう』

黒いモビルスーツが速度をあげる。その速さにあわせてシンもムラサメBを加速させるが、加速力が違いすぎて、簡単にかわされてしまう。

シンをかわした黒いモビルスーツへアスランのムラサメBとイザークのグフイグナイテッドが襲い掛かる。しかし、ムラサメBのビームもグフイグナイテッドのヒートロッドも黄金の輝きの前に弾き返されてしまう。

『無駄なんだよ！ 偽善者ども！』

パイロットの声に愉悦が満ちる。シンは唇を強くかむとムラサメBのスロットルを全開にする。

「うおおおお！」

『シン！ 無茶だ！』

アスランの制止も届かない。シンは眼前にいる黒いモビルスーツ

にぶつけるべく、ムラサメBを戦闘機形態に変形させ、一直線に突っ込んでいく。

『トッコーかい？ 自棄になるのはいいけどさあ』

黒いモバイルスーツがどんどん接近してくる。シンは全神経を敵に集中させる。

『もう1機忘れてないかな？』

「！」

シンのムラサメBがビームに貫かれる。反射的にコクピットへの直撃はされたものの、メインバーニアを抉り取られ、ムラサメBがバランスを崩す。

「もう1機のヤツか！」

『甘いんだよ。発想がさ！』

コントロールを失い旋回するムラサメBに黒いモバイルスーツが迫る。シンは墜落を覚悟し、思わず眼を閉じた。

(ステラ、マユ、レイ。お前らのところに行くよ)

一瞬、死を感じたシンだが、その予測は裏切られた。眼を開けると、黒いモバイルスーツの攻撃をアスランとイザークのモバイルスーツが防いでいる。

『何をやっているシン！』

『いつまで呆けているつもりだ。さっさと後退しろ！』

2人の怒号に押されるようにシンはムラサメBのコントロールを取り戻し、後方にさがった。獲物を取られた形になった黒いモバイルスーツのパイロットは苛立ちの声をあげた。

『あゝ、うざったい！ お前らもういいよ！ 死ね！』

2機並んだ黒いモバイルスーツが同時に動く。すぐに防御を固めるアスランとイザークだが、強力なビームをくらい、それぞれのシールドが無残に溶解する。

『トドメええええ！』

『くっ！』

ビームサーベルを抜いた黒いモバイルスーツが同時にアスランとイ

ザークに切りかかる。シールドを失った2機は後退を余儀なくされる。しかし、加速に勝る黒いモビルスーツがあつという間に距離を詰め、再度切りかかるうとする。その光景を見て、シンはあることに気づいた。

（こいつらまったく動きが同じじゃないか？ まるで鏡みたいに）

「！」

アスランとイザークを葬ろうとしたアルマンの背筋を冷たい汗が流れる。研ぎ澄まされた感覚が自分に迫る危険を感知したのだ。

アルマンは本能的な動きでナイトメアに回避行動をとらせる。その0.5秒後、2機のナイトメアがいた場所にすさまじい数のビームが集中する。

「新手かよ！」

見上げると20機以上のモビルスーツ部隊がこちらに向かっているのが見える。おそらく哨戒任務から戻ってきたザフト軍だろう。次々と現れる邪魔にアルマンは苛立ちを募らせる。

「ゴミごときがボクの邪魔をするなんて、生意気さ」

『シトリー少佐』

特殊コードの通信回線から上官のギイ大佐の声が響く。

『潜入部隊は撤収を完了した。モビルスーツ部隊も撤収しろ』

「いやだよ！ こんなヤツら皆殺しにしてるんだ！」

金切り声でアルマンがギイに反抗する。回線の向こうでギイが小さく息をつく。

『ナイトメアは未完成だ。不完全な状態での戦闘は極力さける。これはアザナエルの指示だったはずだぞ』

「……くっ、撤退するよギイ」

撤退を決意したアルマンがナイトメアの方を変え。そのモニターの端に見えるシンたちのモビルスーツを見た彼の眼に憎悪が浮

かぶ。

「絶対に許さないよ。今度会ったら殺す」

小さな声でそうつぶやくとアルマンはナイトメアを加速させた。

ザフト軍の数機がその背後にビームを放つが、ことごとくがアルミニウム・リユミエールに弾き返されてしまう。

そして2分後、ザフト軍はナイトメアを見失った。

## 第07話「新しき剣」

「くそっ！」

損傷したムラサメBから降りたシンは、デッキ床にヘルメットを叩きつけた。おのれの不甲斐なさに憤るシンに、メイリンが声をかける。

「ケガはないのシン？」

「あるわけないだろ！ アスランとイザークさんに助けられたんだからさ！ まったく何のための護衛だよ！」

壁に拳を叩きつけシンは叫ぶ。ムラサメBのうち帰還したのは5機。半数近い部下を失い、さらにアスランたちの援軍に救われたとなれば自分の立場はない。

「荒れているな。シン」

ふりかえるとイザークがこちらに歩いてくる。その後ろにはデイアツカたちザフトのパイロットらが続く。シンは姿勢を正し、敬礼をする。

「は！ 申し訳ありません。援軍ありがとうございます！」

「すまん。俺らも急いで引き返したんだがタイミングを逃した」

「……ということだ。それにこちらが敵の接近を許したことも大きい。お前の落ち度ではない」

デイアツカを小突き、イザークが答える。それでもシンは何も言わずに暗い表情をする。

「シン・アスカ。アスランに頼まれていたものをお前に渡す。ついでこい」

「アスランが？」

イザークは歩調をまったく緩めず格納庫のほうへ歩いていく。シンはまったく事情がわからなかったが彼らについていくことにした。

「ムラサメBはどうだ？」

「え？ ああ、いい機体です。でも……」

量産型モビルスーツの中でもムラサメBはトップクラスの高性能機である。だが、あの黒いモビルスーツには太刀打ちできなかった。シンは唇をかみ締める。

「オレの腕が悪いせいで……すみません」

「ふん。敗戦の言い訳を機体のせいにしなだけ見込みがあるようだな……」

不機嫌そうな口調でイザークが鼻を鳴らす。格納庫に入ると、イザークはその一隅を指差した。そこには1機のモビルスーツが鎮座している。

「あれは……」

「ZGMF-X42S2。お前が昔乗っていたデステイニーのチューンモデルだ。各部の見直しによって、反応速度で22%、出力で15%向上している。LOWの依頼でザフトが建造していたものだ」  
見慣れた機体を見上げ、シンは感慨にふける。細部の違いはあるものの、そのシルエットは紛れもなくデステイニーである。

「こいつをLOWに？」

「ああ。アスランが貴様のために用意していたものだ。感謝するんだな」

「オレにですか？」

シンは驚いてイザークのほうを振り向く。イザークは何も言わずに首を立て振った。その背後から制服に着替えたアスランが歩いてくる。

「どうだシン？ 気に入ったか？」

「アスラン……でも、俺……」

何か言おうとするシンの肩をアスランが叩く。

「これからLOWは確実に忙しくなる。強力な戦力は1機でも欲しい。今日のことを忘れるとは言わない。ただ、今日の経験を無駄にするな」

「落ち込むばかりで前に進めないような男になるなよ」

イザークがアスランのほうをチラリと見る。アスランは苦笑して

前髪をかきあげた。アスランとイザークを見比べ、シンは深々と頭を下げる。

「ありがとうございます！　ありがとうございます！」

熱くあふれる涙で頬を濡らし、シンはアスランとイザークに最敬礼した。

## 第08話「神の子ら」

ザフト本部から退却したアルマンらは、母艦である特殊艦アイオンと合流し、一路彼らの本拠地である隕石基地“インヘルノ”に帰還した。

アイオンがドックに係留されると整備兵が一斉に作業を開始し、任務を終えたアルマンはギイとともに艦を降りた。

「よう、アルマン」

通路を歩く2人の前に、黒髪の少年が姿を現す。アルマンと同じくエクステンデッド出身の兵士ジャック・シヤクスである。アルマンはジャックの言葉を無視して、歩調を速める。

「おい待てよ。挨拶もなしかよ」

やや声を荒げてジャックはアルマンの細い右手をつかむ。アルマンはその手を邪険に振り払いのけた。その行為にジャックは顔を赤くする。

「ケンカ売ってるのかよ！」

「売ってるのはそっちだろ。何だよセンパイ」

アルマンが最後の言葉をことさら強調する。ラボに入ったのはジャックのほうか7年早い。しかし、ラボでの成績はアルマンのほうか上であった。そのことでジャックはアルマンに激しい敵意を抱いているのだ。

ジャックがアルマンに詰め寄る。険悪な空気が流れる2人をギイが制止する。

「やめるアルマン。トラブルを起こすな」

「大佐。それはこいつに言っちゃってよ。僕だってこんなヤツ相手にしたくないよ」

「何だと！」

つかみかかるうとするジャックの肩をギイがつかむ。その力の強さにジャックの顔がゆがむ。

「味方同士で争っている場合か、さつさと行くぞ。シャクス貴様も呼ばれているだろうが」

「……わかったよ大佐」

しぶしぶギイの言葉に従ったジャックは駆け足でその場を後にした。アルマンは去っていくその背中にむかって舌を出す。

「手間をかけさせるな。行くぞ」

「りょ〜かい」

2人は遅れを取り戻すかのようにやや足を速めてインヘルノ中央部にある大聖堂へと向かった。

インヘルノ大聖堂には、さきほどのジャックをはじめ、組織に属するエクステンデッドと指揮官たちが勢ぞろいしていた。アルマンとギイは空いている席を見つけ、腰を下ろす。

「すごいな〜。こんなに集まるのなんて何ヶ月ぶりかな？」

「黙っている。始まるぞ」

ざわめいていた場内が一瞬で静まり返る。広間の中央にホログラムが投射され、覆面を被った長身の男が現れる。その出現にあわせ、居並ぶ者たちが一斉に立ち上がった。

「混沌の果てに秩序を！」

全員がこの言葉を唱和する。すると覆面の男はなんともうなずき、右手で着席を促す。

「諸君……」

覆面の男が静かに言葉を発し始める。さきほどまで落ち着きのなかったアルマンも今は余所見をやめて、男の言葉を待つ。

『愚かな偽善者どもの支配によって世界は間違った方向を歩んでいる。その世界を正すべく我々が日夜努力を続けているのは周知の事実である』

男が言葉を切る。それと同時に広間の一角に設置されたモニター

が点燈し、世界平和を訴えるカガリとラクスの姿が映し出される。

『彼女たちの言葉は偽りである。世界平和という美名に酔い、彼女たちは地球圏を己の膝下に置こうとしているのだ』

そこで画面にキラとアスランが映し出される。

『この男キラ・ヤマトはアスハの弟である。彼はコーディネイターであり、ザフトの元高官の子息アスラン・ザラと懇意である。弟である彼を使い、オーブはナチュラルでありながらコーディネイターにしつぽを振り、そして同胞たる我ら売り渡そうとしている』

彼らの中で怒りの声上がる。この場にいる者たちの中には旧連合でオーブと干戈を交えたものも少なくない。

『もはや限界である！ 彼らに任せればナチュラルはコーディネイターによって滅ぼされてしまう！』

仮面の男が拳をふりあげる。聖堂内の空気が徐々に高ぶっていくのをアルマンは感じた。

『さいわいにして我らには力がある！ ブルーコスモスとロゴス残党の諸君からの協力を得て、我々は戦力を蓄えることに成功した！』

スクリーンが切り替わる。インヘルノ内のドックに係留される宇宙艦隊とモビルスーツ部隊を見て、あちこちから感嘆の声が上がる。そして、その声は1つとなり、彼らは覆面の男の名前を連呼する。

「アザナエル！ アザナエル！ アザナエル！」

『今こそ反抗の時である！ ヴィオロンをかきならせ！ 裏切り者と異端者に断固たる鉄槌を！』

大聖堂を歓喜が包む。アルマンやジャックらもその歓呼にあわせてアザナエルの名を叫ぶ。

『かねてより計画していた“ナイトメア”作戦を開始する。諸君らの一層の奮闘を期待する！』

聖堂内のボルテージが最高潮に達する。割れんばかりの拍手と歓呼の中、ギイは1人だけ冷静な眼でホログラム投射されている自分たちの指導者の顔を見据えていた。

## 第09話「異変」

はじまりはささいなものだった。

プラントの1つシャオイエンコロニーに住むコーディネイターのルー・クオファンは、飼育しているニワトリが早朝になっても鳴かないことに不審を覚えた。

「どうしたんだ？ 病気かな」

朝食を作り始めている妻に何も告げずに、クオファンは鶏舎へとむかった。遺伝子改良を施したニワトリであるから病気の心配はほとんどない。クオファンはドロボウの可能性を心配していた。

「？」

さきほどからなぜか胸が苦しい。じつとりと汗ばむ手をズボンでぬぐい、クオファンは鶏舎のドア錠を外す。

「これは……」

そこにあっただのは数千羽のニワトリであった。彼らはグッタリと体を横たえている。何匹が動いているものの、その力は緩慢で弱弱しい。

「ど、どういう……」

突然の不快感にクオファンは膝を付いた。嘔吐感がこみあげ、思わず床の上に吐き出してしまう。

「う、うわ」

膝の力が抜け立ち上がることができない。徐々に意識が混濁し、クオファンは嘔吐物のなかに突っ伏した。

「伝染病だと？ プラント内ですか？」

LOW本部に帰還したアスランは、報告書をめくる手を止めてラファエルを見上げる。ラファエルはいつもと違って真剣な表情でう

なずく。アスランは一抹の不安を覚えつつも、笑みを作って見せた。  
「ありえないよ。コーディネイターは地球における致命的な疾病への耐性遺伝子をもっている。そのコーディネイターのいるプラントで伝染病など……」

「確かな筋からの情報です」

ラファエルはアスランの机の上に書類を置いた。報告書を置いて書類を手についたアスランは、それを眺めているうちに表情を硬化させていく。そして、一通り読み終えると書類を置き、ラファエルを再び見上げた。

「間違いないんだな？」

「ええ、プラント政府は今回の出来事を隠したがっていますかね。農業コロニーが少なくとも4つ壊滅。死者はすでに500人を越えています」

「……」

アスランは眉間にしわを寄せたまま沈黙した。徹底的な環境管理が行われているプラント内で自然発生などありえない。それに伝染病が発生したコロニーはどれも相当距離が離れており、直接的な接触も考えにくい状況である。

「細菌兵器か？」

「……ええ、おそらくは。これはボクの予想ですがコーディネイターにのみ感染するものでしょう」

農業コロニーには家畜の飼育指導などでナチュラルが何人か住んでいた。だが、彼らには発症が見られていないことを考えるとアスランもラファエルの意見に頷かざるを得ない。

「細菌テロとは予想外だったな」

今までアスランらLOWが相手にしていた組織は、モビルスーツをはじめとした直接武力を多く用いる集団ばかりであった。そのため、LOWの部隊編成もそれに応じたものになっており、このような手段を使う相手と戦うのはまったく不向きである。

「謎のモビルスーツに細菌兵器……アスラン司令も苦勞が絶えませ

んね」

そう言ってラファエルは残りの報告書を机に置いて、アスランの執務室から出て行くとした。その背中へアスランは1つの疑問を投げかけた。

「このことをどこから知ったんだラファエル司令。ラクスからの連絡なら俺に報告が入るはずだ。誰だ？」

アスランの問いにラファエルは軽く困った顔をした。

「何、ちよつとしたルートですよ。私も司令の留守番をしているだけでは無能のそしりを受けかねないと思ひまして、友人たちを使って情報収集したまでです。あくまで個人ルートなので情報源は勘弁してくださいよ」

そう言ってラファエルは部屋を出て行った。アスランは机に座り、ラファエルの言葉と態度に何かおかしな点はなかったかをしきりに考えていた。

## 第10話「分裂」

黒檀のテーブルを見つめながらラクスは相手の言葉が終わるのを待っていた。

「……でありますから、私としてはLOWに派遣しているザフト兵の原隊復帰を提案したいのです」

初老の男が発言を終えて椅子に座る。周囲にいるほかの者たちも賛同するように首を縦に動かす。

ここはプラント政府の中枢たる評議会議員たちの会議室。前大戦後にプラントに帰還したラクス・クラインは評議会の一員としてこの場に座っている。

「先日の司令部への空襲。そして今回の細菌テロとプラント市民は常に危険にさらされております。地球圏安定への努力も重要でしょうが、この際我々は一度足元を見直すべきではありませんか？」

ラクスの正面に座っている30代半ばの男が彼女を見据える。男の名はルドルフ・ヘイワーズ。デュランダル政権時からその内政手腕でプラントを支えた辣腕家である。ラクスは彼の視線を受け止め、立ち上がった。

「ヘイワーズ議員の意見はたしかに納得できるものと思います」

「では、賛同ということでしょうか？」

ヘイワーズの言葉にラクスは静かに首をふった。

「ここで皆様方に問いたいのはLOW創設の理念であります。二度と戦争を起こさぬために、どこの国にも属し、どこの国も属さぬ抑止力としての戦力がLOWでありましょう。そこから我々が離脱するということは、世界各国の動揺を生み、LOWの存在そのものが問われることとなります。そして、しいてはプラントへの不信感へと繋がるのではないのでしょうか？」

「ですが、現時点でLOWの活動は地球上で手一杯の状態です。そして、我々には自分の身を守るだけの戦力はない。そうだなジュー

ル国防委員」

ヘイワーズの言葉にラクスは右に座っているイザークのほうを観た。イザークは椅子から立ち上がり発言する。

「現在、我がザフトの戦力は通常時の60%ほどです。編成定数を満たしている艦隊はわずかに2個艦隊のみで、それも正規艦隊ではなく哨戒目的の巡察艦隊です」

「つまり、大規模な敵の侵攻があった場合、守りきれないということですか？」

中年の女性議員が発言する。イザークはチラリと女性議員を見て、言葉を続ける。

「もちろん全力は尽くします。しかし、まともな防衛体制を維持するにはプラントのいつくかを放棄せざるを得ません」

そう言っただけイザークは眼を閉じ、席に着いた。ヘイワーズは満足げな表情でラクスのほうを向いた。

「……これでもLOWに戦力を残せとおっしゃるか？」  
その言葉にラクスは天を仰ぎ、瞳を閉じた。

プラントへの細菌テロ事件を境に、地球圏は三度動乱の嵐が吹き荒れ始めていた。

沈静化を見せていたユーラシア、中近東でのブルーコスモス残党の活動が再び活性化。アザナエルの支援を受けた彼らは大規模な武装蜂起を行った。

「くっ！」

対空砲火をさけるためにキラはストライクフリーダムレバーを左右に激しく動かす。その操作に合わせ、スクリーンに映る空と陸がめまぐるしく上下に切り替わる。

「キラ様！ これより自分の小隊はトマーズ小隊は共に敵対空砲座を攻撃します！ 上空の部隊はお任せします！」

「了解！ 気をつけてマセラティ一尉！」

オーブから参加したマセラティは慣れない指揮官として仕事に苦勞するキラをよく補佐してくれる。マセラティの乗るムラサメBが急降下に入るのを横目に、キラは飛来してきたウインダムの両脚をビームサーベルで切り払った。

先日までブルーコスモス残党が保有していたモビルスーツは旧式のダガータイプが主力だった。しかし、ここでの主力は比較的新しいウインダムである。キラはこの武装蜂起の背後に巨大な組織の存在を感じていた。

（滅ぼしても、新たな組織がとつてかわるだけ。そう言いましたね議長）

デュランダルの顔を思い出しながら、キラは次々とウインダムを蹴散らしていく。現時点で地球最強の機体の1つであるストライクフリーダムに乗ったキラを足止めできる人間は、LOW内でも数人しかいないだろう。キラは確実に敵軍司令部に接近していた。

「！」  
司令部陣地に近づくストライクフリーダムに強力なビームが放たれる。瞬間的にそれをかわしたキラは、前方に強力な敵の存在を感じた。

『さすがは最強のコーディネイターだな！ ほめてやるぜ！』

観れば司令部の上空に白いモビルスーツが浮遊している。背中に翼のようなバインダーがついた細身の機体がこちらに巨大なビームライフルを向けている。モビルスーツはライフルを捨てるとビームサーベルを片手にストライクフリーダムへ襲い掛かる。

モビルスーツの加速はキラの予想を上回った。一瞬で間合いを詰めて切りかかるモビルスーツの攻撃を、キラは反射的にビームライフルで受け止める。ビームの刃がライフルを両断する一瞬の間をつき、キラは間合いを取る。

『あれをかわすのかよ！ おもしれえ！ おもしれえよアンタ！』  
モビルスーツのパイロットは愉しくて仕方がないといった口調の

まま第二撃を放つ。キラはストライクフリーダムのサーベルを抜き、その攻撃を受け止める。交錯したビームの火花が両者の装甲を焼く。すぐさま距離をとった2機は次の攻撃の隙を伺いながら司令部上空で対峙する。

『そうか……お前がキラ・ヤマトか……』

「キミは……」

戸惑うキラの声を通信回線越しに聞きながら、モビルスーツのパイロットは愉しげな笑みを浮かべる。黒髪の長髪と鋭く不敵な面構え。それはインヘルノでアルマンとののしりあったジャック・シャクスと同じであった。

## 第11話「ブーステッド・ソルジャー」

「ジャックめ……」

ヴァイオラ・シヤクスは親指の爪を噛みながら、モニターの映し出されるウラヌスとストライクフリーダムとの戦闘を見ていた。

ジャックの双子の姉であるヴァイオラは、弟の交戦的な性格を愛していた。だが、このような乱戦状態で、1つの敵だけに意識を集中させるのは危険である。彼女はヘルメットをつかむと自分のモバイルスーツに乗り込んだ。

アザナエル軍が開発した核動力モバイルスーツの1つスレイヤー。チームサイズとドラグーンで武装した汎用モバイルスーツで、ヴァイオラにアザナエルが与えた機体である。

「司令。私も出ます」

「あ、ああ。新手のLOWが接近中という報告もある。よろしく頼む」

「了解です」

手首にまいていたゴムバンドで長い髪を手早くまとめたヴァイオラはヘルメットを被って返事をする。現在、彼女とジャックはブルーコスモス残党援護のためにこの中近東に派遣されている。今通信した男はブルーコスモスの元高官であった。

（俗物め。我々がいなければ何もできんか）

スレイヤーを起動させたヴァイオラは、自分の指揮下にある部隊のほうを観た。寄せ集めの軍隊であるブルーコスモス残党と違い、統制がとれている。ヴァイオラはそのうちの1機と回線を繋げた。

「大尉。ベーオウルフの調子はどう？」

「良好です。ラピッドも悪くない機体でしたが、こいつは別格ですな」

現在、アザナエル軍が使用しているモバイルスーツは、ダガータイプの高機動モデルであるラピッドダガーではない。新設計のモバイル

スーツのベオオルフである。ザフトの上位量産機グフに対抗して設計されたこの機体は、量産型としては破格の高性能を誇っていた。「LOWの蚊トンボが対空砲座を潰して接近しています。大尉はそちらを頼みます」

『了解であります。ヴァイオラ殿は？』

スレイヤーのエンジンの回転数をあげながら、ヴァイオラは司令部から送信されているウラヌスとストライクフリーダム映像を見ている。

「弟の御守です。戦果、期待しててくださいね」

ヴァイオラが微笑むとベオオルフに乗った大尉が野太い笑みを返す。ヴァイオラは真顔に戻り、スレイヤーのスロットルレバーをゆっくりと倒す。

「ヴァイオラ・シャクス！ スレイヤー行きます！」

スロットルを解放し、ヴァイオラは弟とキラを目指して機体を上昇させた。

「新手か！」

ウラヌスを攻撃していたドラグーンの1つが粉碎される。キラは素早くレバーを引き絞って地上との距離をとる。観ると下方から赤いモビルスーツが高速で上昇してくるのが見える。

『姉貴！ こいつは俺の獲物だぜ！』

不満そうな声を出しながらウラヌスが切りかかってくる。運動性では向こうのほうが上であることを知ったキラは、格闘戦を避けるように機体を降下させる。しかし、その先には上昇してきたヴァイオラのスレイヤーが迫る。

『もらった！』

スレイヤーのビームサイズとウラヌスのビームサーベルがストライクフリーダムを襲う。だが、その瞬間にキラは神業的な操縦で2

本のビーム刃を潜り抜ける。

「ちい！ 小賢しい！」

「油断しないでジャック！ こいつはキラ・ヤマトなのよ！」

紙一重で2機の間を突破したキラの額にいやな汗が浮かぶ。なんとか成功はしたが今のは危ない賭けだった。今まで何人も強敵と戦ってきたキラだが、ジャッククラスの相手となると数えるほどしかない。汗が顔をつたう不快感に耐えながらキラはジャックたちの追撃に備えた。

「！」

視線を転じると司令部付近でムラサメ隊がブルーコスモス軍と戦っているのが見える。練度では勝っているはずのLOWであるが、どうも旗色は良くない。

「マセラティ一尉！ こちらは新型モビルスーツ2機と交戦中！」

そちらは大丈夫ですか」「キラ様！ 我がほうも敵の新型モビルスーツと交戦中！ 損害は甚大です！」

「すぐに行きます！」

ストライクフリーダムをムラサメ隊に振り向けようとした瞬間、背後の殺気に反応し、キラは回避行動を取る。振り返るとウラヌスが捨てたはずのライフルを構えているのが見えた。

「ちい！ 外した！」

「くそ！ 邪魔ばかりして！」

ストライクフリーダムのドラグーンが一斉に射出させる。するとウラヌスの隣にいたスレイヤーもマントのようなバインダーからドラグーンを射出する。ドラグーン同士がスズメバチのダンスのように縦横に交錯する間を縫って、ウラヌスはストライクフリーダムとの距離を詰める。

「余所見はいけないなあ！ キラ・ヤマト！」

ウラヌスのサーベルを受け止めるたびにストライクフリーダムのサーベルが悲鳴をあげる。気ばかり焦るキラだが、目の前にいる2人のパイロットはそう簡単に勝てる相手ではない。その時、コクピ

ツトに緊急通信が入る。

『こちらアンディ・バルトフェルド！ LOW中近東派遣部隊全機に命令！ これよりミサイルによる空襲をしかける。その隙を突き、ただちに戦闘を中止し撤退せよ！ このエリアより撤退する！』  
後方の部隊で指揮を執っているバルトフェルドからの通信である。  
エリアよりの撤廃はイコールLOWの敗北を意味する。キラはその命令が信じられなかった。

「どういうことですかバルトフェルドさん！」

『どうもこうもない。こちらの見通しが甘かった！ ここは一度戦力を立て直そうってことだ。ここを固執すれば被害が増えるだけだぞ』

バルトフェルドの判断は正しい。だが、それだけにキラの心に悔しさが募る。世界規模の治安維持軍とはいえLOWの戦力は限定されている。無制限に出血を強いられるわけにはいかないのだ。

「くそ！」

苛立ちを振り払うようにキラはサーベルでウラヌスに斬りかかった。反撃を予期していた相手にあっさりかわされるものの一瞬の間が開く。キラはその瞬間、ストライクフリーダムのパニアを全開にして後退に移った。

『逃げるのかキラ・ヤマトともあろうものがさ！』

通信回線からはシャクスの嘲りが聞こえる。だが、キラは何も言わずに機体を後退させていく。眼下ではマセラティたちムラサメ隊も次々に後退していくのが見えた。

12月11日。中近東で蜂起したブルークコスモス残党軍はLOWを退けることに成功。LOWの撤退とともにペルシャ湾からトルコまでの地域を制圧下に置くこととなった。

## 第12話「囚われたルナマリア」

キラたちが中近東で苦戦を強いられていた頃。LOW幹部の1人マルコ・ラファエルは宇宙にいた。

北大西洋連合所属の大型宇宙戦艦ハンニバルに乗り込んだ彼は、LOW宇宙軍と共に一路プラントへと進路をとっていた。目的はザフトのLOW離脱を阻止するためである。アスランが各方面に働きかけて編成した宇宙艦隊で、手薄なザフト防衛網を補強するのが彼の任務であった。

ただし、その戦力はお世辞にも十分といえるものではない。モビルスーツもムラサメBのほか、ウイングダムやM1アストレイの混成部隊であるし、艦艇も旧式が多い。よくて正規の1個艦隊ほどで、とてもザフトの戦力不足を補えるほどではない。

「コーディネーターの危機を助けるのはナチュラル出身のボクの役目か……。さすがにザラ司令は政治を理解しているね」

ブリッジシートに座って紅茶の香りを楽しんでいたラファエルは、隣に立っている士官へ笑みをなげかけた。士官はその笑顔にちよつと困った顔をしたが、すぐに表情を整えて前方を見つめる。

「ホーク隊長。表情が硬いな。もっとスマイルスマイル」

「……」

ラファエルが笑みを作ってみせる。ルナマリアはこの軽薄な上司にどう対応していいかわからず、渋面を作ったまま姿勢を維持し続けた。ルナマリアをからかうのに飽きたラファエルは、残りの紅茶を飲み干すと長い指を組んで楽しげに宇宙空間を眺める。

「ザラ司令からはどんな密命がくだっているんだい？」

「！」

何気ない口調で言ったラファエルの言葉は、ルナマリアに強烈な一撃をくわえることに成功した。驚いたルナマリアは、笑顔の上司を見下ろし息を飲む。

「おそらくボクとブルーコスモスの関係を疑っているんだよね。まあ、そう思われても仕方ない部分あるけどさ」

「いつから……」

思わずラファエルに問いかけそうになったルナマリアが慌てて言葉を引つ込める。ラファエルはしてやったりと言った顔になり、当番兵をフィンガースナップで呼び紅茶を2つもってくるように命令した。

「まあ見え透いているよね。キミはザフト時代の彼にとって部下にあたる。まあ、その後いろいろありはしたが、最終的に彼にとってキミは頼りになる部下だろう。あのシンの坊やと一緒にさ」

ルナマリアは黙ったままである。ラファエルは彼女のほうを見もせずに言葉を続ける。

「この忙しい中だ。手元に置いておきたい優秀な駒を未練もなく渡すのは明らかにおかしいだろう？　そして、ボクについての噂。2つを合わせれば……キミは」

ラファエルは笑顔でルナマリアのほうを指差す。

「アスランくんが放った監視役さ」

さも愉快そうにラファエルは笑う。その無邪気な笑みにルナマリアはぞつとするような寒気を感じた。ルナマリアが何か言おうとした時、ブリッジ全体に警報が鳴り響く。ラファエルは表情を引き締め、前方に注意を集中させた。

「どうした！」

「前方に所属不明のモビルスーツ部隊です！　数は……11」

オペレーターの声にルナマリアはラファエルのほうを見た。彼はシートに座りなおし、眉をしかめながら状況を見守っている。そこに驚きの表情はなく、むしろ当然といった色が強い。

（やはり……）

アスランの予想は正しかったのだ。やはりラファエルはこの一連の事件に深く関わっている。ルナマリアはそう確信し、ラファエルへの視線をさらに鋭くする。

「ムラサメ隊を出撃させる。艦隊はこのコースを維持。ホークくん！」

ラファエルがルナマリアのほうを振り向く。その眼には不思議と陰謀の暗い翳はなく、ただ指揮官としての厳しさに満ちていた。

「は、はい！」

「ボクへの疑念はどうとつてもらってもいい。ただ、この艦隊がプラントにたどり着かなくてはいけないのは確かだな？」

「はい！」

そうだ。ラファエルがどんな陰謀を巡らそうとこの艦隊はプラントにたどり着かなくてはいけない。プラント防衛はLOWにとつても重要な使命である。そのために自分がラファエルの監視をしているのではないか。ルナマリアはそれを思い出し、ラファエルの意図をも察知した。

「ルナマリア・ホーク！ キミはムサラメB1個中隊を率いて敵モビルスーツを迎撃！ 1機も失うな！ そして1隻も沈めさせるな！」

「了解しました。ルナマリア・ホーク、出撃します」

現在、プラントにはデステイニーの完熟訓練をしているシンがいる。彼に会うまでは死ぬわけにはいかない。ルナマリアは床を蹴ってモビルスーツデッキへと走っていった。

「さすがに数はあるな！」

アルマンは飛来するモビルスーツ部隊と艦砲をかわしながら笑みを浮かべていた。

ナイトメアの調整は完璧である。アルマンのバイオリズムと完全に同調したシステムが、彼の思考をすばやく無人機へと伝達する。

同時に10機もの無人機ナイトメアSを操りながらアルマンは言いようのない高揚感に包まれていた。

「ほらほらほら！」

ナイトメアのビームライフルから放たれたビームがウインダム  
のシールドを跳ね飛ばす。敵はどれもたいした腕ではない。シンやア  
スランと互角以上に戦ったアルマンにとっては、まるで物足りない  
相手であった。

「遊んでやるよ。ザコどもめ！」

アルマンがシステムをオートに切り替えると10機のナイトメア  
が同時に別のモビルスーツを相手にする。無人機とはいえ、それぞ  
れが強力なビーム砲とアルミューレ・リュミエールを装備している  
モビルスーツである。LOWのモビルスーツ部隊はこの無人の兵士  
たちに苦戦を強いられた。

「そこまでよ！」

戦いの中心にいるアルマンのナイトメアに向けてビームが放たれ  
る。余裕をもって受け止めたアルマンは、こちらに急接近してくる  
赤いムラサメBを認識した。

「赤いやつ！ よし！」

いたずらっぽく笑ったアルマンはナイトメアのレバーを引く。せ  
せら笑いながら彼はナイトメアのバリアを解除し、赤いムラサメB  
を待った。

「かかってこいよお！ 赤いやつ！」

「なめるなあああ！」

絶叫は女の声である。アルマンはそれに気づき、わずかだけ悲し  
そうな顔をした。だが、すぐに何かを思いつき笑顔に戻る。

急接近したムラサメBがナイトメアの眼前で変形する。その瞬間  
放たれたビームをアルマンは華麗な操縦でかわす。

「なっ！」

「やるねお姉ちゃん！ でも甘いよ。チョコレートよりもね」

ナイトメアの右腕からビームサーベルが飛び出る。アルマンはそ  
れを軽くふってムラサメBのライフルを両断する。ムラサメBはす  
ぐさまサーベルを抜くが、その右腕をナイトメアのCIWSが吹き

飛ばし、サーベルは腕ごとムラサメBから離れていった。

『く！ まだまだあ！』

ムラサメBは左腕でサーベルを抜こうとした。だが、それもアルマンに察知され、左腕ごと切り落とされる。頭部C I W Sで反撃をするがナイトメアの左腕が伸び、頭部ごと潰されてしまう。

「無駄無駄！ あきらめなつて！」

『あきらめるなんて言葉。私の辞書にはないのよ！』

「それじゃ、お姉ちゃんの前書は欠陥品だよ。アハハハ」

ムラサメBの腰から小型ミサイルが発射される。しかし、ナイトメアのPS装甲がミサイルごときで傷つくはずもない。アルマンはムラサメBの頭部をつかんだま、サーベルで機体の下半身を切り裂いた。

「よし、これでオーケイっと。アイオン、こちらアルマン・シトリ」

アルマンが暗号回線でアイオンと連絡を取る。モニターにはノイズまじりの画像が映り、ギイの無表情な顔が現れた。

『なんだアルマン？ 敵艦隊を攻撃しろ。ただし全滅はさせるなよ。旗艦は残せ』

「それはわかっているって。ただ、ボクにご褒美をちょうだいよ大佐」  
「いたずら小僧のような顔でアルマンがニヤリと笑う。ギイは表情も変えずにアルマンの言葉を待った。」

「LOWのパイロットを捕虜にした。これをお土産にするよ。いいよね」

まるで蝶々を捕まえた少年のような口調でアルマンが言う。ギイは一瞬だけ困った表情を浮かべたが、何も言わずに首を縦に振った。こうしてルナマリアはアザナエル軍の捕虜となったのである。

## 第13話「姉弟」

その13「姉弟」

数時間後、ナイトメアによって捕獲されたルナマリアは、簡単なボディチェックをされただけで敵艦の一室に幽閉された。

「くそ！　なんてこと」

幸いにしてケガはないものの敗北したのは間違いない。ルナマリアは椅子に座って頭をうなだれたまま悔し涙を浮かべる。

「こんなんじや……シンの役に立つことなんてできないじゃない」  
わずか1年にしてLOWのトップエースとして活躍するようになったシンに、少しでも近づこうとルナマリアは血のにじむような努力を続けてきた。だが、現実にはシンと自分の差は開く一方であった。それでも確実に任務をこなすことで足手まといにならないことだけが戦士としてのルナマリアの支えだった。

「だめだなあたし。こんな……こんなんでさ……」

頬を涙が伝う。このままではアスランに任された役目が果たせない。こんなことなら出撃しなければよかった。ルナマリアは涙をぬぐいながらそう考えはじめていた。

（そうか……もしかして……）

彼女が出撃したのは自分の意思もあるがラファエルの指示である。もしも、ラファエルがブルーコスモスと手を結んでいるなら、自分を監視するルナマリアを体よく排除するためにあのモビルスーツに捕獲させたとも考えられるのだ。

（シンやアスランに話さない……）

ルナマリアは立ち上がって周囲を見回した。殺風景な部屋には換気口とドア。そしてテーブルしかない。何かを利用できないかとルナマリアはテーブルの上ののって換気口に顔を近づけようとした。

「コーディネイターはドロボウのマネもするのかい？」

「きゃ！」

少年の声に驚いてルナマリアはバランスを崩した。なんとか床に無様に転がることは回避したもののテーブルが派手な音を立てて床に転がった。

「へえ、さすがにコーディネイターだね。運動神経はいいや」

いつのまに入ってきたのかドアの近くに金髪の少年が立っている。ややサイズの大きなパイロットスーツを着た少年は腕組みをしたままルナマリアを見つめている。

「あ、あなた、もしかして……」

「ボクはアルマン。お姉ちゃんを撃墜した男さ。よろしく」

アルマンはルナマリアのところまで歩き、テーブルを元に戻した。そして椅子にこしかけるとルナマリアにも座るように手で指示する。

「どういづもりよ。尋問でもするつもり」

「別に」。ただ、なんとなく捕虜にしてみただけだよ」

まるでゲームを楽しんでいるような緊張感の無さである。ルナマリアは相手が自分より年下ということもあって、やや口調を強める。

「なんでアンタみたいなのがパイロットなわけ。まだ子供じゃない」

その言葉にアルマンの眼がキラリと光る。

「ボクはエクステンデッドだ。反射速度も操縦技術も並みの大人よりずっと上なんだよ」

「エクステンデッド……」

アルマンの言葉を聴いてルナマリアが絶句する。エクステンデッドとは地球連合が極秘開発していた薬物と訓練によって強化されたナチュラル兵のことである。前大戦でもルナマリアやシン、そして死んだレイはエクステンデッド兵と何度か戦ったことがある。

「ステラみたいなの？」

何気なくルナマリアはシンから聞いたエクステンデッドの少女の名を口にした。その瞬間、アルマンは顔色をサツと変えて彼女にかみかかる。

「ステラを知ってるのか！ ねえ！」

「離して！ 離しなさい！」

ルナマリアの両手を握り締めアルマンは何度も彼女に聞いた。だが、しばらくするとアルマンは力を抜いて椅子に座り込んだ。

「ごめんなさい。ステラ姉ちゃんの名前が出たからつい……」

「ステラ姉ちゃん？」

怪訝そうなるルナマリアの声にアルマンは少しだけ顔を明るくする。だが、すぐに暗い顔になって話しはじめた。

「ボクとステラ姉ちゃんはロドニアのラボにいたんだ。ボクがあそこに行つてからもずっと仲良しだったんだ。ボクはお姉ちゃんが欲しいっていつたら、私になつてあげるって行つてさ……」

「そうなの。じゃあ、アルマンはステラの弟みたいなものなのね」  
ひどく寂しそうな顔でアルマンはルナマリアのほうを見る。その表情にはさきほどまでの驕慢さは消え、怯えた孤独な少年の儂さが漂っている。

「……そうだね。でも、ステラお姉ちゃんは任務でアウルやステイングと一緒にラボを出て行ったんだ。そして、ボクもすぐに別のラボに移されたからおねえちゃんが今どこにいるか知らないんだ」

「そう……」

いつのまにかルナマリアはアルマンの手に触れていた。アルマンはその手をおそろおそろ握り返してくる。まるですぐに解けてしまふ雪のかけらをつかむように。

「お姉ちゃん、ステラ姉ちゃんを知ってるんでしょ？ どこにいるの？」

「ステラは……死んだわ」

ルナマリアが苦しげにつぶやく。その言葉を聴いた瞬間、アルマンはルナマリアの手を払い、立ち上がった。

「ウソだ！ お姉ちゃんが死ぬもんか！」

「本当よ！ もう1年前のことよ！ ベルリンでステラは……死んだの」

「ウソだ！ ウソだ！」

泣きじゃくるアルマンをルナマリアが抱きしめる。激しく抵抗したアルマンだが、しばらくするとルナマリアの胸に顔をうずめて嗚咽を漏らす。ルナマリアはその髪を優しくなでながらアルマンを強く抱きしめた。

「泣きなさいアルマン。悲しいときは泣いたほうがいいのよ。人は泣けるんだから」

弱々しく泣くアルマンを抱きしめながら、ルナマリアはここにいる間だけはこの孤独な少年の心の支えになってあげようと思いはじめた。

## 第14話「苛立ち」

「きさまああああ！」

怒りに任せてラファエルに殴りかかろうとするシンをイザークが取り押さえる。両腕をおさえられ、床に這ったシンはなおもラファエルにつかみかかろうと必死に体を動かす。

「離してくれよイザークさん！ こいつはルナを！」  
「落ち着かんか！」

ほかの警備兵らに拘束され、シンは立たされる。ラファエルはそんなシンの様子を沈痛そうな表情で見つめている。

「すまないシン・アスカ。私の指示が甘いばかりに……彼女が……」  
「あやまってすむ話かよ！ 人間は死んだら戻ってこないんだぞ！」  
警備兵2人がおさえつけているにも関わらずシンが少しずつ前進する。その姿を見たイザークはラファエルとシンの間に立った。

「どいてくれよ！」  
「いい加減に……頭を冷やせ！」

イザークの平手がシンの頬を音高く鳴らす。一瞬何をされたか理解できず、シンは呆けた顔でイザークを見つめる。

「ラファエル司令はプラントに援軍を連れてくるという任務を果たした。そしてルナマリア・ホークはその援軍を守るという任務に就いて撃墜された。貴様がラファエル司令を責めるのは筋違いというものだ！」

イザークの言葉にシンは唇をかむ。あまりに強いかみすぎて唇の端から一筋の血が流れる。

「……でも、コイツは……ルナを」  
「彼女が死んだとは限らないシン・アスカ」  
「？」

静かなラファエルの言葉にイザークが振り向く。シンも驚いた顔でラファエルの顔を見つめる。

「兵士の報告ではルナマリア機の胴体は敵モバイルスーツにつれさられた。もしも彼女が死んでいればそんなことをすると思うか？」

「捕虜にしたというわけか……」

イザークが考え込む。ルナマリアはLOWの中でも中核的位置にいる士官である。たしかに有用な情報をもっている可能性は高い。

シンのほうはルナマリアの生存の可能性が出てきたことで眼の色が変わっている。激情の赤は影を潜め、彼女を救わなければいけないという覚悟の色がみなぎっている。

「イザーク司令！　すぐに敵部隊を追撃しましょう。ラファエル司令の艦隊を追って途中までついてきたんだ。近くにいるはずですよ」

敵のモバイルスーツ部隊はルナマリアを連れ去った後も何度か攻撃をしかけてきた。何とかその追撃を追って安全宙域まで逃れたラファエル艦隊は、実に全戦力の4割を喪失していた。ラファエルはシンが冷静になったことを確認し、イザークにある提案をした。

「確かに敵がこの近くに潜んでいるのは確かです。あの動きの早さを考えれば、この近くに何らかの拠点があるはずですよ」

「うむ……」

イザークはなおも考え込んだ。細菌テロといい先日のモバイルスーツ強奪といい敵の動きが早すぎるのはやはり近くに潜んでいたからだろう。できることなら徹底的な搜索を行い、叩き潰してしまいたいのが本音であるが、戦力不足のザフトにはそこまでの力は無い。

「かなりの損害を出したとはいえこちらの艦隊はまだ戦えます。ジール司令のお手を借りればおそらくは……」

「そうですねイザークさん。プラントに駐留しているムラサメ隊も呼べばかなりの戦力になります。俺もデステイニーで出ます」

先ほどまでのやり取りがウソのようにシンとラファエルの意見は一致している。イザークは機のインターカムを取り、副官のシホを呼び出す。

「シホか。現在ここにいる戦力は？　……そうか了解した。エルスマンの哨戒艦隊の位置は？　ふむ……。すぐに司令部へ向かうよう

に命令しろ」

インターカムを下ろすとイザークはラファエルとシンに向き合った。

「ラファエル司令の意見を取り入れ、これより我々は敵拠点の搜索任務を開始する」

「よし！」

シンが音高く拳をうちつける。イザークは血気にはやるシンを頼もしい期待の眼差しで見つめた。生粋の武人であるイザークには、シンのみなざる闘志は好ましい。

「ただなシン……」

イザークが何事か言おうとした瞬間。司令部全体に警戒警報が鳴り響く。その音を聞いてラファエルは小さく舌打ちをした。

「先手をうたれましたな……」

数秒後、イザークの元へ通信が入った。内容は敵の艦艇数隻とモビルスーツ部隊がこちらに接近しているというものだった。

## 第15話「シンとアルマン」

デステイニーで出撃したシンの前方ではすでに戦闘が展開されていた。

哨戒のために配置されていたモビルスーツ部隊が敵のモビルスーツ部隊と戦っている。見れば敵の機種は連合の量産型であるウィンダム系に近い。おそらく中近東でキラたちが戦ったといわれるベールオウルフだろう。

「味方が……遅い！」

先日の空襲の教訓を生かし、イザークは司令部に十分な兵力を配備していた。それにLOWから派遣された艦隊が合流していたのだから戦力的には敵を凌駕しているはずであった。しかし、現実では急造のLOW艦隊は散発的な迎撃しかとれず、その動きに足をとられてザフト艦隊も身動きがとれない。

「こんなに援軍つていえるのかよ！」

動きの鈍い味方を毒づきながらシンはデステイニーを操る。前方から迫ってくるベールオウルフを一撃で吹き飛ばす。エンジンを直撃され爆発したベールオウルフは、後続の1機を巻き込んで四散する。

「よし！」

ムラサメBとは段違いの反応にシンは手ごたえを感じた。戦場の緊張感と愛機に乗っているという安心感が彼に心地よい高揚を与えていく。シンはレバーを素早く動かし、次々と強襲するモビルスーツ部隊を迎え撃っていく。

「！」

シンの第六感が危険をつげる。すぐさま周囲を確認すると、デステイニーの左側にいたザクウォーリアが3機同時に撃墜される。見ればその先には忘れようもない黒いモビルスーツが飛んでいた。

「あいつ！」

それはかつてシンの乗るムラサメBを撃墜したナイトメアであっ

た。そして、それはルナマリアを撃墜した機体でもある。シンは唇をキツと噛み、デステイニーの出力を上げる。

デステイニーの接近に気づいたナイトメアが無人機をデステイニーに振り向ける。大型ビームキャノンを装備した2機のナイトメアをデステイニーはすれ違いざまにアロндаイトで両断する。

「やるじゃないか！ デステイニー！」

そのまま速度を落とさずに突撃したデステイニーをナイトメアのアルミューレ・リュミエールが受け止める。すぐに距離をとったデステイニーは背中に装備した長距離ビームでさらに攻撃を加える。

「ちっ！」

ナイトメアのコクピットでアルマンは舌打ちと共に機体を回避させる。さすがのアルミューレ・リュミエールもデステイニーの攻撃を何度も防いではいられない。連続してあの攻撃を食らえばメインシステムがオーバーヒートしかねないのである。

「ルナを返せええええ！」

ナイトメアがひるんだ瞬間、シンはデステイニーの出力を最大にする。狙いはアロндаイトと長距離ビームの同時攻撃。これならばあの鉄壁の守りを砕くことができる。彼は判断した。

一方、アルマンはデステイニーの動きよりもその叫びに驚愕した。デステイニーに乗っているのは以前彼が撃墜したムラサメBのパイロットである。そして、その男がルナマリアの名前を叫んでいることがアルマンにあることを思いつかせた。

「！」

2機が凄まじい速度で交錯する。アルミューレ・リュミエールを解除したナイトメアは紙一重でビーム砲撃をかわし、ビームサーベルでアロндаイトを受け止めた。

「そうか！ お前がシン・アスカか！」

「！ な、なんで俺の名前を！」

今度はシンが驚愕する番だった。相手の声が若いことは知っていたが、自分の名前を知っているのは予想外である。思わずシンはナ

イトメアの頭部を凝視し、見えもしない相手を見ようとしてしまう。  
『ルナ姉ちゃんから聞いたのさ！ LOWに間抜けなパイロットが  
いるってさー！』

「なー！」

ナイトメアが離れざまにビームを放つ。反射的に機体をそらす  
間に合わずにアロンドイトの片側が焼け付く。シンはアロンドイト  
を捨てながら態勢を整える。

「ルナは無事なのか！ ルナに何かあつたら……」

シンの言葉にアルマンはあざける様な口調で答える。

『この上もなく無事さ！ ぼくの側にいるんだからね！』

ナイトメアがなおもビームを放つ。今度は無人ナイトメアと連動  
しての集中攻撃である。シンはレバーを忙しく動かし、デステイニ  
ーを蝶のように舞わせた。

「何を言ってる！」

『お前の側にいちやあルナ姉ちゃんが危ないって言ってるんだよ！』  
デステイニーの表面を数発のビームがかする。濃密なビーム攻撃  
をかわしきれず、シンはデステイニーのシールドを展開させてこれ  
をしのご。

『ステラ姉ちゃんを守れなかった貴様に！ ルナ姉ちゃんを守るこ  
となんてできないよ！』

「！」

ステラの名前を聞いてシンは一瞬だけ我を忘れる。その隙を突い  
てアルマンはナイトメア全機のビームでデステイニーを狙う。

『弱者は地獄に落ちろよ！』

全方位からのビーム攻撃。さすがのデステイニーもこれはかわせ  
ないと判断し、アルマンは冷たい笑みを浮かべた。

「なめ、るなああああ！」

迫り来るビームを前にシンの中で何かが弾ける。左右のビームを  
シールドで防ぎつつシンはデステイニーを上昇させる。かわしきれ  
ずビームを数発くらうが、なんとか致命傷を回避し、シンはデステ

イニーを一直線にナイトメアへ向けた。

「！ くそっ！」

予想外の動きにアルマンの頬に冷や汗が浮かぶ。傷だらけのデステイニーが肩からビームサーベルを抜くのが、アルマンにはスローモーションに見える。だが、彼の動きも緩慢であった。

(ボクが怯えているのか？ このボクが！)

アザナエル軍の中核を為すエクステンデッド部隊“ベネ・ハリエロヒム”の中でもアルマンの成績は群を抜いており、その実力はナンバー2であるジャックとヴァイオラを大きく引き離すほどであった。そんな彼が今はじめて恐怖を覚えている。アルマンはその事実を知り、全身が硬直する。

その間もデステイニーが接近してくる。震える指を無理やり動かそうと努力したと思うようにいかない。一瞬諦めかけた時、アルマンの脳裏にある女性の顔が浮かぶ。

「ボクはアルマン・シトリーだ！ お前なんかルナ姉ちゃんを渡すかよ！」

怒号をあげ無理やり体を奮い立たせたアルマンは、ナイトメアのサーベルでデステイニーのサーベルを受け止める。0.1秒の差でアルマンは死の淵から脱出したのである。

アルマンはすぐさま無人ナイトメアでビーム攻撃を加えようとした。だが、デステイニーはその気配を察知し、また距離をとる。決して一箇所に留まらない。憎らしいくらいの確な判断である。

「いける……大丈夫だ……」

ダメージはデステイニーのほうが上であるが、追い詰められているのはナイトメアのほうである。シンはそれを感じ、レバーを握りなおして敵の隙を伺う。その時、非常回線からラファエルの声が飛び込んでくる。

「シン・アスカ！ こちらラファエルだ！ すぐにポイントV10に向かってくれ！」

「どうしたんですか！ こっちも敵と交戦中！」

ラファエルの声は悲鳴に近い。回線の向こうで将兵たちの怒号が飛び交い、戦況がかなり悪いことを予想させる。

『新手の艦隊だ！ 数がかなり多い。こちらの戦力では支えきれん』  
『！』

「く！ 了解！」

前方のナイトメアを一瞥し、シンはデステイニーを後退させる。その間も腰につけていたビームライフルを抜き、牽制を忘れない。ナイトメア部隊は追撃のチャンスを逃し、その場に留まったままだった。

（ルナ！ すまない！ 絶対に助けるからな！）

ナイトメアのほうをにらみつけながら、シンは新たな戦場へとデステイニーを飛翔させた。

## 第16話「ザフト離脱」

アザナエル軍との戦闘はその後1時間ほど続き、ザフト・LOW連合軍は何とかこれを撃退することに成功した。

「ご苦労だった」

LOW旗艦ハンニバルに着艦したシンは、報告のためにラファエルの前に立った。先ほどの衝突が記憶に残っているシンは、極力感情を出さないように自分を制御するのに苦労した。

「敵の戦力は予想外に大きかったな……。こちらの損害もかなりのものだ」

ザフトと連携したこともあってこの戦いでLOW艦艇の被害はゼロであった。ただし、モビルスーツ部隊はかなりの損害を出しており、実戦力はかなり低下したと言っている。

「たった2会戦でこの損害だよ……。まったく」

ザフトの防衛力低下を補う目的で派遣された艦隊だったはずのLOW艦隊だが、その結果は惨憺たるものであった。おそらく生き残った艦艇も修理をしなくては任務続行は不可能だろう。実質この艦隊の戦略的意義は消滅したと言っている。

「無能をさらしていると思っただろうね？」

ラファエルがちらりとシンを見る。シンは姿勢を正しラファエルを見る。

「いえ、そうは思っておりません」

「いいんだよ。私も自分がイヤになっている」

ラファエルの表情には憔悴の色が濃い。シンはそのやつれように先ほどの暴言を謝罪したほうがいいのではないかと考え始めていた。だが、ラファエルは小さくため息をついたあと、背筋をピンと伸ばし表情を引き締める。

「さて、悔やんではかりはいれないね。今後どうするかだ」

「妥当なのは月へ連絡をとることでしょうね」

「ラミアス艦長とロアノーク大佐か……」

月には伝説の不沈艦アークエンジェルを擁するLOWの機動艦隊がある。LOWの大気圏外での活動の拠点であり、アスランが敵の大規模攻撃に備えて温存しておいた戦力であった。

「援軍を求めるか……司令官としては屈辱の極みだな」

だがほかにとる策はない。急造の艦隊であるラファエル艦隊と違って月面艦隊は精鋭である。数隻でも回してくればかなりの戦力増強が期待できる。シンはラファエルの決断を待った。

「仕方がないな……。オペレーター、月司令部へ連絡を」

「は！ 了解……待ってくださいイザーク司令より通信です！」

オペレーターが慌てて回線を繋ぐ。ラファエルのシート脇のモニターに厳しい表情のイザークが映し出される。ラファエルはその顔を見て自身の顔を引き締めた。

「イザーク司令。そちらの被害はどうですか？」

「……モビルスーツをやられたが致命的な損害ではない」

答える声は重い。シンはラファエルの横からそっと画面を覗き込んだ。イザークは苦虫を噛み潰した顔のまま画面外で移動し、かわりにラクスが現れる。

「ラクス・クライン評議員……」

「要件を簡潔に伝えます。プラント評議会はLOWからの無期限離脱を可決しました。それに伴いLOWの全部隊のプラント支配領域より撤退を要求いたします。そして、ザフトから派遣されている全将兵の帰還も要求します」

「な……」

その言葉にシンが小さく声を上げた。ラクスはそれ以上何も言わず瞳を閉じてうつむく。ラファエルは眉にしわを寄せたまま黙りこくっていた。

「理由は……今日の戦闘ですか」

「ええ、本日の戦闘を見た評議会のハイワーズ評議員からLOW頼むに足りずと……。申し訳ありません。私の力が足りず……」

「いや、お気を落とされないうでください。任務を遂行できない小官の無能がゆえですから」

ラファエルが無意識に親指のつめを噛む。ラクスの隣にイザークが立ち、シンのほうに視線を向ける。

『デステイニーはLOWの所属であるからそちらに預ける。なお、ザフト将兵の帰還に関しては本人がザフト軍籍を抜けている場合はこれを適用しない』

「イザーク司令」

イザークの顔には屈辱と怒りが満ちている。いくら政府の決定とはいえ、ともに戦った味方を追い出すことに彼は憤りを感じていた。『俺ができるのはここまでだ。すまんシン・アスカ、ラファエル司令』

イザークが敬礼をする。それを受けてシンとラファエルも敬礼を返した。

「イザーク司令。ご武運をお祈り申し上げます」

『ありがとう。アスランにも伝えてくれ。すまなかつた』

『くれぐれもご無事で。死んではなりませんよ』

「はっ」

モニターが途切れる。ラファエルとシンは打ちのめされた表情でしばし真っ黒なモニター画面を見つめていた。

## 第17話「それぞれの選択」

「すみません……」

「いや、いいんだ」

ハンニバルのモビルスーツデッキで10人ほどのパイロットたちがシンに頭をさげている。全員がLOWプラント駐留部隊のザフト兵である。彼らは本国の召還命令に従ってプラントに帰還することを選択していた。

「隊長は残るんですよね……」

「ああ、俺はな」

若いパイロットが悔しそうな表情で床を見つめる。シンはキラやアスランに協力するためにザフトの軍籍を抜けていたため、帰還命令に従うことはなかったのだ。

「カウフマン、お前も行くのか」

「ええ……」

シンが初めて小隊指揮官になってからの付き合いであったカウフマンが沈んだ顔で答える。シンのようにプラントに家族のいない人間と違って、彼らには家族がいる。残るように強制はできない。シンと同じくLOWに残ることにした部下のキンバリーがカウフマンの肩を叩く。

「しよげるなよ。お前からこれから楽できるわけじゃねえぞ。ザフトに戻っても敵はいるんだからな。しっかりプラントを守ってくれよ」

「……ああ、約束するよ」

LOW創設以来のコンビであったキンバリーとカウフマンが固い握手をする。シンは2人が離れるのを待って、帰還する将兵全員に言葉をかける。

「俺は政治とか国家のことはよくわかんない。でも、でもな……これで俺たちもう会えないってわけじゃないだろ？　ひと段落すればまた一緒に飛べる日が来る。俺はそう信じている。それまで死ぬな

！」

『ハイ！ 了解です指揮官殿！』

パイロットたちが全員敬礼をする。シンはその1人1人の表情を見て、小さく頷いた。

「くそ！ くそ！ くそ！」

アイオーンに帰還したアルマンはヘルメットを投げつけて地団駄を踏んだ。その様子をギイは黙って見ている。

「なんで退却したのさ！ あのまま押し出せばザフト司令部は陥落できた！」

「ザフトを本気にさせるのは得策ではない。作戦の目的はLOWの艦隊戦力の損耗とプラントのLOW離脱だ……」

二度もの司令部空襲に成功したとはいえ、ザフトが本気になればこちらとてかなりの損害を覚悟しなくてはいけない。ギイは静かに作戦目的をアルマンに告げた。

「スパイの報告によれば作戦は順調に進んでいる。LOWは孤立し、戦力は減少している。もう少しだ。これは」

「……わかってるよ。アザナエルの意思なんだから」

アルマンはふてくされながらモビルスーツデッキを後にした。その後ろ姿をしばらく見つめた後、ギイは近くにしたアルマン付きの技術士官に声をかけた。

「どうなのだ？」

「問題はありません。精神状態は高ぶっていますがコントロール可能です。おそらくはあのザフト兵がよい影響を与えているのかと思います」

技術士官がアルマンの脳波パターンを見せる。ギイはそれを一瞥し言葉を続けた。

「ステラよりもあの女がいいと？」

「ええ、そのようです。ステラを想起したときの脳波パターンより、あのザフト兵のときのほうが安定しています。やっぱり遠くの女より近くの女なんですかね」

おどけた調子で技術士官が肩をすくめる。だが、ギイの冷たい視線に慌てて真顔に戻る。

「ふむ、予想外の拾い物というわけか。アルマンの気まぐれがこんな結果を生むとはな」

「ええ、本当にラッキーですよ。あとはアルマンにあのザフト兵への強迫観念を刷り込めば以前以上の効果が得られます」

技術士官が自信ありげに言う。

「よし、これより本艦はインヘルノへ帰還する。すぐにアルマンの再調整の準備にかかれ」

「はっ！」

敬礼する技術士官を見もせず、ギイはモビルスーツデッキを後にした。

## 第18話「姦計」

東南アジア・マラッカ海峡付近は、海底の隆起が激しい上に小さな島が多く、入り組んだ地形であるために政府の眼も行き届かず、旧世紀時代でもここは海賊たちが出没する危険地帯として有名であった。

現在も赤道連合とLOWの監視下にも関わらず群島には多くの海賊たちの拠点があり、この海峡を通る船を脅かしている。

そして、その一角にアザナエル軍の秘密基地が存在していた。

「機体は中古なんだろ？ 大丈夫か？」

エンジンの回転数をあげながらジャックが整備兵に言う。褐色で出っ歯の整備兵が大声で叫ぶが聞こえない。ジャックがヘッドマイクを使うように指示すると、整備兵の声がヘッドホンから聞こえる。「大丈夫大丈夫！ 素性はいいいんだからさ。エンジンだって一度バラして洗浄しているんだ」

「ほんとかよ……」

ジャックが苦笑する。南国の熱風もエンジンの排気熱にはかなわない。ジャックは額に浮き出る汗をぬぐい、ヘルメットを被った。

基地の滑走路は樹木とカモフラージュネットで巧妙に隠蔽されている。ジャックはその先に見えるエメラルド色の海を見た後、横を向いて僚機を確認する。

「おい、姉貴！ 準備はいいか？」

『問題ないわ。いつでもどうぞ！』

ヴァイオラの声は明快である。ジャックはヘルメットのバイザーを下ろして操縦桿を握った。

「まったく、なんでこんな汚れ仕事やらせんだよ」

『文句は言わないの。私たちがそれだけ頼りにされている証拠よ』

「そうだよな。こういう繊細な仕事は、アルマンのクソガキにはできねえよな」

ジャックがニヤリと笑う。

今、ジャックとヴァイオラが乗っているのはオーブ軍の主力モビルスーツ・ムラサメだった。数日前の戦闘で撃墜された機体を補修・整備し、それにLOWと同じカラーリングを施してある。細部を見れば別の機体だとわかるが、一瞬ではLOWの主力であるムラサメBと区別がつかない。

「作戦目標は間違いないんだな？」

『ええ、もちろんよ。時刻もしつかり確認して』

今から30分後にLOWのモビルスーツ部隊が、アザナエルらと連携している地元ゲリラ組織の基地を攻撃する。ジャックたちはその攻撃隊に紛れ込むのが任務である。派手な戦闘を好むジャックにとっては退屈この上ない任務ではあるが、上からの命令となれば仕方がない。ジャックは手で整備兵に離れるように合図すると、スロツトルペダルをゆっくり踏み込んでいく。

「ジャック・シャクス！ フェイク1出るぜ！」

『ヴァイオラ・シャクス！ フェイク2出ます！』

ムラサメが一直線に滑走路を抜けていく。蒼穹の空に飛翔した2機は、そのまま白い雲の彼方へと消えていった。

「こいつはまずいよ……」

ラファエルが頬杖をつきながらのんびりとした口調で言う。隣に立つシンはその映像を見て顔を硬直させる。

艦隊司令用の執務室でシンが見せられたのは、地球のニュース映像だった。そこには焰に燃える建物と、焼け焦げた医療機関をしめすマークが見える。火の手はまったくおさまる気配はなく、子供を抱きかかえた母親らしき女性や、病人を抱えて右往左往する人々の悲痛な声が響いていた。

「まさか……そんな……」

シンは二の句が告げられない。ラファエルも口調こそはのんびりしているものの顔は苦虫を噛み潰したようである。

「いつなんですか」

「ついさっきだよ。ENN衛星ニュースで速報として流れた」

ラファエルが時計を確認する。シンは信じられないという顔で、映像を巻き戻してみる。

青い空を切り裂いて2機のムラサメが飛んでくる。カラーリングは白に緑の縁取り。LOWの制式採用タイプである。その2機がいきなり急降下し、機体下部につけていた爆弾を建物へむけてバラまく。一瞬の閃光の後、すさまじい焰が建物を焼き尽くす。

「バカな……そんなバカな……」

どう見ても民間施設への誤爆である。ゲリラ攻撃の任務で出撃した部隊が攻撃目標を間違えてしまったとしか見えない映像だ。だが、LOWの兵士は各国から選りすぐった精鋭である。こんな単純なミスを犯すとは思えない。

「これ……本当なんですか？」

「ウソ、だね」

ラファエルがこともなげに言う。シンが驚いてモニターとラファエルを交互に見比べる。ラファエルは静かにモニターを指差した。

「この映像を撮ったのはプロのカメラマンだ。誤爆があったとして、こうもタイミングよく映像が撮れるもんか。医療施設の取材という言い訳もあるが、医療施設の取材だったらなぜ空を映しているんだい？」

「ああ」

速報として流れた映像には編集の形跡はない。カメラは何もない空をしばらく映し、その後にムラサメのエンジン音が聞こえてくる。前もってムラサメがここから現れることを知っていたかのような映像である。

「それにね……これが映像解析結果だ」

ラファエルがプリントアウトしたムラサメの画像を見せる。カラ

ーリングはまったく同じだが、バーニアと垂直尾翼の形状がB型と違っている。そして、主翼に描かれた番号を見てシンは驚きの声をあげる。

「俺とルナマリアのナンバーですよ」

シンとルナマリアの機体はパーソナルカラーで塗られている上、どちらもが大破している。つまり、この機体はLOWに存在するはずのない機体である。

「じゃ、じゃあ、これをすぐにアスラン……ザラ司令に伝えましよう」

「もちろんザラ司令もわかってるはずだよ。でも、マスコミに発表してこれをすぐに信じてもらえるかね……」

昨今のLOWの失態は、世間の厳しい批判にさらされている。LOWへの信頼が揺らいでいる今、このことを発表しても責任逃れと見られる可能性はある。シンはそのことに気づき、怒りで拳を固く握り締めた。

「ただ……敵の狙いはわかってきたね」

ラファエルがつぶやく。シンは不思議そうにラファエルの横顔を見つめる。

「狙い……ですか」

「ヤツらはLOWの孤立を狙っている。ザフトを離脱させ、地球諸国の不安を煽った。次の狙いは何だと思う？」

ラファエルの問いにシンはしばし考え込む。そしてアツと小さく声を上げる。

「……オーブ」

「そうだ。最大の支援者であるオーブを失えばLOWは空中分解する」

ラファエルが神経質そうに指を動かす。シンはその次の言葉を待った。

「我が艦隊は月へ移動しなくてはならない。だが、シン・アスカ。キミはすぐに本部へ戻ってくれ。ザラ司令に伝えるんだカガリ・ユ

「ラ・アスハが危ないと」

## 第19話「義務と行動」

シャトルを使って地球に降下したシンは、すぐさまオーブにあるLOW総司令部へ向かった。

「敵の狙いがカガリだというのか？」

シンの言葉を聞いてアスランが顔を上げる。メイリンもコンソールを叩く手を止めてシンのほうを見た。

「ええ、ラファエル司令の意見だと、そうなるということです。敵はLOWの孤立を狙っている。そうなると最大の支援者オーブを狙うと」

「なるほどね……」

執務室で同席していたキラがうなずく。中近東での紛争が膠着状態になったため、今後の方針を相談するために本部に戻ってきていたのである。

「しかし、カガリを狙うなんてことを本気で考えるのか？」

アスランは半信半疑である。オーブの最高指導者である彼女には常に複数のSPが配置されており、LOWからも多数の人員が振り向けられている。大規模な軍でも動かさない限り命など奪えるはずはないし、軍を動かした場合はキラやアスランが動く。どう考えても簡単に命が奪える相手ではない。

「オーブの屋台骨を崩すにはカガリを打倒するのが一番だと考えたんだろう。カガリ……いやアスハの存在はこの国の要だからね」

キラの言葉にシンがうなずく。かつてザフトに所属していたシンがオーブを攻めた時もカガリが指揮権を握った瞬間にオーブ兵は明らかに強くなっていた。オーブ兵にとって、彼女は精神的支柱と言える存在なのだ。

「とにかくカガリさんへの警護は万全の上にも万全を……」

「そうだな……キサカー佐にもそう伝えよう」

アスランがメイリンに指示をする。メイリンがすぐに通信回線を

開き、オーブ軍司令部を呼び出す。すぐにモニターにキサカが現れ、アスランたちは敬礼をした。

『お久しぶりですザラ司令。今日はなんの御用でしょうか』

「ええ……実は」

アスランは手短かにシンからの報告をキサカに伝え、LOWから腕利きの護衛兵をさらに増派することとカガリ警護の見直しをしてほしいと話した。その言葉を聞き終えるとキサカは顔を青ざめさせた。

『……まさか』

「確証はありません。しかし、否定にするには理にかないすぎた推理です。対策は講じる必要があると思います。カガリは今どこに？」

アスランがそう言っているとキサカが申し訳なさそうな表情をする。

『それが……カガリ様は北大西洋連合首脳との極秘会談のために密かに出国なさいました』

「な！ 我々に断りもなしにですか！」

『ええ……アスランたちが頑張っているのに私だけこんなところにはいられないと……そうおっしゃって』

驚くアスランたちにキサカが弁明する。だが、カガリの独断にシンは怒りを露にする。

「冗談じゃない！ アス八代表はオーブの要でありLOWにとっても重要な人ですよ。そんな人が何の断りもなくホイホイ動くななんてバカにしてる！」

「カガリらしいと言えばカガリらしいけど……」

キラが嘆息する。行動派のカガリが今まで沈黙をたもってきたことからしておかしかつたのだ。おそらくこちらに無用の心配をかけたまいと、密かに準備していたのだろう。アスランも彼女の心を思い計り、短くため息をつく。

「護衛はちゃんとつけているのでしょうか？」

『それは十分注意しています。北米大陸の航海ルートも完全機密になっており、どのルートを通ったかはクルーしか知りません』

「なるほど、一応は大丈夫のようですね」

さすがにキサカに手抜かりは無いようだ。おそらく外部漏洩をさけるために二重三重に手をつけているだろう。アスランは安堵の吐息をつく。

「アスラン……」

「ん？」

キラが思いつめた表情でアスランに声をかける。アスランはその表情に安堵の色がないことを知ると頬を引き締める。

「いくらカガリやキサカさんが万全を期しても、どうしようもない部分がある」

「あ」

キラの言葉にメイリンが小さく声をあげる。シンとアスランが彼女のほうを向くと、メイリンは小さく開いた口に手を当てる。

「どうした？」

「メイリンは気づいたみたいだね」

「……はい」

メイリンが恐る恐るうなづく。シンとアスラン、キサカは何のことかわからずにメイリンのほうを見つめる。

「いいから言ってみてくれメイリン」

「え、え〜っと、いくらオーブ側から情報が漏れなくても、北大西洋連合が彼らの陣営につながっていれば……」

キラがうなづく。アスランは背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

## 第20話「偽りの想い」

ジャックとヴァイオラは東南アジアでの任務を終えた後、アザナエル軍の太平洋基地にいた。

海底資源採掘プラントに偽装したこの基地は、小さな島ほどの規模があり、現在は、数十機のMSとそれを運搬する艦艇・航空機が配備されている。これらは彼らが太平洋方面で動かせる戦力のほぼすべてと言っている。

「おでませ」

不機嫌そうな顔でジャックが滑走路に滑り込んでくる輸送機を眺める。MS数機を運搬できる大型輸送機で、中には宇宙で戦っていないはずのアルマンと彼の愛機ナイトメアが乗っているはずである。

「俺と姉貴だけで十分だったの。アザナエルも心配性だねえ」

潮風にあたってザラザラする髪をなでつけジャックがつぶやく。輸送機は無事ランディングを追えて着陸し、現在はタラップを下ろしている。

「？」

タラップを降りてきた人物たちにジャックの目が丸くなる。1人は間違いなくアルマンなのだが、その横に付き従っているのは見慣れない女性である。

（誰だこの女？）

女性に興味を持ったジャックは、出迎えているヴァイオラのもとへ走っていった。ジャックが近づいてきたことを知ったアルマンが女性の前に立つ。

「久しぶりジャックセンパイ」

「お、おお……久しぶりだなアルマン」

挨拶もそこそこにジャックは女性のほうをマジマジと見た。ベネ・ハ・エロヒムにはこんな女はいなかった。ヴァイオラが何か知っているかもしれないと彼女を見るが、ヴァイオラは軽く肩をすくめた

だけだった。

「はじめましてシャクス少佐」

女が口を開く。思ったより子供っぽい声だった。しかし、その口調はどこか冷たく感情に欠けている。口調も気になるがジャックは彼女の右手がアルマンに優しく触れていることが気になっていた。

「ルナマリア・ホーク少尉であります。アルマン・シトリー少佐の副官をしております。よろしく」

敬礼したルナマリアが会釈をする。その瞳の色を見てジャックはあることに気づいた。

（洗脳かよ……大佐め）

おそらくアルマンの精神状態を安定させるために用意した女なのだろう。アルマンはいけすかないヤツだが、こういうやり方は気に入らない。ジャックは2人の後ろから歩いてきたギイに鋭い視線を向けた。

「よう大佐。相変わらずだな」

「……何のことだ」

いつもの鉄面皮でギイが聞き返す。ジャックはそれ以上何も言わず、踵を返した。その瞬間、横目で見たアルマンはルナマリアに敬慕の視線を向けている。

「ちっ！」

腹立たしく舌打ちをしたジャックに、ヴァイオラがあわてて駆け寄る。2人は驚くほどの早足でギイたちから遠ざかる。

「どうしたのよ」

「ああいうやり方は気に入らないんだよ！ 頭の中をいじくるのもいじくられるのも大嫌いだ！」

エクステンデッドとはいえジャックとヴァイオラは比較的軽い意識操作しか受けていない。だが、洗脳時の苦痛は彼らにとって深いトラウマになっていた。ジャックはアルマンとルナマリアを見てそれを思い出していた。

「ねえ、ジャック……」

ヴァイオラが寂しげな表情でジャックの軍服の袖をひく。ジャックは立ち止まって双子の姉の顔を見る。

「私たち……ホントの姉弟……だよね」

「！ たりめえだろ！ 二度とそんなこと思うな！」

ジャックは憤りの声をあげ、さらに歩調を速める。その歩みにあわせるようにヴァイオラは彼を追いかけた。

## 第21話「再会」

北米の気候は乾燥していると聞いたが、それはウソだとシンは感じた。

空には鈍色のカーテンがひかれ、いかにも憂鬱な天気である。暖房のきいたホテルにいるシンだったが、その空を見て無意識にシンは私服の襟を立てた。

「オーブやモルディブならよかつたんですがね」

キンバリーがしきりにかじかむ手をこすりながらばやく。その様子にシンも同意の笑みを浮かべた。

「俺もこういう空は苦手さ」

シンはそう言いながらロビーで話し込んでいる一団を振り返る。サングラスで顔を隠しているが金髪と意志の強そうな眉毛で力ガリであることがわかる。彼女と話し込んでいるのはキラである。

メイリンの指摘を受けたアスランは、すぐにキラとシンを中心に少数精鋭の部隊を編成した。そして、キラたちは太平洋を徹夜で飛行し、西海岸に到着しようとしていたカガリの船に追いつき、行動をとりにしている。

「会談は夕方でしょ？ 一眠りしたいっすねえ」

キンバリーが大きなあくびをする。それを見てシンやLOWのパイロットたちが笑う。ぶっ通しで飛行していたため全員が疲労している。シンはキラが戻ってきたらパイロットたちを交代で仮眠させることを提案しようと考えた。

「？」

ホテルの人ごみの中に見慣れた顔がいた気がした。シンはもう一度その人物を見ようと探してみたが、人ごみに紛れてまったく見えない。シンは内ポケットに拳銃があることを確認し、部下に声をかける。

「ここは任せる」

「あ、はい」

シンはじゆうたんを音もなく歩くと人ごみの間を抜けて、さつき見た顔を捜した。その人物とは、テロリスト部隊に捕らえられた同僚のルナマリアである。

シンは人ごみをかきわけ廊下に出た。廊下にはメガネの青年のほかに人影は無い。シンは小さくため息をつき、内ポケットに伸ばしていた手を元に戻した。

(まさか、な)

ルナマリアがこんなところにいるはずはない。シンは自分が見間違えたのだらうと思い、ロビーへ戻ろうとした。

「！」

次の瞬間、シンの背中に硬い感触が伝わる。顔を後ろに回すと、さきほど見かけた青年がいつの間にか背後に立っている。

「なつちやいないな。LOWの軍人さん」

男はシンと同年代か少し上くらいだろう。色つきのメガネをかけた短髪の青年で、殺し屋というよりは学者のような雰囲気である。

シンが両手をゆっくりとあげると、青年はニコリと笑った。背中の感触が消えている。青年は人差し指と親指を伸ばして拳銃に擬した右手をヒラヒラと回して見せた。

「どういっつもりだ？」

「すまない。ちょっとLOWのエースにいたずらをしてみたかったのよ」

青年はそう言って軽く頭を下げた。シンは青年に向き直り、彼の言葉を待った。

「いたずらのお詫びと言っては何だけど、重要な情報がある。カガリに伝えてくれないか？」

「アス八代表に？」

青年は真顔になってシンに告げた。メガネの奥に光る眼に真摯なものを感じ、シンは彼の話の聞くことに決めた。

「本来ならキラに伝えるべきなんだが、アイツはカガリに近すぎて

声がかげづらくてね」

「キラさんとも知り合いなのか？」

青年がフツと笑う。シンはその表情を見て、彼がキラとかなり親しい間柄であることを感じた。

「要点を簡潔に言わせてもらう。ここはアザナエルの手が回っている。すぐにオーブに戻れ」

「アザナエル？」

聞きなれない単語にシンが訝る。青年はジャケットのポケットから1枚のデータディスクを取り出し、シンへ渡した。

「詳細はこれに入っている。このホテルも危ない。すぐに移動するんだ」

「あ、ちょっと……」

用件だけを告げて青年はホテルの裏口のほうへ歩いていこうとする。シンは青年を連れ戻すため、彼の後を追った。

「ま、待ってくれよ」

「時間が無いんだ。アザナエルの暗殺部隊はおそらくこのホテルにも潜んでいる。やつらここへの空襲さえしかなないぞ」

「！」

青年の言葉にシンが立ち尽くす。青年はシンの肩をつかんで言葉を続ける。

「やつらの狙いはコーディネイター殲滅戦争の再開だ。そして、それを始めるためにはカガリやLOWが邪魔なんだよ。カガリとラクスさんを殺してしまえば、この戦争を止められる人間はいなくなる」

「……」

アスランやキラがいかに優れたパイロットでも、所詮は軍人である。戦争を終わらせるには交渉する政治家が必要になる。そして、コーディネイターとナチュラルの間を立てる人間といえはこの2人しかない。

「頼んだぞ」

青年はそう言い残して駆け出していった。シンはすぐに我にかえ

るとキラとカガリにこのことを伝えるため、ロビーへと急いで戻った。

シンからの報告を受けたキラはすぐさまカガリを別の場所に移す指示をした。

SPたちが厳重に守る中、ホテルを出たカガリは防弾装備のなされた車に乗って港へ戻った。ホテルでの宿泊を諦め、自分たちの船で過ごすことを決めたのだ。シンたちLOWの面々は船の警備はSPに任せ、乗ってきたMSの近くに待機して敵の空襲に備えた。北大西洋連合首脳との会食はキャンセルされ、明日あらためて首脳との会談がセツティングされることとなった。

デステイニーのコクピットに乗り込んだシンはセンサーを一通りチェックした後、ホテルでのことを思い起こしていた。青年の素性も気になったが一番の関心事はルナマリアに似た女のことである。あれは単なる人違いだったのか？ 考え込むシンは開いたコクピットハッチから夜空をぼうつと眺めていた。

「どうしたの？」

物思いにふけるシンに下から声がかかる。見ると夜食を載せたトレイをもってキラが手を振っている。シンはコクピットを降りて、キラとデステイニーの手のひらに座った。

「昼のことを考えていたんですよ。あの人は何者かって……あれだけの情報をどこから手に入れたんでしょう」

船に戻ってからデータディスクを調べたキラたちは、アザナエルという人物が今回の一連の事件の背後に居ること。その力は軍事だけでなく経済面にも深く浸透し、カガリたちが宿泊する予定だったホテルも彼の息がかかっていることを知った。現在、裏づけをとっているが青年の情報はほぼ正確だった。

「彼が誰にしる今は頼りになる味方だと言うことは確かなんじゃないな

いかな。アザナエルの情報は今後絶対に役立つはずだよ」

キラがマツシユポテトを食べながらそう言う。シンはライ麦サンドを紅茶で流し込み、キラに質問してみた。

「何者なんですか？ あの人」

シンの問いにキラは何も言わない。ただちよつとだけうれしそうに頬を緩ませただけだった。シンは青年のことを聞くのを諦め、別の話題を振ってみた。

「アザナエル……新しいブルーコスモスの盟主でしょうか」

「いや、ちよつと違うと思う」

意外な答えにシンは少し驚く。コーディネイターやオーブを眼の敵にするならばこの組織以外にない。

「中近東で彼らの部隊と戦った時に感じたんだが、彼らはブルーコスモスの残党とは別系統の指揮で動いていたみたいなんだ。ブルーコスモスの盟主ならそんな面倒なことをしないとと思うんだ」

「じゃ、じゃあ、ブルーコスモス残党と手を組んだ別の組織ってことですか？」

キラがうなづく。シンはあることに思いついてキラに聞いてみる。

「じゃ、じゃあ、ロゴスですか」

「憶測だけどね。おそらくロゴスはブルーコスモスとは別にもう一つの軍組織をもっていたんだ」

ロゴスはあくまでも軍需産業の集合体であり、戦争の矢面にたつようなことはしない。それを考えればキラの結論に達するしかない。しかし、なぜロゴスがもう一つの組織を作る必要があったのかはシンにはわからなかった。

「わけわかんないですよ……」

シンが頭をガリガリとかく。キラはそんなシンを見て少しだけ笑った。次の瞬間、キラはシンの顔が真っ赤に輝くのを見て息を飲む。「！」

それは爆発によっておきた反射光だった。シンとキラはすぐさま爆発した方向を見る。そこには破壊された倉庫と炎を映してそびえ

たつ3機のMSがあった。

『あれは!』

シンとキラが同時に声をあげる。それはナイトメア、ウラヌス、スレイヤーの3機のガンダムだった。

## 第22話「2VS3」

突如、港で起こった爆発に市内はパニックとなった。

雲に覆われ真つ黒な空を閃光の軌跡を描きながら2機のMSが飛翔する。1機はキラの乗るストライクフリーダム、もう1機はシンの乗るデステイニーである。

「キンバリー以下ムラサメ隊は船の防衛。あの3機は俺たちがやる！」

『了解です！ お気をつけて！』

2度の戦闘で相手の実力はよくわかっている。ムラサメBでは出て行っても撃墜されるだけだろう。シンはキラと共にこの3機を食い止める決心をした。

「キラさん、ほかの2機は？」

『中近東でボクが戦った相手だ。気をつけて、並みの腕じゃない』

キラがそう言い終えないうちに閃光が夜気を焼き尽くす。ウラムスのビーム砲撃だ。さすがに2機ともビームを回避するが、ビームは背後に広がる市街地に突き刺さり、惨禍を撒き散らした。

「しまった！ なんてことを！」

『街を背にしちゃダメだ！ 回りこもう！』

『そうはさせないよ！』

シンの通信回線に聞き覚えのある声が響く。前方から接近してくるの黒いMS。アルマンの乗るナイトメアだ。

『今日こそ仕留める！ フリーダム！』

キラの眼前にビームの刃が舞った。反射的に回避したキラは、ヴァイオラの乗ったスレイヤーの両眼が赤く輝くのを見た。

「キラさん！」

『シン！ 目の前の相手に集中して！』

キラの言葉にシンは前方のナイトメアに意識を集中させる。空中に浮遊するナイトメアは例のアルミューレ・リュミエールを展開し、

ビームライフルでデステイニーを牽制する。

「ルナをどこにやった！」

『言つたろう！ ボクの側だって！』

アルマンの声にシンは昼間に見かけた女性がルナマリアであることを確信した。あのホテルに彼女は泊まっているのだ。シンはアロндаイトを抜き、ナイトメアへ向けてデステイニーを突進させる。

『何度も同じ攻撃が通用するかよ！』

嘲弄の声と共にナイトメアがアロндаイトをかわす。次の瞬間、

シンはアロндаイトを捨て、右手に仕込まれた格闘武器・パルマファイオキーナでナイトメアのアルミューレ・リュミエールを攻撃する。

「これならどうだあ！」

パルマファイオキーナのエネルギーフィールドとアルミューレ・リュミエールのエネルギーフィールドが干渉しあう。虹のような輝きが爆発し、2機は距離を取る。

『生意気だよ！ お前！』

「そうかい！」

ナイトメアが放つビームをかわしながらデステイニーはもう一度パルマファイオキーナを使う。射撃ではアルミューレ・リュミエールに止められてしまったため、ナイトメアに勝利するには接近戦しかない。

『接近戦がしたいなら相手になつてやる！』

興奮したアルマンの声と共にアルミューレ・リュミエールが解除される。光の球体を失ったナイトメアは、その禍々しいシルエットを現す。シンはその行動にひるまず、次は肩についたビームサーベルを抜いて切りかかった。

ナイトメアのビームサーベルとデステイニーのビームサーベルが何度も交錯する。実力で言えばキラやアスランに匹敵するはずのシンだが、アルマンの驚異的な反射神経の前にことごとく攻撃を防がれる。

「お前、エクステンデッドか！」

『正解と言いたいが、ちょっと違うね!』

振り下ろしたビームサーベルを弾き、ナイトメアがデステイニーに切りかかる。かろうじて後方に逃れたシンだが、完全にさげきれずデステイニーのアンテナが1本両断された。

『ボクは特別さ! 生まれつき反射神経が常人の数倍早いんだ!』  
「なっ!」

シンが驚きの声をあげる。

『ボクはミュータントなんだよシン・アスカ!』

遺伝子を管理するコーディネーターに突然変異は存在しない。しかし、自然発生のナチュラルには生まれ付いて高い能力をもつ人間が生まれる可能性があるのである。そして、アルマンはその突然変異をさらに強化したエクステンデッドなのだ。

『ボクの反応速度はキラ・ヤマトを上回る! 終わりだシン・アスカ!』

「スーパーエクステンデッドってことかよ!」

シールドとビームサーベルで防ぎながらシンはナイトメアを郊外へと移動させようとした。だが、その意図を察知したのかジャックの乗るウラヌスがデステイニーの背後に降り立つ。

『俺の相手がいなくなつてなあ。相手をしてもらうぜデステイニー!』  
吼えるようにジャックが叫び、ウラヌスが急加速をかける。前方にナイトメア、後方にウラヌスと、2機の強敵に囲まれシンは絶体絶命の危機に陥った。

### 第23話「勝者の見た光景」

「くっっっ！」

急加速のGによる衝撃に耐えながらシンは操縦桿に離さない。息つくひまもなくナイトメアのビームサーベルが眼前に迫るが、シンはデステイニーを巧みに操ってこれをかわす。

(遅い！)

呼吸さえ忘れるほどの超高速戦闘にシンは焦っていた。デステイニーの反応がシンの思うよりも遅いのである。どんなに正確に動かしても1テンポずれる。時間にして0.1秒にも満たない時間であるが、それが今のシンにはもどかしい。

「！ 反応が遅れる！」

回避しきれずウラヌスのビームをシールドで弾く。シンの予想では完全にかわしていたはずだった。しかし、デステイニーの反応速度はシンの動きをトレースしきれない。眼前に迫る2機のMSを前にシンは死を予感した。

「くそおおおお！」

『落ちていてシン！』

こちらに迫っていたナイトメアとウラヌスがいきなり左右に分かれる。上方からビームサーベルを抜いたストライクフリーダムが現れ、デステイニーを抱きかかえて後退する。獲物を取られたナイトメアとウラヌスがすぐさまその後を追う。

『逃がすかよ！』

『くっっ！』

ウラヌスのビームをキラのフリーダムはデステイニーを抱えた状態でかわす。バーニアが限界まで吹き上がり、ノズル部分が赤く染まっている。

「キラさん！」

『シン、別々に戦っているだけじゃムリだ！ 一緒にいくよ！』

「！……了解！」

我に返ったシンがデステイニーを立て直す。シンはストライクフリーダムの背後から迫ってきた3機めがけ長距離ビームを放つ。

『うお！』

突然の砲撃に3機は散開した。その瞬間、ストライクフリーダムが腰のレールガンでスレイヤーを狙い撃つ。スレイヤーは胸部バインダーをドラグーンごと灼かれ、バランスを崩して地面に叩きつけられた。

『姉貴！ てめえ！』

激昂したジャックがウラヌスを突進させる。キラがすぐにレールガンで迎撃するが、ジャックはやすやすとそれをかわした。

『落とし前をつけるぜフリーダム！』

「させるかよ！」

至近距離でビームを放とうとするウラヌスにデステイニーが襲い掛かる。完全に不意をつかれたウラヌスの大型ビームライフルをデステイニーのサーベルが両断する。

『ナニイイ！』

最大の武器を失ったウラヌスは後退を余儀なくされる。ビームサーベルとイーゲルシュテルンはあるものの、砲撃用MSであるウラヌスではデステイニー、ストライクフリーダムには対応しきれない。ジャックは下唇を強くかんだ。

『役立たずどもめ！ ボク1人で片付けてやる！』

アルマンがナイトメアを突出させる。目標はもちろんデステイニー。超人的な反射神経によって放たれるビーム砲撃はデステイニーを正確に捉えた。

「負けるかよ！ ルナを取り戻すんだ！」

『渡すもんか！』

デステイニーのビームシールドがナイトメアのビームを拡散させる。だが、立て続けに放たれたビームはシンの反応速度をもってしても防ぎきれない。

『終わりだシン・アスカ!』

『そうはいかないよ!』

キラの声と共にストライクフリーダムドラグーンが空を舞う。地上でも使用可能なように軽量化・大出力化したドラグーンは、ナイトメアのビームにビームをぶつけるという神業的な射撃を見せる。『ばかな?』

アルマンの口がOの字に開く。その呆然とした瞬間についてシンのデステイニーがまっすぐにナイトメアをめざす。アルマンは慌ててアルミューレ・リュミエールを展開させようとコンソールを叩いた。

「もらった!」

『ちい!』

展開よりもデステイニーのほうが早い。デステイニーのサーベルはナイトメアの右肩を貫き、そのままビームライフルごと腕を斬り飛ばしてしまう。主要兵器を失ったアルマンは、敗勢を悟って機体を後退させる。

ナイトメアの後退に、ウラヌスとスレイヤーも続く。致命傷は負ってないものの3機とも戦闘力を喪失している。これ以上の戦闘は不可能であった。

「ハア…ハア…ハア……」

3機が見えなくなるとシンは荒く息をつきながらヘルメットを脱いだ。そして、シート横にあるダッシュボードからドリンクを取り出して一口含む。酸味の強い液体が広がったあと、口の中に血の味がひろがる。いつの間にかどこかを切っていたらしい。

「キンバリー。敵は後退した。そっちはどうだ?」

『こちらは問題なし。ただ、街のほうはさっきの砲撃でかなりの被害が出ています』

キンバリーの報告にシンは街の方角をみやった。たった1発のビーム砲撃で市街地は炎の回廊と化し、今だ各所に広がっている。その光景にシンは忌まわしいオーブでの惨劇を思い出していた。

「ちくしょう！ こねじゃ昔と一緒にじゃないか……！」  
コクピットの中で涙ぐむシンの姿は、どう見ても勝者には見えな  
かった。

## 第24話「プライド」

キラたちから逃れたアルマンたちは、街の北40キロの地点にある峡谷に着陸した。

「アルマン大丈夫ですか!？」

ハッチを開けたアルマンにルナマリアが着てくる。汗ばんだ前髪をかきあげ、アルマンは大きく息をついてコクピットを出た。ルナマリアはそんなアルマンの手をそっと握り、アルマンもまた彼女の手を握り返した。

「失態だったなシトリー」

ギイが降りてくるアルマンとルナマリアを見上げて告げる。アルマンはギイから視線をそらし、ルナマリアに身を寄せる。

「さすがに重力戦ではナイトメアは動きが鈍い、か」

「宇宙だったら負けなかった……スレイブもなかったし……」

今更何を言ってもいいわけなのはわかっていた。アルマンはギイに聞こえないように小さく言い訳を独語する。そんなアルマンをルナマリアの手が優しく抱きしめた。

「大佐!」

ウラヌスとスレイヤーから降りてきたジャックとヴァイオラが歩いてくる。2人とも顔色が良くない。敵に敗北したシヨックは驕慢なジャックから覇気を失わせていた。ギイはそんな3人の顔をしばらく見比べ、口を開いた。

「作戦は成功だ」

「?」

ギイの言葉にヴァイオラが怪訝そうな顔をする。顔を伏せていたアルマンもギイの意外な言葉に顔を上げる。

「どういうこと? 作戦目的はアスハの殺害だって……」

「もちろんそれが最終目標だが。第一目標は違う」

ギイはそう言って空を指差す。さきほど戦った都市のある方角で

ある。3人がそちらを見ると夜だというのに空が赤い。

「第一目標はLOWのMSとの戦闘を多くの市民に目撃させることと、市街地に大きな損害を与えることだ。諸君らはこの目標を達成している」

「な……」

ジャックが絶句する。作戦目標が2つあり、その1つは自分たちに知らされていなかった。そのことを知り、ジャックはギイへの憤りの表情を浮かべた。だが、ギイはそんなジャックの様子を気にした風もなく言葉を続ける。

「機体の損傷なら気にするな。現時点での2機と戦って敗れる可能性があることはわかっていた。すでに技術チームが貴様らのMSの強化プロジェクトに着手している。基地に戻り次第、改修にとりかかるぞ」

そう言い放つとギイは踵を返した。どこまでも秘密主義を徹底するギイをアルマンたちは怒りと恐怖のない交ぜになった表情で見送った。

デステイニーを降り、被害現場に向ったシンはその光景に絶句した。

わずか1発のビーム砲の直撃で、街の中心部は地獄へと変わっている。艦砲以上の火力を持ったビームだっただけに建物の被害は相当地、まだあちこちのビルに倒壊の危険性があり、消防士や軍が住民の救出・避難にあたっている。

「ひどいな……」

ガレキの下敷きになった老人を助け起こしながらシンは周囲を見回す。水を求める怪我人や埋まっている家族の救出を求める人々。そして必死の救助を行う消防士と、そこは怒号と悲鳴がうずまく地獄だった。

「お兄ちゃん……」

少女の声にシンは驚いて振り向いた。一瞬、自分の妹のマユの幻影が視界に飛び込むがよく見ればそれは灰色に焦げた熊のぬいぐるみを抱えた5歳ほどの少女だった。

「……どうした？」

「ママを……助けて」

少女がガレキの一角を指差す。そこにはガレキの間から白い女の手が生えていた。手はピクリとも動かない。シンはそれを見て彼女の母親が死んでいることを悟った。

「……」

「ねえ、助けて？」

少女がシンの服のすそをひく。シンは泣き出したいのをジッとこらえながら、少女の前にひざをつく、寒さに震えるその小さな体を抱きしめた。

「……ごめん、ごめんなあ……ごめんなあ」

熱い涙が両目にこみ上げてくる。しかし、シンは瞳をきつく閉じてそれをさえぎる。涙を流す前にやることがある。少女を抱きしめながらシンはしだいに戦士としての己を取り戻していった。

## 第25話「ネゴシエーション」

襲撃の翌日、カガリは当初の予定通り北大西洋連合大統領官邸を訪れた。

昨日の今日であるから警備は厳重を極めた。北大西洋連合政府は市街地を完全に封鎖し、陸戦部隊のほかMS1個大隊を配備した。このような厳戒態勢を布いたため、極秘会談は必然的にマスコミの知るところとなり、カガリは質問の集中砲火を浴びることになった。

「今回の訪問の目的はやはりLOWの去就問題でしょうか？」

「プラントの離脱宣言についてのコメントを！」

「昨日の襲撃事件についてはどうですか？」

フラッシュを浴び、突き出されるマイクをさけながらカガリは官邸に入った。キラとシンはその左右につき、油断なく視線を配っている。

「まったく、ここまで大事になるとは」

「そう言わないで」

ため息をつくカガリにキラが微笑みかける。シンはそんな2人を見て、彼らが双子の姉弟であることを思い出した。

「しかし、これである程度やりやすくなったのかもしれない」

「？」

キラがカガリの言葉の意味を図りかねて首をかしげる。カガリは自信ありげな表情でキラのほうを見る。

「オーブと北大西洋連合がLOW支持を表明すれば、LOW離脱を考えている諸国は方針を転換させねばなるまい。そうすればキラもアスランも多少は楽になるはずだ」

「……カガリ」

カガリがにつこりと笑う。世界平和維持の軍としてカガリはLOW設立に心血を注いだ。それが崩壊しつつある現状に、彼女は我慢できなかつたのである。

「心配するな。私とてオーブの元首だ。大統領を説得してみせる」  
そう言うカガリを見て、キラは彼女を信じてあげたいと心のそこから思っていた。

北大西洋連合大統領との会談はカガリが思っている以上に難航した。

「で、ありますから！ プラント離脱に対しては根強い交渉を継続すべきでしょう」

「しかし、世界情勢が不安定の一途を辿っている時期に離脱するというのは、やはり容認すべき事項ではない」

大統領の言葉は冷たい。カガリは拳を握り締めて言葉を続ける。

「だからといってここでプラントへの懲罰行為ということになれば、ナチュラルとコーデイネイターの対立軸の繰り返しではありませんか！ ここは話し合いを！」

「では、いつまで待てばよいのですか？」

「それは！」

大統領の顔はあくまでも温和そのものである。カガリは答える言葉を失い、その場に立ち尽くす。

「アナタが待てというならば私は待ちましょう。しかし、国民の手前、永遠というわけにはいかない……」

「……」

大統領は窓の外に目を転じる。庭の向こうでは市民たちが反テロのデモを行っている。

「昨日の襲撃以来、国民はテロへの徹底抗戦を叫んでいましたな。」

そして、それと同時に孤立主義のプラントへの不満も高まっている  
「それは……」

マスコミは昨夜の襲撃を声高に報道している。その論調は世界が歩みを揃えてテロに対抗すべしというものである。そして、彼らの

避難の先はテロ組織と世界と歩調をあわせないプラントに向けられていた。

「プラントのLOWへの再参加要求を受諾させるのにいつまで待てばよろしいでしょうか？」

答えられるわけがない。答えに窮するカガリをキラとシンが心配そうに見つめる。

「……半月。いや1ヶ月待つて欲しい……」

「1ヶ月。それでよろしいですな」

「カガリ！」

たまらずキラが声を上げるが、大統領の視線に止められる。カガリは青ざめた表情のままソファに腰を落とす。

「では、2カ月後の予定だった世界元首会議を1ヶ月前倒しいたしましょう。そこにプラントの代表が出席しない場合、私はプラントへの懲罰を提案します」

大統領が立ち上がる。歩み去っていく彼を見送ることもできず、カガリは座り込んだまま床を見つめていた。

## 第26話「開戦」

カガリから会談の報告を受けたアスランはすぐにプラントへの専用回線でラクスタちと連絡を取った。

『プラントがLOWへの復帰を受諾しない場合、懲罰行動ですか…』

ラクスの顔が曇る。アスランは無意識に親指のつめを噛む。

「もちろんすぐに武力行使という段階にいかないだろうが、経済封鎖程度は十分に考えられるな」

『それですむとは思えんな』

ラクスの隣に座っているイザークがしかめ面で言う。ことが国防問題に関することであるため、ラクスが同席を求めたのだ。

「LOWではテロリストの拠点割り出しに全力をあげている。キラからの連絡では、情報提供があつたらしいから事態は好転するはずだ」

『1ヶ月で拠点を絞り込めるか？』

絞り込んだとしても組織を完全に潰せるとは限らない。現実的なイザークの言葉にアスランはまた眉根にしわを寄せる。

「わからんが…やるしかない。イザークはプラント内の警戒を厳にしてくれ」

『言われなくてもわかっている』

イザークが真剣な面持ちでうなづく。

「とりあえず世界元首会議へは必ず出席して欲しい。LOW参加の件はともかく、ここでプラントが孤立してしまうのはまずい」

『承知しています』

ラク스가うなづく。アスランはその言葉を信じたいと心のそこから願った。

アスランたちの心配をよそに、アザナエル軍の大規模な活動はその後まったく見られなくなった。

しかし、ブルーコスモス残党の支配下にある中近東の奪還は遅々として進まず、アスランらLOWはオーブで開催される世界元首会議の警護に全力を注ぐことを決定した。

「戦力だけはそろったけど……どうもな」

デステイニーの cockpit でシンは居並ぶムラサメB部隊を眺めていた。各地のLOW支部から集めたMS部隊は全戦力の50%近くへのぼり、キラとアスランの指揮の下、鉄壁の防衛態勢を布いていた。

「シン、聞こえている？」

メイリンの声が通信回線に飛び込んでくる。彼女は作戦司令室でアスランの作戦指示のシンたち前線部隊に伝達する役目を担っている。だが、今シンの回線に入ってきたのは彼女の個人回線だった。「どうした？」

「お姉ちゃんのことなんだけど……」

シンの表情が引き締まる。ルナマリアの無事は未だに確認されていない。実の妹であるメイリンの声がかすかに揺れる。

「大丈夫……だよな」

「ああ、情報部も敵の本拠地を探している。ルナは絶対に生きている。何も心配するな」

「でも……」

「俺が死なせない。絶対に」

あの日ホテルで見たのは確実に彼女である。なぜ彼女があんなところに居たのかはわからないが、生きているのは確かである。

「シン……」

「ん」

「ありがとう……」

回線が切れる。シンは大きく息をつく、自分の頬を両手で思い

切り叩くとヘルメットを被り、バイザーを閉じた。それを待っていたかのようにメイリンの声が飛び込む。

『所属不明のMS部隊接近中！ シン・アスカ隊長は部隊を率いてただちに出撃せよ』

「了解！ シン・アスカ以下8名。ただちに所属不明機の臨検に向います」

ついに仕掛けてきた。シンはレバーを固く握りしめながら復唱する。臨検といっても実質は迎撃任務である。シンは背後に待機しているキンバリー以下ムラサメ部隊に声をかける。

「行くぞ！」

『了解です。今度こそ勝ち戦にしたいもんですな』

キンバリーが陽気に答える。シンはその言葉に何も言わずデステイニーのエンジン回転数をあげていった。

一方、ラクスを代表とするプラント使節団はオーブ飛行場から会議会場へと向う車の中にいた。

「戦闘ですか？」

離陸していくデステイニーとムラサメBを見てラクスが正面に座るキラに聞く。キラも窓の外の光景を見て静かに頷く。

「この会議を狙って敵が動いているんだ。大丈夫、僕らが絶対に近づかせないから」

「信じております……」

ラクスが微笑む。キラはその表情を見てまぶしそうに眼を細める。「来てくれてうれしいよ。これでプラントと地球の対立だけは回避できそうだ」

「ええ、LOW復帰はまだ議会を通過していませんので、ここで時間稼ぎをしておかなければ……」

ラクスの表情には疲労の色が濃い。どのような手腕を持っていて

も所詮は十代の少女なのだ。キラは心配そうにラクスの様子を伺う。

「大丈夫です。まだがんばれますよキラ・ヤマト」

「無理はしないでね。ボクやアスランもがんばるから」

キラの言葉にラクスが微笑み、キラも笑顔を返した。そしてキラは真顔に戻り、運転手に声をかける。

「ここで止めてください」

「え、はい」

車が音もなく停止する。キラはドアを開けると車外に降り立った。ラクスが怪訝そうにキラのほうを見つめる。

「ボクも出撃する。だからラクスはそのまま会場に行つて」

「でも……」

キラがもう一度微笑んだ。ラクスは何も言わずにドアを閉めると、決意を秘めた眼差しで歩き去っていくキラを見つめていた。

## 第27話「ロンド」

オノゴロ島の南西洋上では、シンたちが敵MS部隊と戦闘を開始していた。

「ちい！」

切りかかってくるダガーLをビームシールドで弾き飛ばし、デステイニーは反対側から接近してきたウイングダムをビームライフルで撃墜する。そして、そのまま銃口をダガーLに向け1発。リフターを破壊されたダガーLは猛スピードで海面に衝突し、壊れた人形のように破片を撒き散らす。

「次から次とお！」

コクピット内でシンは敵の動きをリーダーで追っていた。敵は中規模の部隊を多方面から散発的に送り込んできている。そのため、LOWも戦力を分散せざるを得ず、戦いはどちらが有利ともつかない混沌としたものになっていた。

『隊長！ こいつは変ですよ』

「ああ、わかっている！」

苛立ちながらシンはキンバリーに答える。敵の目的が会場攻撃ならばこんな戦法はまったく意味を為さない。畏の可能性を感じつつ、シンはそれを見抜けない自分に苛立ちを強めていった。

『2機目いただき！』

デステイニーの上方をムラサメBが飛翔する。新たに配属されたキム・ノヴァの機体である。俊敏な機動で敵の火線をかわずキム機にシンはチラリと視線を送った。

「！」

キム機に一条の光が走る。そして、キムのムラサメBがゆつくりと左右に分かれ、その間から赤いMSの姿がのぞく。ヴァイオラの乗るスレイヤーだ。

「キム！」

シンの叫びとキム機が爆発するのは同時だった。爆炎の中、スレイヤーはビームサイズをふりあげてデステイニーに襲い掛かる。シンはすぐに気持ちを切り替えるとビームライフルでスレイヤーの頭部を狙った。

だが、デステイニーの放ったビームはスレイヤーの寸前であらぬ方向に曲がってしまう。何度か射撃を繰り返すがビームはスレイヤーに届く間に歪曲されてしまった。

「ゲシュマイディッヒ・パンツァー！」

『正解だよデステイニーのパイロット！』

かつて地球連合が開発したMSフォビドゥンに搭載されていたという偏向ビームシールド。原理はデステイニーのビームシールドと同じだが、ビームを弾き返すだけではなく、偏向させて任意の目標に命中させることができるという特殊兵器である。

『強化されたスレイヤーの力を見せてやる！』

ヴァイオラの叫びと共にスレイヤーのマント部分からドラグーンが射出される。大気圏でも機動できるように改良されたドラグーンがデステイニーに容赦の無いビーム砲火を浴びせる。シンはデステイニーを海面スレスレまで降下させ、ソニックブームでおきる水しぶきを盾に攻撃をしのぐ。

『甘いよなあ。そんなもんじゃ俺たちの攻撃はしのげねえぜ！』

高空からビームがデステイニーに降り注ぐ。雲を切り裂いて海面に突き刺さったビームは周囲の海水を水蒸気に変える。その水蒸気爆発にデステイニーの機体が揺れた。

「あいつか！」

かろうじてデステイニーのバランスを保ったシンが上空を見上げる。そこには純白の翼を広げ、2丁のビームライフルを構えたウラヌスが浮かんでいた。

『いくぜえええ！』

ウラヌスがバーニアを吹かす。ビームライフルは素早く背部にマウントされ、ウラヌスの両手で巨大なビームサーベルを構えた。そ

れは驚くほど高出力のビーム刃を形成しており、大きさは通常のビームサーベルの優に二倍はあった。

「くっ！」

すぐさまビームサーベルを抜いたデステイニーに、横合いからスレイヤーのドラグーンが仕掛けてくる。反応の遅れるデステイニーを何とか制御してビームをかわしたシンは、振り下ろされるウラヌスのビームサーベルをシールドとサーベルで受け止めた。

『そんなものでこのレーヴァティンが受け止められるかよ！』

勝ち誇ったジャックの声とともにウラヌスがさらに出力をあげる。光の大剣と化したビーム刃がデステイニーのサーベルとシールドを焼き、装甲を溶かし始める。

(このままじゃ……やられる……)

シンの背中に冷たい汗が流れる。横を見ればスレイヤーがビームサイズを構えて接近するのが見える。キンバリーたちムラサメBが必死に防戦しているが、スレイヤーの前には何の意味も為さない。

『まず1機！ いただく！』

『させないよ！』

ビームサイズを振り上げようとしたスレイヤーをビームの雨が襲う。かろうじてゲシュマイディッヒ・パンツァーで防いだものの、スレイヤーは後退を余儀なくされた。

「こいつは……」

『きやがったな！ キラ・ヤマト！』

歓喜交じりの怒声とともにウラヌスはデステイニーとの力比べをやめ、機体を上昇させる。シンはスレイヤーを襲ったビームの正体がドラグーンであることに気づき、ウラヌスが上昇する先を見た。そこには雲間から急降下してくる白いMSがいた。

「キラさん！」

『シン！ ケガはないね。ここからが正念場だ！ 行くよ！』

キラの言葉にシンもデステイニーを上昇させる。それに気づいたジャックはウラヌスを方向転換させ、ビームライフルを構える。

『お前の相手をしている場合じゃないんだよ!』

2丁のビームが閃光を吐き出す。だが、シンはデステイニーの両腕のビームシールドを重ね合わせてそれを受け止めた。光の中から飛び出してくるデステイニーを見て、ジャックが驚愕の声を上げる。

『バカな!』

「くらえ!」

瞬間的にアロンドイトを引き抜いたデステイニーがウラヌスへ大上段から切りかかる。ウラヌスもライフルを捨て、レーヴァティンを抜いてこれを受け止めた。

「防がれた!」

『簡単にやられるわけねえだろうが!』

渾身の一撃を受け止められ、シンはすぐにデステイニーを後退させる。ウラヌスはそれを追わずゆっくりとレーヴァティンを構えなおした。その背後にドラグーンをかくぐったスレイヤーがピツタリと寄り添う。

『姉貴はフリーダムをやってくれ。俺はコイツを先に片付ける』

『了解。デステイニーは手ごわいわ。気をつけてねジャック』

短く言葉を交わしスレイヤーが飛来するフリーダムを迎え撃つ。

シンはアロンドイトを構えなおし、改めてウラヌスと対峙した。

『さて、第二ラウンドといこうか』

コクピットでジャックはそう言って唇をなめた。

## 第28話「洋上会戦」

ウラヌスのレーヴァティンとデステイニーのアロンダイトが交錯する。ビームの刃同士が干渉し、弾けた粒子が飛沫となって双方の装甲に焼け跡を残す。

ウラヌスは一撃離脱を得意とする強襲タイプのMSである。大出力のバーニアで機体を加速させ、すれ違いざまに一撃を加えて射程外に離脱するのが基本戦法なのだ。ウラヌスの一撃をかわしながら、反撃を加えようとするシンだが、ウラヌスの加速の前にタイミンクを逃してしまう。

「くそ！」

距離をとったウラヌスが牽制のためにビームライフルを放つ。2丁あるうちの片方だけなので威力は半減しているが、それでもMS数機を楽に吹き飛ばす威力を持っている。デステイニーがかわした背後で避けきれなかったムラサメBが爆発して海面に激突した。

「ちくしょう！」

シンは苛立ちながらデステイニーの長距離ビーム砲でウラヌスを狙おうとする。しかし、機動力に優るウラヌスは、シンがターゲットを定める前にこちらの懐に迫ってくる。

「アハハハ！ どうした？ LOWのトップエースさんよお！」

ジャックの嘲弄と共にレーヴァティンが唸りをあげる。シンはデステイニーの上体をそらしてその一撃をかわし、眼前を通過するウラヌスにイーゲルシュテルンを放った。

「くっつー！」

攻撃力と機動力に特化しているウラヌスは驚くほど装甲が脆い。ジャックは、ばら撒かれるイーゲルシュテルンをかわすため、過剰なほどの急制動で機体を横にずらす。

その隙を見逃すシンではなかった。すぐに機体を立て直すと、アロンダイトを構えたままデステイニーをウラヌスに突進させる。一

瞬の急制動で速度の鈍ったウラヌスはこれをおかしきれず、左脚を切り裂かれる。

「外したか！」

『さすがだな！ デステイニー！』

一瞬の間を見逃さないシンも見事だが、それを察知して直撃を避けるジャックの技量も並みではない。両者は荒く息をつきながら、再びバーニアを吹かして交錯した。

『ほらほらほらほら！』

スレイヤーのビームサイズがストライクフリーダムの装甲をかする。キラはビームサーベルでビームサイズを斜め上に跳ね上げるが、ヴァイオラは機体を一回転させ、弾かれた軌道を修正して斜め下から斬り上げてくる。

「！」

この変則的な攻撃にキラはたまわずストライクフリーダムを後退させる。すると待っていたとばかりにスレイヤーのドラグーンがストライクフリーダムを襲う。そのビームの雨をおかしながら、キラはストライクフリーダムのビームライフルでスレイヤーを狙う。

『甘い！』

放たれたビームはスレイヤーの手前で方向を歪める。そのビームはスレイヤーのドラグーンを中継し、ストライクフリーダムに襲い掛かる。キラは思っても見なかった状況に冷や汗を流す。

「ドラグーンにもゲシュマイティツヒが？」

『そうさ！ どんどん撃つてきなさいよキラ・ヤマト』

冷たい笑みを浮かべたヴァイオラに対し、キラの表情は固く強張る。だが、手をこまねいているわけにもいかず、キラは腰のレールガンとドラグーンでスレイヤーをおかし乱す戦法に切り替える。

ストライクフリーダムのドラグーンとスレイヤーのドラグーンが

激しく飛び回る。その間を縫ってキラは機体をスレイヤーに接近させた。

ビームサイズをふりあげたスレイヤーが眼前に迫る。キラは操縦桿を素早く動かし、腰のレールガンを発射する。至近距離からの奇襲。これをおかわせる者などいないはずであった。

「何！」

「悪くない手だったわ。でも、私には通用しない！」

ストライクフリーダムは腰のレールガンがドラグーンのビームに破壊された。これだけの乱戦の中でヴァイオラは、ドラグーンを完璧にコントロールし、精密射撃を成功させたのである。

ヴァイオラは空間認識能力が異常発達した少女だった。総合力ではアルマンに劣るもののドラグーン兵器の操作に関しては彼女は誰にも負けない自信があった。

「次は胴体を狙わせてもらおう」

スレイヤーのドラグーンが美しい軌道を描いてストライクフリーダムの周囲を旋回し、射撃をくわえてくる。ヴァイオラほどドラグーンをうまく扱えないキラは、ドラグーンを周囲に展開させて迎撃するので精一杯だった。

「ちい！」

ビームライフルも使ってドラグーンを数基破壊するが、攻撃は止まらない。逆にストライクフリーダムのドラグーンはほとんど撃墜され、キラはドラグーンの竜巻の中で孤立した。

「とどめえええええ！」

頭上からスレイヤーが襲い掛かる。十分に加速をかけたビームサイズの一撃をキラが超人的な反射神経でかわす。だが、そのさいにビームライフルを2丁とも切り落とされてしまう。すぐさま両手でビームサーベルを抜いたキラは、追撃を仕掛けるスレイヤーの一撃を二刀で受け止める。

「ジャックを待つまでもない。私が仕留める！」

「ぼ、僕は負けるわけには………！」

『キラ！』

聞き覚えのある声がキラのヘルメットに響く。次の瞬間、二条のビームがスレイヤーのバインダーを粉碎する。ヴァイオラは突然の奇襲に驚き、ストライクフリーダムから離れた。

『新手か！』

振り返ったヴァイオラの目が見開かれる。蒼空を一直線に接近してくるのは真紅のMS。そのシルエットは紛れもなくインフィニットジャスティスのものだった。

## 第29話「強襲の空と海に」

オノゴロ島に設置されたLOW戦術指揮室では、ラファエルがしきりにオペレーターたちに指示を飛ばしていた。

「アルファ2への増援にムラサメB2個小隊！ ベータ7は？」

「敵MS4機が接近中」

「よし、オーブ軍に連絡し、ベータ7への救援をさせる。こちらはガンマ4へ3個小隊。穴はこれで塞がる」

刻々と変化していく戦況に対し、ラファエルは指示を与える。敵の動きが前もってわかつているかのような確な指示に、メイリンらオペレーターたちも息を飲む。

「ザラ司令はどうか？」

「え、あ、はい。ベータ4で敵カスタムMSと交戦中です」

「ヤマト、アスカ両名もいるのだな？」

「はい、3機で敵カスタムMS2機と戦闘中です」

アスランたちを示す青いマークが赤いマークと接触している。ラファエルはそれを見てしばし考え込み、メイリンに支持した。

「ベータ4はこの3機に任す。ムラサメBは2個小隊を残してベータ5に移動させる。敵の増援にあたらせる」

「了解」

多方面から押し寄せる敵MS部隊を相手にラファエルは見事な防衛陣を強いていた。ヘタをすると先ほどまで指揮を執っていたアスランよりも手腕は上かもしれない。

指示を一通り終えたラファエルが指揮シートに体を預ける。さすがに疲れたのか大きく息をつく。

「やっと艦隊編成をロアノーク大佐に任せられたと思ったらコレだ。敗軍の将にしてはコキ使われすぎだよ」

ラファエルの言葉にオペレーターたちの間にかすかな笑い声が出る。

月面基地で艦隊をネオたちに預けたラファエルは、わずかな部下を率いて報告のために地球に降りた。しかし、アスランは彼の敗戦の責任を問わず、そのまま司令代理として自分の側に置いたのである。

そして、今回の敵の襲撃でキラたちが苦戦しているのを知ると、ラファエルに指揮を任せて自分はMSで出撃した。そのため、ラファエルはこうして指揮室で防戦指揮に追われているのだ。

「さて、ホークくん」

「は、はい！」

いきなり声をかけられメイリンが慌てる。ラファエルは真剣な眼差しで彼女を見つめた。

「敵の動き、どう見るかね？」

ラファエルの質問にメイリンは作戦図を見た。敵を示す赤い光点は南西を中心に扇状に広がっている。しかし、北東方面には1つの襲撃報告も無い。

「まさか……」

「ああ、ボクはそう思っている。それに確認されているのは白いMSと赤いMSだけだ。この戦闘は敵にとっても重要な戦いだ。あの機体が出てこないのは妙だ」

「本命は北東ですか？」

「おそらくね」

ラファエルはそこで言葉を切り、メイリンを見つめる。その深い色合いの碧眼は何か固い決意を秘めていた。

「お姉さんにはすまないことをした。私も全力で彼女の行方を追っている。待てというのは酷な言い方だろうが、もう少しだけ時間が欲しい」

「あ、いえ……」

ラファエルが自分をルナマリアの妹だと覚えていたことが意外だった。メイリンはラファエルの真摯な表情に返す言葉を失った。

「司令！ イプシロン8に新たな敵影多数！」

「！」

オペレーターの声にメイリンとラファエルは同時に緊張する。方は現在の主戦場の正反対側である。その位置を確認しラファエルがメイリンに指示を与える。

「ザラ司令たちに連絡しろ。おそらくこれが敵の本命だ。あの黒いヤツが来るぞ！」

「は、はい！」

メイリンが慌てて回線を開く。ラファエルは出現した赤いマークを射抜くように睨み付けていた。

「オノゴロ島の反対側に新手？」

「くそ！」

「ここから間に合うの？」

メイリンの通信を聞いたシンとキラが叫び声をあげる。スレイヤーのビームサイズをはじきながら、アスランはメイリンに聞き返した。

「あの黒いMSは確認されたのか？」

「まだです！でも、ラファエル司令が間違いないと」

アスランは逡巡した。戦術としては困でこちらの注意を一方に集中させてから、本命で裏をかくというのは常道である。こちらもオリーブ軍と連携して反対側にも兵力を配置している。

だが、ナイトメアが来ると言うなら話は違う。あの機体と戦闘経験のあるアスランには、ナイトメアがキラ、シンクラスではないと防げないことがわかっていた。

「シン！ここは俺とキラが食い止める！お前がアイツを止めろ！」

「え、しかし……」

シンがためらいの声を上げる。アスランは苛立って声を荒げる。

「さっさと行け！」

『りよ、了解』

ウラヌスの攻撃をかいくぐりデステイニーが方向転換をする。オノゴロ島のほうに消えていくデステイニーを見送ると、アスランは再びスレイヤーに相對する。

「キラ、損傷したストライクフリーダムには苦しいだろうが白い方を頼む」

『了解。大丈夫。なんとかして見せるよ』

『なんとかなんてさせるかよ！』

『ここで決着をつける！』

スレイヤーとインフィニットジャスティス。ウラヌスとストライクフリーダム。2組の死闘の幕が紺碧の空と海の間で今上がるようにしていた。

### 第30話「ルナ」

オノゴロ島北東部。エリア名称イブシロン8ではオーブ軍とアザナエル軍の死闘が繰り広げられていた。

ここでオーブ軍が相手にするのは、今まで襲ってきたブルーコスモス軍のダガー、ウィングダムではなく、最新鋭のベーオウルフである。性能の劣るM1アストレイやムラサメでは彼らの相手になるはずもなく、戦線は徐々に本島のほうに後退していた。

『弱い奴らがボクに楯突くのが間違いなんだよ！』

アルマンの嘲笑と共にナイトメアのビームランチャーがムラサメを2機撃墜する。アルマンはその爆発も確認せずに、機体を次の獲物に向けた。

『これ以上は！』

『ムダなんだって！』

ナイトメアの胸部が開き、ビームの砲口が顔を出す。アルマンは照準を接近してくるM1アストレイの集団に合わせた。

『くらえよ！』

ナイトメアの胸部が閃光をほとばしらせる。ナイトメアに新たに搭載された拡散ビーム砲である。ビームは無数の光の槍となってM1アストレイの部隊を襲い、彼らをガラクタへと変えていった。

『ふん、クズどもめ』

アルマンが笑みを浮かべようとした瞬間、彼の背筋を氷の刃が通ったような感覚が走った。その正体に気づき、アルマンは視線を感覚の源へと向ける。

『シン・アスカ！』

『ここで止める！』

アロンドイトを振り上げたデスティニーが一直線に切りかかってくる。アルマンはビームランチャーでこれを牽制し、再び拡散ビームを放った。

「こつちも新型か！」

『はん！』

実のところウラヌス、スレイヤーと違ってナイトメアの強化改装は未完成であった。だが、作戦の開始に合わせるため拡散ビーム砲のみをとりつけて出撃している。

しかし、ナイトメアの性能はデステイニーを凌駕している。アルマンはこの戦いでデステイニーを撃墜する覚悟を決めていた。

『お前は弱いさ！ だからここで死ぬんだよ！』

「死ぬわけにはいかない！」

デステイニーのビームライフルがナイトメアのアルミュエーレ・リュミエールにはじかれる。アルマンは余裕をもってビームランチャーを構え、トリガーを引いた。

「ならば！」

一瞬、デステイニーの姿が視界から消える。次の瞬間、アルマンが捉えたデステイニーは黄金の粒子を撒き散らしながら飛翔していた。

『ふん、残像現象か』

アルマンは鼻で笑う。核動力MSが最大出力を出した時に起こる発光によって生じる残像現象である。だが、それはアルマンクラスの手相手には目くらましにもならない。

『いちいち、小細工を！』

ナイトメアのビームランチャーが速射される。それをかわしながらシンはデステイニーの両肩からビームブーメランを放った。

『ちっ！』

アルミュエーレ・リュミエールがビームに干渉する。その一瞬の隙を突き、シンは長距離ビーム砲でビームブーメランを撃ち抜く。撃ち抜いたビームブーメランは光波シールドを引き裂き、ナイトメアの防御に小さな穴を開ける。

『しまった！』

「これでえええ！」

わずかに出来た穴めがけデステイニーの長距離ビーム砲が咆哮をあげた。ズバ抜けた反射神経をもっているアルマンだが、この一瞬には反応が遅れ、ビームが左肩装甲をかする。シンは外してしまつたことに驚き、しばし動きが止まる

「直撃じゃない？」

「よくもおおお！ よくもよくもおおおお！」

怒りの声と共にナイトメアの胸部が開く。拡散ビーム砲が再びせり出し、デステイニーに狙いを定めた。

「くっ！」

すぐさま回避しようとするシンだが、自分の反射神経についていけずデステイニーの反応が一瞬遅れる。すぐにシールドで防御するものの、拡散したビームが各部に当たり、装甲をえぐりとつた。

「まだまだあ」

「終わらせるわけないだろう！」

ビームサーベルを抜いたナイトメアが斬りかかる。機体を後退させるものの機動力はナイトメアのほうが上である。シンはアロンダイトで攻撃を受け止め、逆に反撃に移つた。

「！」

アロンダイトの丁度半ばあたりにビームが命中する。攻撃の方向を見ると赤いベーオウルフがこちらに射撃を仕掛けてきている。シンはすぐにナイトメアから離れると、赤いベーオウルフに切りかかった。

「邪魔をするなあああ！」

「やめろおおお！」

アルマンが絶叫と共に背後に迫る。だが、シンのほうが一瞬速い。両手で突進を防ごうとするベーオウルフをデステイニーの斬撃が襲う。

「ちい！ 浅いか！」

シンが舌打ちをした。背後のナイトメアのプレッシャーに気を取られ、攻撃の間合いを間違えてしまったのだ。赤いベーオウルフは

両腕を断たれ、胸部装甲を切り裂かれたもののまだ撃墜に至っていない。

「なら、これでとどめを！」

再びアロンダイトを振り上げるシンの眼があるものをとらえる。

そして、彼はデステイニーの操縦桿を反対側にきった。

「ば、ばかな！　そ、そんな！」

デステイニーが急激な方向転換をして、赤いベーオウルフから離れる。すぐにナイトメアが2機の間割り込み、損傷したベーオウルフを支える。

『許さないぞシン・アスカ！　ステラ姉ちゃんを殺したばかりか！

ルナ姉ちゃんまで殺すつもりかよ！』

「そ、そんな……ウソだ……ウソだああああ！」

カメラアイで赤いベーオウルフの胸部を拡大したシンが絶叫する。切り裂かれた装甲の先にはコクピットが見え、そこにはヘルメットを被っていないパイロットの姿が見えた。

「ルナ……」

憎悪の視線でこちらを見つめるルナマリアの顔がそこにあった。

### 第31話「責き者の義務」

「アス八代表、こちらへ！」

上空で繰り返し広げられる戦闘を避けるため、ラクスはカガリの手を引く。しかし、カガリはそこに立ち尽くしたまま動こうとしない。

世界元首会議は、敵部隊のオノゴロ島侵入によって休会された。徐々に迫ってくる戦闘の音に怯えながら、各国の元首たちは防空シエルターへと急ぐ。

「このままでは！」

戦闘を見つめていたカガリは、オーブ軍が次々と撃墜されているのを目の当たりにして焦りの色を強めた。まさか会議場の上まで戦闘が広がるとは思わなかったのだ。

「アスランは何をやってるんだ！ キラモ！」

空に向けてカガリが絶叫する。その姿を見ていたラクスだったが、不意に殺気を感じて背後を向く。

「カガリさん」

ラクスが叫ぶのと横合いから誰かがカガリを抱きかかえるのは同時だった。先ほどもカガリがいた場所の土が跳ね上がる。それを見た護衛が慌ててカガリとラクスの盾になる。

「お前は……」

カガリを救ったのはメガネをかけたジャケットの青年だった。その顔を見て、カガリは古い記憶を蘇らせる。

「お久しぶりです。アス八代表」

「サイ……アーガイルか？」

サイはカガリの手を引いてラクスと共に物陰へ隠れる。すぐに護衛たちもその後を追う。ジャケットについた埃を払い、サイがカガリに声をかけた。

「敵の狙いはあなたとクライン議員です。この空襲はいわば罠だ」

「……そんな」

たった2人の人間を殺すためにこれだけの戦闘を繰り広げる。カガリはそのあまりにも被害を省みない敵の作戦に驚きの声をもらす。「それだけお2人が世界にとって重要な存在だということですよ」「あなたはどこでそれを？」

ラクスがそう言うときサイは困ったような顔をする。そして、質問には答えず言葉を続ける。

「ひとまず2人は安全な場所に。敵はMSで攻撃することもできません。軍司令部が核シェルター並みの施設に行ったほうがいい」「そう言いながらサイはジャケットの中から拳銃を抜く。

「何人が手伝つてくれますか？　ここで援護をしますから、あの車まで走ってください」

サイの言葉に護衛が全員頷く。カガリは以前会ったサイの雰囲気とのあまりの違いに驚くばかりだった。

「ほら、やることが決まったらさっさと動く！」

「し、しかし！　ここにお前たちを残しては……」

カガリの言葉にサイが微笑む。護衛たちも決意の顔で頷いた。

「大丈夫ですよ。俺たちはただの牽制です。2人が脱出すれば相手も無理に攻撃しないでしよう」

「そんなことわからないだろ！　私もここで一緒に戦う」

こうと決めたカガリの意思は強固である。サイは何かうまい説明をしようとしたが、何も思いつかず頭をかく。

「ラクス！　お前は車で逃げてくれ。私たちはここで足止めを……」カガリの右頬が音高く鳴った。何が起きたかわからないカガリに、ラクスが声をかける。

「いい加減になさいカガリ・ユラ・アスハ。御身の立場をお忘れか？　ラクスの言葉にカガリは正気に戻った。今、自分がやることは戦うことではない。自分が死ぬばそれだけの人間に迷惑がかかるか、そしてサイたちは誰のために命をかけようとしているか、それらを思い出し、カガリはラクスにぶたれた頬をおさえながら、頷く。

「すまない……行こう」

「ええ。では、サイ・アーガイル……」

「ご無事でラクス・クライン。カガリ・ユラ・アスハ。キラによるしく」

サイはそう言うのと物陰から銃撃を開始する。5人ほどの護衛がそれに続き、その瞬間を衝いて護衛の円陣に守られたカガリとラクスが走り出す。

「ぐっ！」

護衛のくぐもった声がする。カガリの頬に生暖かい液体がかかるが、それを拭いもせずにかガリたちは車へと飛び込む。

「急げ！ 速く出せ！」

振り返ると円陣を組んでいた護衛の1人が倒れ伏している。その護衛に声をかけようとすると、護衛は顔をあげて右手を追いやるようにふってみせた。

「！」

エンジン音が車体を揺らし、タイヤがアスファルトをかむ。徐々に加速していく車には何発もの銃弾が突き刺さるが防弾加工された車体は貫通しない。

「サイ！」

「行け！」

サイが絶叫する。カガリはなおも彼の姿を見ようと後部ガラスに顔を近づけたが、何発かの銃弾が命中し、後部ガラスが一瞬で白く変わる。

「アスハ代表！ 危ない！」

ラクスがカガリを後部シートに押し倒す。カガリは天井を見つめながら、涙が頬を流れるのを感じた。

「クライン議員。私はひどい人間だな。他人の犠牲をこんなに必要として……」

カガリの言葉にラクスはさびしげに微笑む。その瞳にもうつすらと涙が浮かぶ。

「ええ、我々は信じた道を行くために多くの犠牲を払ってきました」

「そうだな……この数年でどれだけの犠牲を払ったかわからない。たかが信念のために」

「では、ここで捨ててしまいますか？ 信念を」

「……それは」

カガリが身を起こす。ラクスの瞳をじっと見つめ、彼女は首を左右に振った。

「そんなことはできない。それでは我々の信じた道に共感して散った者たちへの冒涇になってしまう」

ラクスが微笑む。そこにはさきほどの涙はなかった。

「そうですね。だから、私たちはどんなに苦しくても歩かねばなりません」

「それが義務だな……」

カガリは頷き、運転席の護衛に声をかけた。

「軍司令部に連絡。市民と元首の護衛を最優先。敵MSは無理に撃墜しなくてもいい。ただ弾幕をはって近づけさせるな！」

「はっ！」

護衛が司令部に連絡するため通信機のスイッチをいれる。

「各国元首たちは一箇所に集めず別々の場所に避難させるよ。私はLOW司令部にむかう」

その横顔を見つめながら、ラクスはうれしそうに頷き、カガリがキラの双子の姉であることを思い出していた。

「ルナ……ルナアアアア！」

絶叫しながらシンはデステイニーをベールオウルフに接近させる。

『アルマン！』

「！」

回線から紛れもなくルナマリアの音がする。だが、彼女が名を呼んだのは自分ではない。そのことがシンには例えようもなく辛く苦

しい事実だった。

『呆けている場合かよ』

アルマンの声と共にナイトメアの拡散ビームがデステイニーを焼く。慌てて回避行動をとったシンだが、その動きにさきほどまでの鋭さはない。デステイニーの装甲は無残に焼けただれた。

「くっ……邪魔をするな！」

『デステイニー！ シン、どうしたんですか！』

メイリンの声がヘルメットに響く。シンはとっさにこう応えた。

「メイリン！ ルナがいたんだ。今連れて帰る」

『え？ ど、どういうこと……』

『とどめええ！』

ナイトメアのビームサーベルが振り下ろされる。シンはデステイニーの右腕で受け止めようとするが、さきほどの拡散ビーム砲のダメージでシールドが作動しない。右腕は手首のあたりから両断され、シンは歯噛みした。

「こうなれば！」

シンは機体をベールオウルフに向ける。ナイトメアと正面からやりあつては埒が明かない。ここはルナ救出を優先させるべきだと判断した。

『特攻でもする気か！』

デステイニーの動きを警戒したルナマリアがベールオウルフのイーゲルシュテルンを放つ。その攻撃をかわしもせず、シンは接近する。「ルナ、俺だよ。シン・アスカだ。わからないのか？」

『こいつ！ おかしくなったのか！』

ルナマリアが機体を後退させる。シンは状況が飲み込めないままにその後を追う。

その間にもアルマンはナイトメアでデステイニーを攻撃し続けた。しかし、そのどれもが致命傷ではない。

『この僕を無視するのかよ！ シン・アスカ！』

アルマンにとって戦闘とは己の存在意義のすべてである。強敵と

正面から戦うことを至上の喜びとする彼には、今のシンを背後から撃つことは容認できることではない。そのため、シンの注意をこちらに向けるため、アルマンはわざと致命傷をさけて攻撃を続けた。

『アルマン、チャンスです。こいつを撃墜してしまつて！』

「！」

『え？』

ルナマリアの言葉にアルマンが気抜けた声をあげる。ルナマリアにとってシンは友人以上の存在だったはずである。しかし、今彼女はシンを殺せと言っている。その言葉に違和感にアルマンはあることを思いついた。

『大佐か！ 大佐の仕業か！』

「大佐？」

アルマンの絶叫に近い声にシンの理性がかすかに戻ってくる。その瞬間、シンはルナマリアの顔とステラの顔を重ね合わせ、あることに気づいた。そして、一瞬で憤怒の表情となり、ナイトメアのほうへ向きなおる。

「貴様！ ルナに何をした！」

『うるさい！』

苛立たしげにアルマンが叫ぶ。自分の知らないうちにギイが勝手にルナマリアを洗脳したことが、アルマンにはどうしても許せなかった。アルマンはすぐさま帰還し、大佐を問い詰めることにした。

『今日はここまでだ！ 今度会うまでにせいぜい強くなっておけ！』

『ど、どうしてですかアルマン。なんでデステイニーを見逃すのですか！ それに我々の任務は……』

ルナマリアが慌てて声をかける。だが、アルマンにとってその声はむなしなものではない。

『お姉ちゃんは黙って僕の言うことを聞いてよ！』

ルナマリアが黙る。アルマンは自分の命令を忠実に聞くルナマリアに激しい苛立ちを覚えた。

『……行くよ。ルナ姉ちゃん』

『了解』

アルマンがナイトメアを方向転換させる。だが、その瞬間閃光がナイトメアの左腕を貫く。

『な、何！』

「逃がすかよ！ 絶対に貴様をゆるさん！」

シンが絶叫と共に再びナイトメアへビームを放つ。アルマンはすぐさまアルミューレ・リュミエールを展開しようとするが、デイスプレイに作動不良を告げる赤いメッセージが浮かぶ。さきほどの左肩への攻撃で展開装置が損傷したらしい。

『ちい！ お前に関わっているヒマなんてないんだよ！』

「お前の理屈なんか聞けるかああ！」

左腕だけのデステイニーはビームライフルを捨て、アロンドイトを引き抜いた。アルマンはナイトメアのビームランチャーを構え、この攻撃を牽制する。

『いいだろう！ ここで止めをさしてやるよ！』

「ルナを返してもらおう！ 絶対にだ！」

『絶対にヤダね！』

デステイニーが残像現象を繰り返しながら急接近する。ナイトメアがビームで迎撃するものの、直撃をたくみにさけながら、その距離は縮まっていった。アルマンはシンの気迫に明らかに押され、ビームランチャーを捨て、ビームサーベルを抜く。

『コレでええええ！』

「終わりにしてやる」

デステイニーとナイトメアがぶつかる。シンとアルマンは同時に絶叫し、お互いの機体が己の刃をつきたてた。

### 第32話「別離」

デステイニーとナイトメアはお互いの胴体を貫いていた。メイン動力炉は外したものの制御系を完全に破壊された2機は地表に叩きつけられた。

激しい衝撃でコクピット内のシンは上下に揺さぶられた。シンは朦朧とする頭を軽くふると、コンソールを叩く。

「くそ！」

制御系は全滅。脱出装置もセーフティもまったく応答がない。シンはコンソールを拳で叩くと、シート横のハッチ強制開放レバーを引く。

火薬の爆発音と共にデステイニーのハッチが吹き飛ぶ。白い火薬煙を払ってコクピットから出たシンは、目の前に黒いノーマルスーツの小柄な人物を見た。

「……」

「！」

慌てて何か叫ぼうとしたシンの腕を黒いノーマルスーツが掴む。子供のように華奢なくせにやけに力が強い。シンはそのヘルメットの向こうに少年の顔を見た。

「シン・アスカ……」

「お、お前は……」

少年の顔が憎悪に染まり、そして一瞬不敵に歪む。シンは何も言わずその表情に見入っていた。

「ボクの名はアルマン・シトリー。絶対に忘れるな」

「な、何を……言っ……」

「今度やる時は殺す……」

それだけ言っただけアルマンはシンの腕を放す。シンがその後を追おうとするが、突風が邪魔をする。見ると損傷したベアウルフがアルマンを手に乗せている。コクピットが開き、中からパイロットが

アルマンを迎え入れているのが見えた。

「ルナアアア！」

ヘルメットを脱ぎ捨て、シンが絶叫する。その声にパイロットが驚いたように反応する。

「戻ってこい！ ルナのいる場所はこつちだ！ そこじゃない！」  
パイロットはしばらくこちらを見つめていた。だが、アルマンがその体を強引にコクピットに押し戻し、機体はゆっくりと上昇を開始する。

「戻って来い！ 戻って来い！ 戻ってこおおおい！」

絶叫を繰り返しながら、シンが膝を突く。飛び去っていくベールオウルフを見つめながら、シンは声がかかるまで叫び続けた。

ナイトメアの撤退を境に、LOW・オーブ連合軍はブルーコスモス残党軍への反撃を開始した。奇襲部隊が後退したことで防衛ライオンの再構築に成功した連合軍は、戦力を正面の残党軍に集中。元々数に優る連合軍は、残党軍を島域外へと押し戻した。

『こちらアスラン！ 敵MS部隊は後退した。これより本部に帰還する』

アスランの言葉に司令部オペレーターたちから小さな歓声があがる。司令官席に座るラファエルは曇った表情で金髪をかいてメイリンに声をかける。

「シン・アス力は？」

「あ、はい、さきほどオーブ陸戦部隊が保護。外傷はないようです」  
「……そうか」

ラファエルはシートに背を預け、腹の辺りで指を組む。大きく息を吐き出し、彼はしばらく中空を見つめていた。メイリンはそんなラファエルの姿に何か不安なものを感じた。

「司令？」

「あとでシンのところに行ってくれ。事情を詳しく聞いてザラ司令に報告したまえ」

そう言うとラファエルは席を立って、司令室を後にした。メイリンが見たその表情はいつもの気さくな上官とはまるで別人だった。

『失敗か……』

モニター越しのアザナエルはやけにうれしそうに口元をゆるめた。ギイはいつもの無表情でじつとその顔を見つめる。

「申し訳ありません。自分が敵を見誤りました」

『いや、かまわんよ。この程度の戦力でオーブを滅ぼせるとは思っていなかった。あわよくば……程度の作戦だったからね』

アザナエルが楽しそうに笑う。この作戦でブルーコスモス軍だけでなく、アザナエル軍も相当数の損害を出しているにも関わらずである。

「では、ミッションBへ移行しますがよろしいですか？」

『うん、やってくれ』

アザナエルがうなずくと金髪がふわりとゆれる。

「つきましては作戦指揮のためにインヘルノの作戦司令室の使用許可を願えますか？」

『うん、構わないよ』

アザナエルが鷹揚に応じる。その瞬間、ギイの瞳が一瞬だけ輝く。

『大佐、今度は失敗できないよ。ベネ・ハエロヒムどもをすべて失おうとも成功させてくれ』

「承知しております閣下」

アザナエルが通信回線を切る。ギイは顔をあげ、かるく口元をゆがめた。

それは笑みだった。

### 第33話「決戦の予兆」

「なにごとだ！」

本部に帰還したアスランは滑走路でのただごとではない騒ぎを聞いた。すぐにメイリンがモニターに現れ、慌てた様子で報告する。

『シンが！ ムラサメに乗って！ 姉さんを取り返すって！』  
「なんだと？」

すぐさまアスランはインフィニットジャスティスを滑走路へむけた。見ると通常カラーのムラサメBが少しずつ滑走路を加速していく。

「シン！ 何をやってる！」

『止めないで下さい！ 俺はルナを取り戻すんだ！』

加速するムラサメにインフィニットジャスティスが接触する。コクピットに座るシンはヘルメットもかぶらず、こちらを見上げていた。

「無茶を言つな！ お前1人で何ができる！ 事情を話せ！」

『話せば許可してくれるんですか！』

シンの言葉にアスランの頭に血が上る。アスランはインフィニットジャスティスのCIWSでムラサメBの垂直尾翼を破壊する。

『なっ！』

「いい加減にしろ！ この機体1機でルナを取り戻せないくらいお前でもわかるだろう！」

『で、でも……でも……！』

シンの顔がくしゃくしゃにゆがむ。少しずつ加速をやめていくムラサメBを押し留め、アスランはシンに優しく声をかける。

「まずは俺たちに事情を話せ。対策を考えるのはそれからだ。大丈夫、ルナは必ず取り戻せる」

『アスラン……隊長……』

「アスランの言葉を聞き、我に返ったシンはコクピットの中で力なくうなだれるだけだった。」

「なるほど、敵もよくよくえげつない手を使う」

シンの報告を聞いたラファエルはアスランにそう言った。シンは椅子に座ったままじっと床を見つめている。

「でも、なんでルナマリアさんを洗脳なんかしたのかな？」

「それは俺が話そう」

キラの疑問にサイが答える。白い包帯で右腕をつつたサイは、ラクスタちと共にこの司令部を訪れていた。

「あの少年パイロット部隊。ベネ・ハ「エロヒム」って言うんだが……彼らはエクステンデッド技術で作られたパイロットだ」

サイの説明をシンは顔を上げて聞いている。横からメイリンが飲み物をすすめるが、シンはそれを片手で断った。

「彼らは精神部分にも大幅な手が加えられている。いわゆるマインドコントロールだね。強力な刷り込みによって彼らは、1つの執着するものを持たされる。以前のエクステンデッドは、ブロックワードという単語だったんだが、それでは誤作動が多いため、人間に変更されたんだ。家族とか恋人とかそういうものに」

「あいつは……アルマンの場合は、ステラか」

シンがつぶやく。その言葉に近くにいたキラが少しだけ顔を曇らせた。

「ここからは俺の推理にすぎんのだが……。おそらくルナはマインドコントロールの薄れたアルマンに対する新たな執着なんだろう」

「そんなバカな理由で1人の人間を洗脳したというのか？」

カガリが不快感を露にして言う。サイは黙ってうなずく。

「ヤツらは……アザナエルは人間の命なんてこれっぽっちも考えちゃいない。すべては手駒。そういう考えでこの戦いを進めている」

ラファエルが吐き出すように言う。アスランは少しだけ意外そうな顔でラファエルの横顔を見つめた。その視線にきづき、ラファエルがアスランのほうに微笑む。

「ザラ司令。おそらく君は私こそがアザナエルの首領ではないかと思っただんじゃないかな？」

「あ、いや……」

アスランが口ごもる。シンたちが2人のやりとりを黙って聞き入る。

「残念ながら的外れの意見だよ。私は確かにブルーコスモスの末席にいたがね」

「なんだって!？」

シンが椅子から立ち上がり、ラファエルに詰め寄ろうとする。だが、その間にサイが立ちふさがる。

「やめるシン。この人はそういう人じゃない」

「なんでわかるんですか！ あなたは！」

「俺がこの人の下で働いているからだ」

サイの言葉にキラとカガリが驚いた表情を見せる。シンを席に押し戻し、サイがアスランに言葉をかけた。

「ラファエル司令は亡き父上からブルーコスモスの幹部の地位を譲り受けた。しかし、彼はブルーコスモスの思想に疑問を抱き、密かにマルキオ導師やクライン元議長とコンタクトをとっていたんだ。和平のためにね」

「何？」

アスランが驚いてラクスを向く。ラクスは黙って首を縦に振った。

「結果、70年の戦争後のブルーコスモスで彼は裏切り者と見なされた。しかし、軍をはじめ政財界に太いパイプをもっていた彼は、独自のやり方である戦争の時も活動を続けていた。俺が知り合ったのもこの時だ」

「サイくん、君は少しおしゃべりだね」

ラファエルが肩を軽くすくめてみせる。アスランは再びラファエルの顔を見つめる。

「何で言ってくれなかったんですか？ 俺はあなたを誤解して」

「誤解してくれたほうがよかったです。案の定、アザナエルは元ブルーコスモスの私にコンタクトをとってきた。そして、私はサイクんと共にかなりの情報を手に入れられた」

ラファエルはそう言いながら、シンの前まで歩いていく。

「シン・アスカ。ルナマリアは敵の指揮官ギイ・シュバイツェンの手によって洗脳を受けた。だが、これは急場しのぎのきわめて浅いものだ」

「……？」

「まだ手遅れではないということだ。彼女の精神はまだ完全に侵食されていない。記憶を取り戻すことが可能はずだ」

ラファエルの言葉にシンが立ち上がる。その瞳は今までの無気力な色とは明らかに違っていた。その様子を見てアスランが軽く微笑む。

「ラファエル司令。敵の本拠地と目的は何でしょうか？ 俺はこのままヤツらがおとなしくなるとは思えません」

「……それは」

ラファエルが言葉を継ごうとした時、部屋の扉が開きオペレーターが駆け込んでくる。

「どうした！」

「た、大変です！ プラントから緊急通信！ アザナエル軍にコロニー4基が強奪され、地球へむけて移動中とのことです！」

「な！」

カガリが立ち上がる。サイとラファエルは驚いた様子もなくうなずきあう。アスランはそんな2人の様子に同じ質問を繰り返した。

「敵の目的はこれですか？」

「ああ、敵の狙いはコロニーによるこちらの戦略拠点の完全消滅だ」  
ラファエルの答えに青ざめたカガリが言う。

「目標は？ 目標はどこなんだ？」

カガリの言葉に、ラファエルは苦しげな表情で答えた。  
「オノゴロ島……」

### 第34話「そして宇宙へ」

オノゴロ島を目標としたコロニー落としの報告を受け、アスランたちLOW幹部は緊急出動態勢に入った。

「世界各国の元首たちを島外に避難できないだど？」

ラファエルにアスランが聞き返す。

「ブルーコスモス残党軍は撤退したわけじゃない。周辺海域の無人島に伏兵を配置し、島を出て行く艦艇に攻撃をしかけるつもりだ」

「なんてことだ……」

キラがオノゴロ島周辺の地図を見上げる。周辺に大小の島々が無数に点在するオーブという地形は、確かに伏兵をするには最適である。

「ブルーコスモスの目的はオーブ領海からの国家元首の脱出阻止です。もちろん、全部の国家元首全員に十分な護衛をつければ突破は可能ですが」

「全員が突破できるとは限らない上に、コロニー阻止への戦力が不足する」

ラファエルがうなずく。アスランは親指の爪を噛みながら考え込んだ。

「つまり、僕らには手は1つしか残されてないってわけだね」

アスランは軽く首を振った。もしもオーブに十分な戦力を残して侵攻を防いでも、コロニーが落ちればおしまいである。つまり、取るべき選択肢は1つしかない

「ああ、宇宙に部隊をあげて防衛線を築くしかない。幸いブルーコスモス残党の戦力はオーブに再侵攻できるほどじゃない。オーブ軍で十分防げるだろう」

「オーブ軍で防げないほどの戦力をぶつけてきたら？」

「頭をかいて誤魔化すさ」

アスランが覚悟を決めた表情で顔をあげる。キラとラファエルも

その瞳を見て、頷く。

「メイリン！ ザフト艦隊の動きは？」

「現在、一部の艦隊がコロニーを追跡中。プラントに駐留していたジュール国防委員率いる機動艦隊が出撃準備中です！」

メイリンが素早く報告する。アスランは素早く月面と地球の位置を測った。

「ザフト機動艦隊への救援要請！ LOW月面艦隊と共に衛星軌道上でコロニー落下阻止任務に協力されたし！」

「了解！」

メイリンに指示をしたアスランは、司令部にいる全員に聞こえる声で最終命令を下した。

「これよりLOW指揮下の稼動可能な全戦力を衛星軌道にあげる。目的は落下コロニー4基の阻止！ これ以上ヤツらの好きにさせるな」

『了解！』

キラとラファエルが敬礼をして司令室を出て行く。それとすれ違いにラクスが姿を現す。

「ラク……クライン評議員。何か？」

「ラクスで結構です。アスラン」

式典用の礼服から戦時用の軍服に着替えたラクスが微笑む。戸惑うアスランの横顔をメイリンがじっと見つめていた。

「ザフトへの直通回線をお貸し願えませんか？ イザークさんにある物を届けてもらいたいです」

「ある物？」

アスランが怪訝そうな顔をする。だが、ラクスは何も言わずあの笑みを浮かべるだけだった。

「離脱用ブースターをとりつけた機体から順番に出撃しろ！ 滑走

路がつかまつてるんだ！早く行け！キンバリー！そっちはどうだ？」

ムラサメBのコクピット内でシンは各パイロットに指示を飛ばす。大気圏離脱用のブースターを搭載したムラサメBが次々と離陸していくのを見ながらシンは機体チェックを急ぐ。

（デステイニーが使えれば……）

ナイトメアとの戦いでデステイニーは修理不能のダメージを受けていた。デステイニークラスのMSがそう何機もあるはずもなく、シンは量産型のムラサメBで出撃することになったのである。

『シン！』

「はっ！」

アスランの声が通信機から響く。シンは表情を引き締め、モニターに映る上官の顔を見た。

『ザフト本国軍がコロニー阻止に動いてくれている。イザークたちの艦隊が我がほうの防衛ラインに合流する予定だ』

「そいつはよか……おめでとうございます。ですが、それが俺とどんな関係が？」

ザフトの援軍はありがたいが、それはあくまで戦略レベルの話である。1パイロットに過ぎない自分にはさほど関係はない。シンはアスランの真意を測りかねた。

『その時、イザークたちがあるMSを持ってくる。お前はその機体で戦え』

「え？でも……いきなり新型じゃ……」

『命令だ。いいな……』

通信はそこで途切れた。シンは訳がわからなかったが、すぐに気持ち切り替えてムラサメBの操縦桿を握った。

「シン・アスカ！ムラサメB！出る！」

全身を後方に引き戻すGを浴びながら、シンは暗い夜空の先へと飛翔した。

プラント領域から移動を開始したコロニーは、ゆっくりと確実に地球へと向っていた。

その周囲には女王アリを守る兵隊アリのようにアザナエル軍のMSや艦艇が遊弋し、背後から追いつがろうとするザフトの部隊へ猛撃をくわえている。

その映像をインヘルノで眺めながら、ギイは刻々と入ってくる報告に耳を傾けていた。

「大佐！」

背後でアルマンの声がした。振り返るとパイロットスーツのままのアルマンがルナマリアをともなつて歩み寄ってくる。

「よくも！ よくも！ ルナ姉ちゃんを！」

「……作戦中だ。後にしろ」

「よくも！」

つかみかかろうとするアルマンの体が途中で止まる。横合いから素早く割り込んだジャックが彼の体を押し留めたのである。

「落ち着けよアルマン！ 相手は大佐だぞ！」

「うるさいジャック！ 僕の邪魔をするな！」

アルマンの叫びを無視してジャックが彼を押し戻す。そして、ジャックはアルマンの耳元に顔を寄せて、小声で囁いた。

「今、作戦を失敗したお前が何を言ってもムダだ」

「なっ！」

「最後まで聞け！ この戦いでフリーダムやジャスティスを撃墜すりゃあ、大佐もお前の言うこと聞いてくれるだろ？ ルナのこととはそんときに頼めばいいじゃねえか」

ジャックの言葉にアルマンの体の力が緩んだ。ジャックはアルマンから手を離すと、軽く頭をかいてやる。そして、ギイのほうに向き直って不敵な笑みを浮かべた。

「大佐、俺たちの出番はいつなんだよ。地球での戦闘からすぐに宇

宙だ。……正直俺たちだつて疲れるんだぜ？」

「すぐに作戦は開始される……」

ギイがスクリーンを指し示す。周回軌道を回って落下するコロニーの予測ルートが浮かび、それはインヘルノの現在位置のすぐ近くを通るのがわかった。

「この状況下では、敵はコロニー護衛部隊だけに注意を向けている。そこに貴様らが柔らかな横腹をえぐる」

「奇襲か……悪くないね」

ジャックがニヤリと笑う。アルマンはまだ憎悪の瞳でギイをにらみつけている。ギイは表情1つ変えず、アルマンに声をかける。

「アルマン……この作戦が終わればルナマリアは元に戻してやる。だが、そのためには……」

「わかつてるよ！ アイツらを皆殺しすればいいんだろ！」

「そうだ……お前には新しいMSをくれてやる。これでLOWとザフトを叩け」

ギイの顔は氷のように固く動かない。アルマンたちは彼の視線を背中に受けながら、司令室を後にした。

### 第35話「見えない城」

衛星軌道上に上がったシンたちはすぐさまコロニーの予測進路上に戦力を展開。コロニーを守るアザナエル軍との先端を開いた。

「くっつ！」

ムラサメBの翼をビームがかする。前方から迫るナイトメアSをギリギリでよけながら、シンは機体を変形させビームライフルでその背中を狙った。

「！」

発射されたビームはナイトメアSのアルミューレ・リュミエールによって弾かれる。シンは舌打ちをして、機体をコロニーへと向ける。

「あいつも人形か！」

今、シンが相對しているのはアルマンが操ったナイトメアの無人タイプ“スレイブ”と同じものである。ただ、ここに配備されたスレイブはすべてAI制御に切り替えてあり、アルマンのコントロールを必要としない。

「こなくそお！」

機体の非力さを嘆きながらシンはナイトメアたちのビームをかわし続ける。見れば各所で展開されている戦闘で、LOWはアザナエル軍に圧倒されていた。トップエースのシンでさえ、ムラサメBではナイトメアに手も脚も出ない。ましてや一般のパイロットでは撃墜されるために出撃しているようなものである。

『隊長！ こっちは4機がやられました！ こいつはやばいですよ！』

「バラバラにしかけるな！ 火力を集中させて一気に破壊するんだ！」

部下のキンバリーの悲鳴にシンが怒号で返す。だが、シンさえも手こずるこの無人MSに必勝の策など皆無だった。

「数が少ないのが救いだが……」

4基のコロニーを守るために配備されたナイトメアの数は決して多くはない。ほかはベールオウルフとウィングダムであり、こちらはムラサメBでも十分に戦える。現にシンがナイトメアたちをひきつけているおかげで、LOWはなんとか攻撃を支えられている。

「デステイニーなら！　こんな人形！」

『泣き言は後にしる坊主！』

金色の閃光がシンの横を通る。LOW月面艦隊司令官ネオ・ロアノークことムウ・ラ・フラガ大佐の乗るアカツキである。ドラグーンを射出したアカツキは瞬く間にナイトメアを1機撃墜する。

「月面艦隊が来たか！」

『ザフト艦隊も後方で防衛ライン構築中だ。シン、お前はザフト艦隊の旗艦に行け！』

ナイトメアの攻撃を弾きながらムウが叫ぶ。シンは出撃前にアスランが言った言葉を思い出した。

「了解！　キンバリー、しばらく頼むぞ！」

『了解！　ですが、小官には少々荷が重い相手です。お早いお帰りを！』

部下の声を背中にシンはザフト艦隊の方向を目指す。眼前に青い地球が広がり、漆黒になれたシンの眼を焼く。眼を細めたシンは一瞬奇妙な何かを見たような気がした。

「なんだ？」

もう一度見ようと眼を凝らしたがそこには展開しつつあるザフト艦隊を地球しか見えない。シンは幻を見たと考え、機体を艦隊へ向け直した。

『すばらしい、すばらしいよ大佐。これは特等席だな』

モニター越しにアザナエルが笑みを浮かべる。ギイは何も言わず

に頭を軽くさげた。

「LOWと我々の決戦です。閣下には我々の記念すべき勝利をじっくりご覧いただきます」

「うん、うん、これはすごい！ わぁ、また沈んだよ！」

アザナエルが無邪気な声をあげる。ギイが振り返ると、それはLOWの巡洋艦が炎に変わる瞬間であった。

『圧倒的じゃないか我が軍は』

「もちろんです。そのために我々は今日まで兵を鍛えてまいりました。ナチュラル兵といえどもコーデイネイターどもに劣るものではありません」

『見事だよ大佐。しかし、LOWの連中もまさか我々がこんな近くで戦闘を眺めているとはわかるまいね』

「左様ですな。まさかここまで近いとは思いません」

アザナエルは満足そうにうなずいた。

アザナエル軍の本拠地であるインヘルノは現在地球の衛星軌道上に移動していた。その位置は戦場とは眼と鼻の距離である。なぜ、ここまで接近しているのにシンらが気づかないかといえば、この要塞はミラージコロイドによって完全にカモフラージュされ、外からはまったく見えないのである。

見えない要塞ともいうべきインヘルノで、アザナエルは戦況を歌劇でも楽しむかのように見ていた。初めて戦場に接した彼は、その興奮に身を熱くさせている様子である。

『さて、これでオーブは滅び、ザフトは戦力を消耗し尽くすというわけだね』

「いえ、油断はできません。敵にはまだフリーダムとジャスティスがあります。それにザフトと月面艦隊が合流したようですから、さらなる反撃が予想されます」

『なるほど。だったら簡単だ。予備戦力をすべて投入したまえ』

こともなげにアザナエルが言う。ギイは無言で頭を下げ、「承諾の態度を示したまま通信回線を切った。」

「オペレーター！ 閣下の許可が下りた！ ベネ・ハ「エロヒム」の全戦力を出撃！ ベーオウルフ隊は1番から17番まで出撃させる！ ウィンダムも20番まで出撃！」

ギイの指示にオペレーターが驚いて立ち上がった。

「しかし、大佐！ ベーオウルフの1番から4番まではアザナエル様直属の親衛隊です。我々の権限では……」

「少尉聞こえなかったのか？ 閣下はすべて投入しろと言ったぞ？」

氷のようなギイの視線を受け、オペレーターが引き下がる。ギイは細かな指示を終えると、指揮官席に座り、コンソールにそっと操作する。

そして、ギイはアザナエルと司令室との通信回線をすべて切断することに成功した。

### 第36話「デルタデステイニー」

「これは……」

ザフト艦隊旗艦エターナルの格納庫に入ったシンは息を飲んだ。

二本のアンテナと人の顔を模した頭部。両眼のようなカメラアイ。そこにあつたMSは紛れもなく、彼の愛機デステイニーの同系列機であつた。

「ザフトの技術開発局が評価試験機として使用していた4番機です」  
かつての部下カウフマンがシンの横で説明する。だがシンはそれさえも耳に入らない様子で、デステイニーを見上げている。

「ストライクフリーダムと同じエンジンに換装しているんで、パルマフィオキーナがほぼ無制限に使用可能です。それと背部スラスターのフィン部分がドラグーンに変更されています。一般兵でも扱える改良型なんで隊長でも大丈夫です」

シンはリフトに乗ってデステイニーのコクピットに近づいた。シートに座り込んだ彼は、見慣れたレイアウトのコクピットの中でレバーの動きを確かめる。

「どうですか？ 伝達系統も新技術が試験的に採用されているのでかなり向上しているはずですよ。そして一番の特徴は……」

カウフマンがデステイニーのコンソールをいじる。機体の全身図が映し出され、武器のリストが現れる。

「長距離ビーム砲とアロンドایتが2つずつか……」

「ええ、左右についています。エンジン出力が向上したんで取り付けたそうです」

シンは映し出される機体スペックに眼を見張る。だが、一抹の不安を抱いたシンはカウフマンに質問を試みた。

「こいつは評価試験機だろ？ 機体の耐久性とか整備性はどんなんだ？」

シンの質問にカウフマンの表情が少しだけ曇る。

「ベース機はデステイニーですから多少の無理はききます。しかし、あくまでも評価試験機。予備パーツなんてありませんからね。壊れればそれまでです」

「……この戦いが終わればもう使えないってわけか」

「全力戦闘をやって機体もつのは1〜2回つてとこだつて話です。まさにこの戦闘のためだけに用意されたMSというわけである。」

だが、これほど危険な機体でも今のシンにはありがたい。アルマンたちに対抗するには、やはりデステイニークラスの機体は必要不可欠である。

「すまんなカウフマン。イザーク……ジュール司令よろしく伝えてくれ」

「ジュール司令とクライン評議員ですね。あの方が技術局に手を回して、こいつを持ってきたんです。相当ムリしたみたいですがね」  
「……そうか」

カウフマンの言葉を聞いたシンの胸に熱いものがこみあげた。これほど未熟な自分をまだ見捨てないでいてくれる。アスランを含め、周囲の人々の好意が傷ついたシンの心には何よりうれしかった。

「あ、それと……」

カウフマンが背筋をピンと伸ばし、敬礼を取る。胸に腕をあてるザフト式ではなく、LOW式の敬礼であった。

「これより自分はLOWへ原隊復帰をいたします。つきましては隊長のムラサメBをお借りしたいのですが、よろしいでしょうか！」

「カウフマン……」

シンの心が限界を越える。あわてて涙を袖でぬぐったシンは、カウフマンに笑みを浮かべる。

「ザラ司令には俺から話しておく。キンバリーが待っている。いくぞカウフマン！」

「了解であります。上官殿！」

うれしげに笑みを浮かべ、カウフマンがコクピットを離れようとする。その時、シンはあることに気づいて、彼を呼び止めた。

「おい、こいつの名前はなんていうんだ？」

「あ、忘れてました。デステイニーの4番機なんで開発コードはデルタらしいです。デルタデステイニーってところですかね」

そう言っただけでカウフマンはシンの乗ってきたムラサメBのほうへ移動していく。シンはコクピットでコンソールをなで、ゆっくりを息をついた。

「頼むぞ。デルタデステイニー。今度こそルナを取り戻すんだ」

迷いを振り切ったシンは、最後の戦いに向かうため、新たな愛機のエンジンをスタートさせた。

アザナエルの指示で出撃したインヘルノ駐留部隊によって、戦況はアザナエル軍有利に進んでいた。

ナイトメアに手も足もでないムラサメBでは、ウラヌスやスレイヤーにはまったく歯が立たない。ジャックはその圧倒的な戦力で、LOWが築いた防衛線を寸断していった。

『これ以上は！』

ムウの乗るアカツキがドラグーンを飛ばす。しかし、ウラヌスの持つ大口徑ビーム砲が不規則に飛ぶドラグーンを次々と撃墜してしまふ。

「あん？ 見掛け倒しかあ？ 金ピカの頭をトロフィーにしてやるぜ！」

ジャックが凶暴な表情で吼える。ムウもすぐさまビームライフルで牽制するが、ウラヌスの機動力はアカツキのそれを上回った。

『ちい！』

なんとか振り切ろうとしたムウだが、ジャックの反応のほうが早い。アカツキはウラヌスの放ったビームによって胸部装甲の一部をえぐりとられ、コロニー壁面に叩きつけられた。

「ふん、装甲だけは一人前か……だが、これでとどめだ！」

ウラヌスが第二射を行おうとした瞬間、新たな敵影がジャックの視界に入る。すぐさまビームの砲口をそちらに向けるが、敵影の動きはジャックの予想を超えていた。

「早い！」

『うおおおおおお！』

影の正体はデルタステイニーであった。バーニアを吹かしながら旋回したデルタステイニーは、2門のビーム砲を構え、ウラヌスを狙う。

「なめるなああ！」

ジャックはウラヌスの大口径ビーム砲を構え、デルタステイニーめがけ発射する。閃光の槍が一直線にデルタステイニーにむかう。

『おおおおおお！』

咆哮と共にシンがデルタステイニーのビーム砲を発射した。ビームの奔流はウラヌスの放ったビームとぶつかり、それを飲み込んでウラヌスに殺到する。

「くっ！」

身の危険を感じ、ジャックは機体を回避させる。ビームの奔流はコロニーを貫き、壁面に巨大な穴をあけて、反対側に抜けた。そのあまりの威力にジャックは思わず冷や汗を流す。

「化け物かよ！ こいつは！」

『あぶねえぞ坊主！』

間一髪ビームを回避したムウからも怒声が飛ぶ。どうやら敵が機体を制御しきれてないと判断したジャックは、ライフルを背部に納め、レーヴァティンを抜く。

「やってやるぜ！ 新型！」

『そうは行かない！』

ジャックの耳に聞き覚えのある声が響く。その声を聞いた瞬間、ジャックは全身があわ立つほど歓喜した。

「そうだ！ そうだったな！ お前との決着がまだついてねえよな

！」

『なんでこんなことばかりを……キミは！』

接近してくるストライクフリーダム姿を見て、ジャックの顔に狂気の笑みが浮かぶ。

「新型！ 残念だが、お前の相手はアルマンに譲ってやる！ 俺はコイツを殺すのに忙しいんでなあ！」

『アルマンだと？』

デルタステイニーの動きが一瞬止まる。それとほぼ同時に、黒いMSがこちらに急接近してくるのを全員が気づいた。

「新型は新型同士ってヤツだ。アルマン！ お前の遊び相手がいたぜ！ 存分に楽しみな！」

『言われなくてもそうするよジャック！ シン・アスカアアアア！』  
『アルマン！』

毒々しい黒の塗装を施されたジェノサイドがデルタステイニーに襲い掛かる。シンは全身に例えようのない高揚感を覚えながら、機体をジェノサイドに向けた。

### 第37話「混迷する戦場」

「くう！」

インフィニットジャスティスの装甲をビームがかすめる。アスランはスティックを激しく動かして、降り注ぐビームの雨から機体を抜け出させた。

『ちい！ しぶとい！』

苛立たしげなヴァイオラの叫びとともにスレイヤーがインフィニットジャスティスを追う。アスランは迫りくるスレイヤーめがけてビームライフルを放つが、ヴァイオラはビームサイズを操ってそれをはじき飛ばす。

『この程度で私がやられるものか！』

「ええい！」

近接したインフィニットジャスティスの膝からビームサーベルが出現する。下方からの奇襲を受けたヴァイオラは瞬間的にそれを回避するが、アスランはその隙を逃さず、ビームライフルでスレイヤーを狙う。しかし、スレイヤーの反応が早く、ビームはバインダーを撃ちぬくのみだった。

『やられた？』

「かわされた？」

驚きの声を同時にあげながらアスランとヴァイオラは機体を後退させる。距離をとりつつ睨み合う2機の間を無数の残骸が流れていく。

（ここでコイツに関わっているヒマなんて……）

こうして戦っている間にもコロニーは危険な位置にまで移動している。LOWとザフトの艦隊がコロニーへ攻撃を続けているが、アザナエル軍の妨害のために決定的なダメージを与えていない。アスランは地球の引力に引かれていくコロニーを横目で見ながら冷や汗を流す。

だが、ヴァイオラもアスラン同様に焦っていた。最愛の弟であるジャックが強敵と戦っているのは通信回線から入ってくる情報でわかっている。おそらく敵はキラ・ヤマトが相手である。キラが相手ならジャックでも苦戦するに違いない。だから、ヴァイオラは一刻も早く彼の元へ行きたかった。

「邪魔を！」

「するなあああ！」

スレイヤーのビームサイズがインフィニットジャスティスのビームサーベルと交錯する。一瞬で場所を入れ替えた両機は、最加速して激突した。

シンの乗るデルタステイニーはアルマンの乗るジェノサイドと攻防を繰り返していた。

デルタステイニーが放ったビーム砲を交わし、ジェノサイドは両手に搭載している拡散ビーム砲を発射する。すぐさまシンはビームの射線から機体を脱出させるが、その背後にいたムラサメとザクウォーリアが火球にかわった。

「く！ こいつは俺がやる！ 各機はコロニーと敵艦隊を狙え！」

シンの言葉に各MSが散開する。1対1となったシンとアルマンは機体を加速させた。

ジェノサイドはナイトメアの改良型としてアルマン専用に調整された機体である。拡散ビーム砲と改良型ガンバレルを搭載し、空間戦闘用に脚部を取り外して追加された大型スラスタが驚くべき機動性を発揮する。その大型スラスタが光の咆哮をあげ、殺人的な加速でデルタステイニーに襲い掛かった。

「速い！」

すれ違いざまに放たれた拡散ビームをシールドで防御したシンは、すぐさま長距離ビームでその背後を狙う。しかし、ジェノサイドの

常識外れともいえる運動性能はその攻撃を易々と回避した。

『アハハハハ！ 遅いぞシン・アスカ！』

アルマンの嘲弄を聞きながらシンが唇をかむ。実のところデルタデステイニーとジェノサイドの性能差はほとんどない。ただ、シンがデルタデステイニーの出力に戸惑い、機体のポテンシャルを引き出しきれていないのである。

戸惑うシンをあざ笑うかのようにジェノサイドは両手首からビームサーベルを抜いて切りかかってきた。すぐに武装を長距離ビーム砲からアロндаイトに切り替え、シンはその攻撃を受け止める。

『弱すぎるよお前！ そんなことだから女1人守れないんだよ！』  
「！」

アルマンの言葉にシンの脳裏にステラの顔が浮かぶ。そしてそのイメージはゆらぎ、ルナマリアの後ろ姿が浮かんでいった。

「やって……やってやる！」

覚悟を決めたシンがデルタデステイニーのエンジンをレッドゾーンまで回転させる。機体各部に光の粒子があふれ、デルタデステイニーはジェノサイドを徐々に押し戻す。

『こ、こいつ！』

「オオオオオオオ！」

2本のアロндаイトでビームサーベルを弾き返し、シンはジェノサイドに反撃を開始した。危険を感じて後退するジェノサイドにデルタデステイニーの連続攻撃が襲い掛かる。

『ええい！』

ジェノサイドの両腕が本体から分離する。ガンバレルとして使用可能なジェノサイドの両腕は、デルタデステイニーを囲むように展開し、拡散ビーム砲を放った。しかし、デルタデステイニーはそれをビームシールドで防ぎ、なおもジェノサイドとの距離を詰める。

「これだけ距離を詰めれば、ガンバレルは使えない！」

『はん！ ジェノサイドの武器はこれだけじゃない！』

アルマンはそう叫びながらジェノサイドのスカート部分を可動さ

せる。スカート裏からマニピュレーターが現れ、接近するデルタデステイニーめがけてビームサーベルを突き出す。

「隠し腕？」

「ちい！ よくもかわす！」

技量も性能も覚悟もまったくの互角であった。まさに一進一退の攻防を繰り返しながら、2機は虚空の戦場を駆け抜けていった。

「ハルゼー応答ありません！」

「スプルーアンスより入電！ 『主機関停止により戦線を離脱するです！』」

LOW艦隊旗艦クサナギのブリッジでは、オペレーターたちの報告が交錯していた。

艦隊の指揮を執るのはラファエルである。アスランやキラがMS部隊の指揮を直接執っている以上、艦隊運用は自然と彼の任務となっている。ラファエルは刻々と崩壊していく自軍の艦列を見て、爪を噛んだ。

「アークエンジェルはどうか！」

「ポイントB-22で敵MS部隊と交戦中！ 前進できません！」

「ザフト軍の動きは？」

「第3コロニーに一部部隊がとりつきました！ 爆破作業中です！」

「よし、第14戦隊と第22戦隊は第2コロニーへまわせ。第4戦隊が危ない」

数で勝るLOW・ザフト連合軍であったが、アザナエル軍の練度の高さや量産型ナイトメアの性能の前に苦戦を強いられていた。ムラサメやザクウォーリアではナイトメアに歯が立たない。かろうじて互角に渡り合えるキラやシンたちはアルマンたちベネ・ハ工口ヒムと戦っており、身動きが取れない状態である。

「ここまで戦力を整えていたとはな……」

強敵と予想はしていたがアザナエル軍の強さはその予想を上回っている。数の差で何とかこちらが押しているものの未だ油断はできない。

「第9戦隊が第1コロニーにとりつきました！」

「よし！　すぐに周辺部隊を援軍に回せ！」

第9戦隊の指揮を執っているのは確かムウ・ラ・フラガである。

アークエンジェルと共に数々の戦場を駆け抜けた猛者だけのことはあるとラファエルは尊敬の念を抱いた。

「アスラン司令の第1戦隊は？」

「第4コロニー空域で敵MSと交戦中！　キラ司令の第2戦隊も同様です！」

第1コロニーから第3コロニーまでは何とか破壊できそうである。問題はナイトメアが最も多く配備され、ベネ・ハル・エロヒムが3機も展開している第4コロニーであった。コロニーが1基でも落ちればオーブは消滅する。ラファエルは祈るような気持ちでアスランたちを示す蒼い光点を見つめた。

「司令！」

メイリンの叫びがラファエルの感覚を呼び戻す。オペレーター席を見下ろすと、メイリンが青ざめた表情でこちらを見上げている。

「どうした！」

「ポイントE-14より敵の増援です！　およそMS70！」

「なっ！」

ラファエルの背筋を冷たい汗が流れる。それだけの予備兵力が投入されれば第1から第3コロニーでの優位も一気に崩壊する。スクリーンに映し出された赤い無数の光点がラファエルには死神の群れに見えていた。

インヘルノから出撃したアザナエル軍のベーオウルフ部隊は一直

線に戦場へと向かっていた。

編隊の中心にいるのは赤いベールオウルフ。通常のベールオウルフと違い、大型ビームランチャーを搭載した砲撃戦使用のベールオウルフガンナーである。

「第3から第7中隊は予定通り第2、第3コロニーにとりついている部隊を排除しろ！ 敵部隊が排除でき次第、合流して第1コロニーを攻撃せよ」

『了解！』

ガンナーのコクピットに座るルナマリアが各中隊長に指示を飛ばす。その指示に従って数十機のベールオウルフが編隊から離脱し、それぞれの攻撃目標へと向かっていった。

(アルマン……)

ルナマリアがギィに与えられた任務はアルマンを守ることである。現在強敵と戦っているアルマンを助けるべくルナマリアは自然とガンナーのスラスター出力をあげていた。

(！)

前方に見えるコロニーが大きくなっていく。その周囲では両軍のMSや艦艇が激しく砲火を交えているのが見える。ルナマリアはその中にアルマンの姿を探した。

「いた！」

ジェノサイドの黒い機影がコロニー外壁を飛翔している。それに追いつくようにトリコロールのMSが背後に続く。その機体を見た時、ルナマリアの頭に激しい痛みが走った。

「くっ！」

急激な記憶操作によって作られた彼女の擬似人格は、わずかな刺激さえも影響を受けてしまう。オノゴロ島で一瞬だけ見たシンの姿は、ゆらぐルナマリアの擬似人格を少しずつ破壊していつていたのだった。

「なんだ……この不愉快さは……」

脳が締め付けられる感覚に眉をひそめながら、ルナマリアは背後

に続く部隊に指示を出す。人狼の名を冠する20機のMSは、コロ  
ニーに展開するLOWの部隊へ、その牙をむいて殺到していった。

### 第38話「死闘果てしなく」

4基のコロニーを巡るLOWとアザナエル軍の攻防はさらに激しさを増した。

すでに第1コロニーと第2コロニーはLOWの手によって軌道を変更しつつあるが、そのためアザナエル軍は戦力を集中することができ、より強固な防衛ラインを形成していた。

「ええい！」

イザークの乗るグフイグナイトッドがベーオウルフを両断する。苛立たしげに舌打ちをしながら、彼はすぐに次の獲物を追う。

飛翔するグフイグナイトッドの前に黒い影が立ちふさがる。すぐさま4連装ビームガンを速射するイザークだったが、黒い影は黄色色の障壁を出現させ、それをはじく。

「ナイトメアか！」

牽制のためにビームを打ち続けながら、イザークは機体を後退させる。無人機であるはずのナイトメアSは、大型ビームカノンを構えてそれを追撃した。

性能面で言えば、デステイニークラスと互角に戦えるナイトメアと、すでに旧式化したグフイグナイトッドの間には圧倒的な差がある。しかし、AIで動くナイトメアを相手にイザークは尻尾を巻いて逃げるつもりはなかった。

「見せてやる！ MSの性能が戦力の決定的な違いじゃないことをなあー！」

『おいおい……ムチャするなって』

「！」

横合いから聞きなれた声がある。イザークが振り向くと、見慣れた機体がこちらに接近してくるのが見えた。

「ディアッカ！ その機体は!?」

イザークが驚愕の声をあげる。ディアッカが乗り込んでいるMS

はグリーンとブラウンを基調にした2本アンテナの機体であった。  
「バスターだ！」

『ザフトの技術試験局が開発した実験機だぜ！ そ〜ら！』  
ディアツカの声と共にバスターの構えたビームキャノンが咆哮をあげる。以前のバスターとは比べ物にならない威力のビームが、ナイトメアSのアルミユール・リュミエールにぶつかる。ナイトメアSはビームの衝撃でバランスを崩し、第3コロニーの壁面に激突する。

『もう一発だ！』

陽気な声と共にバスターのレールガンが火を吹く。亜光速の散弾が機体を貫通し、ナイトメアSはバラバラに四散した。

「……………」

『ケガはないかいザーク？』

ディアツカが友人を気遣うような声をかける。しかし、返ってきたのは耳を引き裂かんばかりの怒号であった。

「何をやっていたと思えば、何だその機体は！？ 貴様というやつは……………」

イザークの叫びにディアツカは首をすくめる。モニターの向こうのイザークは今にも爆発しそうなほど顔を赤くしていた。

『あんまりいきり立つなよ。コイツはクライン議員から特別に提供された機体だぜ』

「クライン議員が？」

『ああ、あのシンってヤツに渡すMSのついでだとき。お前のデュエルもあるぜ。エンジンと武装を強化したヤツだ』

「……………シン」

イザークの脳裏にあのLOWのパイロットの顔が思い浮かぶ。いつも思いつめたような余裕のない顔をしたあの少年に、イザークはふと昔の自分を思い出した。

「シンは戦っているんだな？」

『ああ、第4コロニーで戦闘中らしい。キラもアスランもがんばっ

てるってさ』

「……そうか。アスランのヤツも戦っているか」

「イザークは機体を艦隊のほうに向けながら、第4コロニーのほうを見つめた。」

「アスラン、シン……死ぬなよ」

第4コロニー内部を黒い影と蒼い影が貫く。

農業プラントとして作られたコロニー内部は一面の畑が広がっている。細菌テロによって無人となったその緑野を眼下に、シンのデルタステイニーはアルマンの乗るジェノサイドを追った。

「もらった!」

ビーム砲の照準がジェノサイドを捕える。一瞬の間も置かずトリガーを引くが、ジェノサイドはビームシールドを使ってこれを偏向させる。

「くう!」

攻撃がかわされたことを悔やむ間もなくシンは機体を左右に振る。ジェノサイドの両腕から放たれる反撃のビームをかわしながら、デルタステイニーはなおも距離を詰める。

『よくよく腹立たしい男だねシン・アスカ!』

怒気混じりのアルマンの言葉に返事もせず、シンはビーム砲を発射する。だが、この攻撃もジェノサイドには届かず、デルタステイニーは猛烈なビーム攻撃にさらされた。

「!」

シンはスティックを操作して機体をコロニー地表まで降下させる。それを追ってジェノサイドも降下し、降り注ぐビームの雨によって田園にビームの火柱があがった。

『チヨコマカとよくもかわす!』

ジェノサイドの背部からドラグリーンが射出される。ドラグリーンは

ダンスのように軽やかな軌道でデルタステイニーを包囲し、ビームを一斉に放った。だが、シンはこの攻撃に慌てることなく、最小限の機動とビームシールドによってこの猛攻をしのぐ。

『うざったいんだよ!』

「それはこつちも同じだ! ルナをさつさと返せよ!」

『うざったい!』

激昂したアルマンはジェノサイドの両腕からビームサーベルを出現させて斬りかかった。シンも2本のアロンドイトを引き抜き、これを弾き飛ばす。だが、アルマンはすぐさま第二撃、第三撃を繰り出し、シンに反撃の機会を与えなかった。

『そらそらそらそら!』

アロンドイトとビームサーベルの刃が深くかみ合う。デルタステイニーはジェノサイドの推力に負け、地表に叩きつけられた。シンは眼前に迫るジェノサイドの頭部にアルマンの嘲笑を見て、エンジンの出力をあげる。

「うおおおお!」

シンの叫びに呼応するようにデルタステイニーの機体各所から黄金の光がもれる。光は徐々にその強さを増し、ジェノサイドの機体を押し戻していく。

『バカな! ジェノサイドだぞ!』

驚愕の叫びを上げながらもアルマンはドラグーンでデルタステイニーを攻撃しようとする。だが、シンはバーニアを方向転換させ、ジェノサイドの横を抜けた。

いきなりデルタステイニーが横に動いたことでアルマンは敵を見失った。あわてて機体を転換させようするが、シンの動きのほうが早い。

「もらった!」

『何を!』

2本のアロンドイトを振りかぶって切りかかるデルタステイニーを前に、アルマンは死を覚悟した。思考が真っ白になり、ステイ

ツクを持つ手がこわばる。

『アルマン！』

『！』

アルマンの通信回線に女の声が飛び込む。その声とほぼ同時に一条のビームがデルタステイニーめがけて発射させた。シンはその攻撃を慌ててかわし、アルマンは虎口を脱した。

『！』

接近してくるMSは1機。だが、その気配にシンは唇をかむ。混線する通信回線から聞こえてきたのは紛れもなく彼の知っている声だったからだ。

「ルナ！」

『ルナ姉ちゃん！』

2人の戦士が叫ぶ向こうにはビームカノンを構えたベールオウルフが飛行していた。そのコクピットでは頭痛に顔をゆがめたルナマリアが、一心にアルマンへ呼びかける。

『アルマン！ 無事ですか！』

『あ、ああ、大丈夫だよ……』

再洗脳によってアルマンへの絶対的な忠誠を刷り込まれている彼女の声に、アルマンは戸惑った声で答える。ジェノサイドと自分の間に機体を割り込ませるルナマリアを、シンは苦悩の表情で見つめる。

「どげよルナ！ お前はだまされているんだ！ 俺たちのところへ……」

……

シンの悲痛な声にルナマリアは眉間にしわを寄せる。先ほどよりもさらに強くなっていく痛みを顔にしかめながら、彼女は痛みを振り払うかのようにアルマンに声をかけた。

『ステイニーは我らの敵！ アルマン！ 2機でかかれれば……』

『だめだ！』

アルマンが絶叫する。その剣幕にルナマリアは一瞬言葉を失う。

『あ、アル……マン』

『こいつは……ボクの……獲物だ！ ルナ姉ちゃんは手を出すな』  
『し、しかし……』

戸惑うルナマリアの顔を見て、アルマンの胸はギィへの憎悪によつて埋め尽くされる。

『デステイニー！ シン・アスカ！』

「な、なんだよ！」

いきなり声をかけられ、シンが驚いた声をあげる。アルマンはそのまま矢継ぎ早に言葉をつなげる。

『戦いは預ける！ これからボクはルナ姉ちゃんをこんなふうにしたヤツを……殺す！』

「なっ！」

『アルマン！ 何を！』

『うるさい！ 操り人形が喋るな！』

アルマンの豹変にシンもルナマリアも絶句してしまふ。アルマンは怒りに全身を震わせながら、ジェノサイドのスティックを握りなおす。

『決着はそれからだシン・アスカ！ お前にルナ姉ちゃんは渡さない！』

そっくり残してアルマンはジェノサイドを離脱させる。その背後をルナマリアが慌てるかのように追う。シンはその場に立ったまま、呆然と2機の姿を眺めることしかできなかった。

### 第39話「砕かれた鏡」

インヘルノ内部では、ギイが武装兵たちを率いてアザナエルのいる機密中枢へ向かっていた。

廊下を早足で駆けながらギイはホルスターから拳銃を抜き、スライドを動かす。武装兵たちも銃を構え、周囲の通路からの攻撃を警戒する。

「大佐！ 第2情報センター制圧しました！」

「第1エレベーターシャフト確保！」

「脱出用ゲートにも兵の配置完了しました」

要塞内に残っている武装兵はギイが手塩にかけて育てた子飼いはかりである。アザナエルの息のかかった兵をすべてコロニー防衛に回され、要塞内に残るアザナエル派はわずかしかない。

小さな爆発音と共にドアがはじけ飛ぶ。廊下の向こうからアザナエル派が銃撃してくるが、数に優るギイたちは一気にそれらを制圧する。

「た、大佐……なぜ……」

反撃を無力化し、廊下の奥へ向かおうとしたギイに重傷を負ったアザナエル派の兵士が質問する。腹部を赤く染めながら咳き込む兵士に、ギイはかすかに眉をひそめる。

「ヤキン・ドゥーエを覚えているか？」

「……いえ」

「オレはそこにいた」

隻眼の奥に暗い炎がゆらぐ。力尽きて首をうなだれた兵士に一瞥をなげかけるとギイは兵士たちを率いてまた歩き始めた。

『戻れアルマン・シトリー！ 作戦中への戦線離脱は』

「うるさい！ ギイを呼び出せよ！」

アルマンは司令部からの通信に怒号で答えた。その瞬間、唾がバイザーに吐きかかる。アルマンはそれを拭おうとするが、バイザーの反対側だということに気づき、苛立たしげにヘルメットを脱ぎ捨てる。

『これ以上接近するな！ インヘルノの座標が……』

「もういいよ！ ボクが直接会うから！」

アルマンをさえぎろうとベーオウルフとラピッドダガーが接近してくる。その機影を見たアルマンは反射的に両腕の連装ビームでMSを吹き飛ばす。

「邪魔をするなあああ！」

『アルマン！ 落ち着いてください！』

背後から迫るルナマリアのベーオウルフを見もせず、アルマンはジェノサイドのバーニアをさらに噴かす。インヘルノのMSゲートに取り付いたアルマンは、司令部に通信する。

「さっさと開けるよ！ 殺されたいのか！」

『や、やめる！ 戦線に戻れ！』

「だったら！」

ジェノサイドの全砲門がインヘルノを攻撃する。圧倒的な火力を誇るジェノサイドの全力射撃をくらってはさすがのインヘルノもひとたまりもない。要塞全体が激しい振動に包まれ、見えないはずの要塞表面が少しずつ姿を現していく。

『アルマン！ 何てことを！』

「うるさいんだよ！ お前も！」

ジェノサイドのビームがベーオウルフの左腕と右脚を吹き飛ばす。ルナマリアは必死に機体を後退させ、致命傷を回避した。

『アルマン！』

「ギイイイ！ 出て来い！」

コクピットの中でアルマンは絶叫した。その眼下には見えない鎧を砕かれたインヘルノがその姿を現しつつあった。

「新たな敵影だと？」

旗艦ブリッジで報告を受けたラファエルはすぐにスクリーンを見上げた。そこには巨大な隕石を改造した軍事要塞がその威容を現している。

「こんなに近くに……」

メイリンが小さく驚きの声をあげる。LOW・ザフト軍とアザナエル軍が死闘を繰り広げるすぐ側で、敵は息を潜めてこちらを伺っていたのである。

「なめるなよアザナエル」

高みの見物を決め込んでいたアザナエルにラファエルは本気で怒りを覚えた。部下が殺し合いをしているにもかかわらず、自分は傷つかない場所でただ眺めているというのは、もっとも唾棄すべき指揮官だとラファエルは考えていた。

「動ける各艦艇とMSを集めろ！ 敵要塞へ攻撃を開始する！」

「了解！」

決着をつけなければならぬ。目の前に敵の最終拠点があるという好機を前にしてラファエルは決断した。すでに軌道を変えたコロニー群から戦力をかき集め、彼はインヘルノへの攻撃を指示する。

「ホークくん。アークエンジェルへの通信回線をつなげ」

「は、はい！」

いきなりの指示にメイリンはあわてて回線をつなぐ。スクリーンにやや疲れたマリュー・ラミアスの顔が現れる。

「なんでしょうかラファエル司令」

「そちらでも確認できましたか？」

ラファエルがそう言うのとマリューはちらつと横を見て、首を縦にふった。

『まさかこんな近くから攻めていたとは思いませんでしたわ』

「ええ、同感です。今まで気づかなかった僕らはよほどの間抜けに見えているでしょうね」

口調こそ軽いもののラファエルの眼は笑ってはいない。マリユールは無理に笑みを作った。

『で、本艦も要塞攻略に向かうわけですか？』  
「いえ」

ここでラファエルは小さく言葉を切る。初めてみる彼の厳しい横顔にメイリンは背筋を硬くする。

「これより、本艦はあの要塞に向かいます。コロニー制圧はそちらにお願いしたい」

『司令自ら指揮を執るのですか？』

驚いた表情でマリユールが聞き返す。ラファエルはゆっくり頷き、何かに気づいたかのように笑顔を見せる。

「何、責任を取るのに飽きただけです。コロニー制圧に失敗して世界中に恨まれる役はラミアス艦長にお任せしたいんですよ」

そう言っただけでラファエルは頭をかく。だが、その言葉がウソであることはメイリンにもマリユールにもわかった。

『了解しました。これよりアーケエンジェルはコロニー制圧艦隊の指揮を受け継ぎます。ラファエル閣下のご武運をお祈りします』

「ありがとうございます艦長」

凜々しく敬礼をするマリユールに、ラファエルも敬礼を返す。その横顔にアスランと同じ厳しさを見つけ、メイリンはしばし見とれていた。

## 第40話「激突空域」

ラクス・クラインは夜空に流れる無数の星を眺めていた。

いつからだろうか、星の輝きに死を感じるようになったのは。それが星ではなく戦闘での爆発かもしれないと考えるようになった彼女は、不安そうな眼で夜空の光を見上げる。

もし、あの閃光がキラだったら。上空で戦う友人たちのことを思い、ラクスは知らず両手を胸の前で握り締める。

「めずらしいな」

背後からカガリの声がする。振り返ると軍服姿のカガリがマグカップをもってこちらに歩いてくる。

「いつも超然としているラクスがそんな顔を見せると、少しホツとするな」

「ホツとする？」

カガリの言葉にラクスは小首をかしげた。カガリはマグカップをラクスに渡すと、笑みを見せる。

「ラクスだって不安になることあるんだって、な」

「まあ……」

カガリがラクスの隣に立つ。2人は落ちてきそうな夜空を見上げ、そのきらめきをじつと追い続けた。

「できれば宇宙に行きたいのでしょうか？ キラやアスランたちと戦いたいのではないですか？」

「ん？ ああ……昔の私ならそうしていたな」

カガリは照れた笑みを浮かべた。ラクスはその言葉にちょっと驚いた顔を見せる。

「へえ、今日は珍しいことが続くな。驚いたラクスなんて久しぶりに見た」

「カガリさん、怒りますよ」

かるく眉をしかめて見せるラクスにカガリはまた微笑む。そして、

彼女はまた空を見上げて言葉を続ける。

「今はわかるんだ。ここにいてアイツらの帰りを待ってるのも戦いだってな。アイツらにはアイツらの、私には私の戦いがある」

「カガリさん……」

今日のカガリの横顔は妙に大人びている。そう気づいた時、ラクスの胸にあつた不安はいつの間にか消え去っていた。

「おおおおおお！」

雄たけびと共にアスランは前方に立ちふさがっているナイトメアSを両断する。彼はそのままインフィニットジャステイスを方向転換し、上方から迫ってきたベーオウルフをCIWSで迎撃した。

視線を横に滑らせると、キラの乗るストライクフリーダムがナイトメアSを撃墜するのが見えた。コロニー外壁にとりついていたナイトメア部隊はキラとアスランの活躍でそのほとんどが破壊されている。

「キラ！ こっちはOKだ！」

『こっちも何とかなりそうだよ。ムウさんの部隊は？』

アスランはスクリーン下部に視線を動かし、コロニーの制御バーニアに取り付いている金色のMSとムラサメBを見た。

「作業は順調みたいだな。これが終わったらあの要塞に行くぞ」

『了解！ シンくんが心配だからね。急ごう』

シンが敵の黒いMSを追ってから、すでに30分は経過している。さっきまでキラや自分に襲い掛かっていたカスタムタイプも姿を消していた。3機がかりで襲い掛かられば、さすがのデルタデステイニーもひとたまりもないだろう。

（死ぬなよシン。お前は死ぬにはまだ早い）

焦りと疲労のためにアスランの額に汗が浮かぶ。適温にたもたれているはずのコクピット内はやけに暑く、彼の体に不快感を与え続

ける。

『こちらフラガだ！ 軌道修正プログラムは入力完了！ OKだ！』  
ムウの声がレシーバーから入ってくる。その声に弾かれるように、ストライクフリーダムとインフィニットジャスティスは、インヘルノの浮かぶ宙域へ機首を向けた。

インヘルノの第1宇宙ゲートでは小さな事件が巻き起こっていた。  
「落ち着けよアルマン！」

金髪を振り乱し、怒り狂うアルマンを整備員とジャックが制止する。小柄なアルマンだが、薬物投与と特殊な訓練によって強化された肉体は大の男でも簡単に制止することができない。整備員たちは補給のために帰還したジャックの手を借りて、やっとアルマンを引き止めることに成功していた。

「はなせえ！ はなせえ！」

「落ち着けよ！ 何が……」

「……何をしている貴様ら」

冷たく錆びた声にアルマンとジャックの背筋が凍る。ゆっくりと首を回すとそこには暗い目をしたギイが立っていた。

「大佐……」

「ギイ！」

悪鬼の形相になったアルマンがギイのほうへとびかかろうと足を踏み出す。それを制止するのに、ジャックは全身の力をふりしぼらなくてはいけなかった。

「よくも！ よくも！ ルナ姉ちゃんを！」

「戦闘はまだ終わってないぞ。こんなところで油を売っているな……」

ギイの表情はまったく変わらない。だが、その軍服の襟に赤茶色の飛沫を見つけ、ジャックは目を細める。

「なんで洗脳なんかした！ どうして……」

「元に戻して欲しいのか？」

「当たり前だ！」

ギイの言葉にアルマンは総毛立って怒りを露にする。ジャックが取り押さえているのにも関わらず、その体はゆっくりとギイへと近づいていく。

「では、戻してやろう」

「……何」

アルマンの体がふっとゆるむ。ジャックはギイの言葉に驚き、その顔を見つめた。

「ルナマリアに施したのは簡単な催眠洗脳だ。ここの医療班ならすぐに解除できる」

「だったらすぐに戻せよ！」

「何故だ？」

不気味なほど無表情のギイが錆びついたような声で聞き返す。アルマンとジャックはその冷たさに背筋を再び寒くする。

「ルナマリアを元に戻したところで、我が軍に何のメリットがある？」

「……それは」

アルマンが悔しげに頭をたれる。ギイはもう話すことは無いといったように踵を返した。

「ヤツらを……コーディネイターどもを皆殺しにすればいいんだな！ 大佐！」

アルマンの顔がはねるように持ち上がり、ジャックの横顔を見上げる。ジャックは苛立ちのこもった眼差しでギイの背中を見つめる。「外にいる敵を俺たちが全部蹴散らしてやる！ 文句はねえな！」

ジャックの言葉にギイはゆっくりと2人のほうを振り向く。その眼には少しだけ感情が浮かんでいた。

「……面白いな。よかるう。LOWの中核をなすMS部隊を撃破したらルナマリアを治療しよう」

「ウソは……ねえな」

アルマンは信じられないといった顔でジャックを見つめる。ジャックはアルマンの体を離すと、転がっていた自分のヘルメットをつかんだ。

「行くぞアルマン！ オラ！ てめえらさっさと補給しやがれ！」

整備兵を叱咤しながらジャックはウラヌスのコクピットへ歩いていく。アルマンは背筋を直し、ギイのほうをもう一度にらみつけると、ジェノサイドのコクピットに戻っていった。

## 第41話「血の旋風」

コロニー奪還にほぼ成功したLOWは、主力部隊をインヘルノに殺到させた。

それに対し、アザナエル軍もコロニー防衛に回っていた戦力を集結させ、強固な防衛陣を展開、両軍はインヘルノ周辺空域ですさまじい戦闘を繰り広げていた。

「ええい！」

怒号とも苛立ちともつかない叫びと共にシンは長距離ビーム砲でアザナエル軍の巡洋艦を撃沈する。閃光がデルタステイニーを照らし出し、その横をムラサメBがすり抜け、敵のベーオウルフ部隊に襲い掛かる。

「キンバリーは左翼の敵を叩け！ カウフマン！ そっちの生き残りには？」

「2機やられました！ それと1機が損傷のために戦線を離脱しています！」

「こちらキンバリー！ あの黒いヤツです！ 援軍頼みます！」

キンバリーとカウフマンはそれぞれ9機のムラサメBを率いていた。LOWでもトップクラスの精鋭である彼らであったが、さすがに激戦続きのために声や顔に疲労が濃い。

「ナイトメアは俺がやる！ キンバリーは要塞表面のビーム砲台を制圧しろ！ 上空援護はカウフマンがやれ！」

「了解です上官殿！」

キンバリー以下5機のムラサメBが、機体を変形させて要塞表面に降下する。カウフマンらはその頭上を旋回し、キンバリー隊を狙うベーオウルフを迎撃する。

「おおお！」

接近するナイトメアSをシンはすれ違いざまに両断する。戦闘の連続で疲労しているはずのシンであったが、戦場での高揚感とルナ

への想いがその疲労を上回っていた。

(どこだ！ ルナ！ アルマン！)

シンの視線は油断無く上下左右を警戒する。だが、その視界には求める相手の姿は無い。焦りだけが募り、シンのノーマルスーツ内  
部はじつとりと汗がにじむ。

「くっ！」

背後からの殺気を感じ、シンはデルタステイニーを急上昇させる。ちらりと視線を投げるとそこにはベーオウルフの姿が見える。軽く舌打ちをしながら、シンは機械的に長距離ビーム砲でその機体を撃墜した。

「どこだ！ アルマン！」

喉の奥からしぼりあげるような叫びをあげながら、シンは地獄のような戦場を切り裂くようにデルタステイニーを飛翔させた。

「おおおおお！」

『はあああつ！』

ヴァイオラの操るスレイヤーがビームサイズを振るう。その攻撃を受け止めながらアスランはインフィニットジャスティスの出力をあげる。

『死ね！ 死ね！ 死ね！ シネ！ シネエエエ！』

コクピット内で絶叫するヴァイオラにアスランは異常な恐怖を感じた。気迫というレベルを超越し、狂気さえ孕むその叫びは歴戦の戦士さえも戦慄させる。

『アスラン！』

「キラ！ 気をつける！ こいつは……危険だ」

機体を後退させながらアスランは救援にきたストライクフリーダムに危険を告げた。親友の言葉に、ストライクフリーダムのコクピットに座るキラも眼前の敵に息を飲む。

『ジャックの敵は全部殺す！ 殺してやる！』

長時間の戦闘ですり減らされたヴァイオラは精神は明らかに均衡を失っていた。彼女の精神状態の安定要素であるジャックの存在が近くにならないことがその状態をさらに悪化させ、今では一個の殺人マシーンとなっている。

『いけ！ ドラグーン！』

スレイヤーの背部からドラグーンが射出される。すぐさま回避行動をとるキラとアスランだが、その背後から新たな殺気が膨れ上がる。

『ヴァイオラ！』

『ジャック！』

狂気に満ちたヴァイオラの声が歓喜に変わる。アスランは機体を激しく振ってドラグーンをかわしながら、背後に迫る白い機体にビームライフルを放った。

「あたれええ！」

『甘いんだよ！ 死ぬのはそっちだぜ！』

あざけりの言葉と共にジャックはバスターライフルで2機を狙う。すばやく動く2機を正確にとらえ、トリガーを引く。

「逃げるキラ！」

『アスラン！』

閃光がストライクフリーダムとインフィニットジャスティスをかすめる。わずかに致命傷をさけたものの、両機の装甲は醜く焼けただれ、インフィニットジャスティスは自機の左腕を失っていた。

攻撃を外したことを気にすることもなく、ジャックはウラヌスをすばやくスレイヤーへ接近させた。2機お互いの背後をカバーしあうようなフォーメーションでストライクフリーダムとインフィニットジャスティスを警戒する。

『ジャック！ どこにいつていたの、私は……』

『すまなかつたなヴァイオラ。こっからは一緒だ。ヤツらをやるぞ』

「了解！」

2機は解放された猟犬のように分かれると、ストライクフリーダムとインフィニットジャスティスの周囲を旋回し始めた。機体の損傷確認に気をとられたキラとアスランはその動きを封じられることになり、旋回の中で背中合わせに反撃の機会をうかがう。

「キラ！ 動けるな！」

「うん、僕は大丈夫。でも、この状態じゃ……」

旋回速度はさらにあがっていく。アスランが緊張のために息を飲んだ瞬間。スレイヤーのビームがインフィニットジャスティスを襲う。

「アスラン」

「気を抜くな！ 次々くるぞ！」

アスランの言葉通りだった。ウラヌスとスレイヤーは高速で旋回しながら、中心部の2機へビーム攻撃を仕掛けてきたのだ。キラが接近しようと移動しても、その動きにあわせて旋回の渦が移動する。

「くっ！」

「逃がすものか！」

ストライクフリーダムのバインダーがはじけ飛ぶ。背後をアスランがカバーしてなければ当の昔に撃墜されていただろう。その完璧なまでに統制の取れた動きにキラは思わず舌を巻く。

「くそっ！ 突破できない！」

「このままじゃ！」

完全に動きを封じられてしまった。ジリジリと追い詰められていくことを感じながら、キラとアスランは旋風の中心で必死の抵抗を続けた。

## 第42話「好敵手」

アルマンは新たな獲物を屠りながら、求める敵を探した。

「邪魔を……」

飛来するザクフアントムを一瞬で光球に変える。意識しての行動ではない。異常とも言える訓練と投薬によって強化された肉体は反射的に敵を殺すように作られている。

「するなあ！」

後続していた2機のザクウォーリアがジェノサイドの両手から放たれたビーム砲によって砕け散る。その残骸を避けようとせせず、アルマンはその中心に機体を進めた。

PS装甲によって残骸で機体が損傷する心配は無い。逆に残骸に機体を置くことでアルマンは敵の攻撃から機体を守る。周囲に展開していたザフトのMS部隊はジェノサイドに命中弾を与えられないでいた。

「うざったいんだよ！」

ジェノサイドのドラグーンが一斉に解放される。それと同時に全身に装備されたビーム砲が正確にMS部隊を襲った。練度の高いはずのザフトMS部隊であったが、アルマンの動体視力から逃れることができず、次々と撃墜されていく。

(こんなザコを何百機撃墜したところで……)

アルマンは知らず知らずに唇をかむ。自分が倒すべき相手はシンしかない。すでに心の奥に深く刻まれた宿敵の影をアルマンは追っていた。

「！」

強烈なプレッシャーを感じ、アルマンはスティックをすばやく引く。制動がかかって急後退したジェノサイドの眼前を二条のビーム光が通り過ぎる。

「あいつか！」

攻撃してきた方向を見るとそこには青いMSと茶色のMSが見える。失望に眉をひそめながら、アルマンは機体を2機の方向へ向ける。

『これ以上やらせるか！ デイアッカ！ 援護しろ！』

『おいおい……』

イザークの乗るデュエル改がビームを放ちながらジェノサイドに迫る。デイアッカの乗るバスター改は正確無比な砲撃でこれを援護する。アルマンはその攻撃をかわしながら、予想以上の強敵の出現にまた唇をかむ。

「生意気！」

『お前が生意気だ！ 小僧！』

ジェノサイドのビームサーベルをデュエル改のビームサーベルが受け止める。出力強化されているとはいえ、正面からジェノサイドの攻撃を受け止めてはデュエル改といえどもただではすまない。機体のきしむ音を聞きながら、イザークはすばやくジェノサイドの攻撃をいなした。

『ええい！ 力だけはある！』

『距離とれつて！ 正面からやりあったら流石にキツイぞ』

『うるさい！』

デイアッカの制止も聞かず、イザークは再びジェノサイドに切りかかる。アルマンはそれをあえて受け止めず、近距離からのビーム砲撃で撃墜しようとした。

「おしまいだよ！ コーディネーター！」

『なっ！』

『いわんこつちゃない！』

バスター改のビーム砲が咆哮をあげる。横合いからの攻撃にジェノサイドがかすかに動きを鈍らせた。その瞬間について、イザークはデュエル改をジェノサイドの砲口から脱出させる。

「逃がすか！」

『くっ！』

デュエル改の胸部装甲をビームが灼く。イザークは閃光に埋め尽くされたモニターから眼をそらしながら、動物的な勘だけで攻撃をかわした。

バスター改の連続した砲撃によって足を止められたアルマンは、頭上に見えるバスターめがけドラグーンを射出する。すぐさま回避行動をとるディアツカだが、機動力に劣るバスター改の反応は鈍い。「おいおいおいおい！」

周囲を飛翔するドラグーンを迎撃しながら、ディアツカは冷や汗をかき続ける。イザークの援護もままならないどころか、このままでは自分が撃墜されてしまう。一瞬、ミリアリアの怒ったような泣き顔が脳裏に浮かび、ディアツカは天を仰ぐ。

『死ぬるかよ！』

「死ぬんだよ！ 大砲屋め！」

とどめとばかりにアルマンはジェノサイドの腰部ビーム砲を回避を続けるバスター改にむける。イザークの乗るデュエル改はまだ体勢を整えていない。アルマンは勝利を確信した。

「とどめええええ！」

『おおおおお！』

「！」

背筋を冷たいものが走る。その感覚にあるものを感じ、アルマンの顔が歓喜に染まる。アルマンはすぐにバスター改へ向けていたビーム砲をその感覚の源へと向けた。

「シン！」

「アルマン！」

下方から一直線にデルタ・デスティニーが突進してくる。迎撃のビームを物ともせず、1本の槍となって向かってくるその機体を見つめ、アルマンは心のそこからの笑顔を見せた。

### 第43話「ヴァイオラ、散華」

キラとアスランは、ジャックとヴァイオラの攻撃の前にジリジリと追い詰められていた。

ジャックらの乗るMSと、キラたちの乗るMSの性能差はほとんどない。むしろ、特化したチューニングがどこされているジャックらよりもバランスがとれている分、キラたちの機体のほうが性能は上であろう。

だが、ジャックとヴァイオラの息のあったコンビネーションは、その性能差を上回った。キラやアスランも並みのパイロットではないが、今のジャックたちの間断のない攻撃の前には為す術もない。「くっ！」

ウラヌスが振り下ろしたビームサーベルをストライクフリーダムが間一髪でかわす。その次の瞬間、ウラヌスの背後から現れたスレイヤーがビームサイズを横薙ぎにふる。キラは休む暇もなく機体制御に全神経を注いだ。

『反応が遅れたぜアスラン・ザラ！』

ストライクフリーダムに攻撃をかわされたはずのウラヌスが、そのままインフィニットジャスティスに襲い掛かる。キラを援護するためにスレイヤーを狙っていたアスランは、不意の攻撃に一瞬の隙を作ってしまう。

「ちい！」

インフィニットジャスティスの左肩が浅く切り裂かれる。不意を衝かれてもなお致命傷を避けられたのは、アスランの戦士として経験にほかならない。だが、密閉されたノーマルスーツの中で、アスランの手のひらにはじつとりと汗がにじんでいた。

ギリ貧である。いくらアスランやキラが驚異的なパイロット能力を持つとはいえ、究極にまで強化されたエクステンデッドであるジャックたちの耐久力には敵わない。今は攻撃をかわしていても、い

つかは直撃をくらうのは明白なのだ。

「ならば！ 攻めるぞキラ！」

アスランがスティックを力強く倒す。すぐさまスレイヤーがドラグーンを放つがアスランはそれをかわしもせず機体を突撃させた。

『なっ！』

『死ぬ気かよ！』

ジャックとヴァイオラが同時に叫び声をあげる。だが、アスランには十分な勝算があった。

アスランの考えたのはインフィニットジャスティスを盾にした反撃である。インフィニットジャスティスに敵の攻撃を集中させ、その間にストライクフリーダムが反撃する。2機同時の攻撃を受ければさしものインフィニットジャスティスもただではすまないが、しばらくは持ちこたえることができる。

「くはっ！」

致命傷をかるうじてさけながらインフィニットジャスティスは無謀ともいえる突撃を続ける。ウラヌスのビームサーベルで左脚が切り裂かれ、スレイヤーのドラグーンで頭部を吹き飛ばされてもアスランは機体を後退させることはなかった。

『そんなに死にたいなら地獄に送ってやるぜ！』

狂気の歓声と共にジャックがウラヌスを上昇させる。左腕に握ったバスターライフルがインフィニットジャスティスの胴体に照準を合わせた。アスランはすぐに機体を回避させようとするが、先ほどの攻撃によってバーニアの出力があがらない。

『死ねよやあああああ！』

「させるかああああ！」

ジャックの視界の端に金色の残像が入る。視線を横に動かすと、そこにはキラの乗るストライクフリーダムがビームライフルを構えている姿が見えた。

『しまっ……………』

「くらえええええええ！」

ストライクフリーダムのビームライフルが閃光を放つ。大出力のビームライフルを放つために射撃体勢に入っていたウラヌスに、この攻撃を回避するだけの時間は残されていなかった。

『おおおおおおお！』

『ジャアアアアアアアアアアアック！』

ウラヌスの純白の機体が光に包まれようとしたその瞬間、真紅の機体はその目の前に立ちふさがる。死を覚悟していたジャックは、そのシルエットの正体を知り愕然とした。

『ヴァイオラ！ 何を！』

『ジャック……覚えておいて……私は……あなたと……』

ビームがスレイヤーの胴体を貫く。コクピットを直撃され、ヴァイオラの体は一瞬にして蒸発した。

「！」

「盾に……なっただと？」

その光景を見てアスランとキラは昔見たある光景を思い出した。2人がまだ敵同士だった頃、アスランを助けようとして1人の少年が死んだ光景だった。

『ヴァイオラアアア！ 返事をしろおおお！ てめえ！ 何黙つてやがる！ オレが何なんだよ！ なあ……』

眼前で見た姉の死にジャックの理性のタガは完全に吹き飛んだ。ジャックはウラヌスでスレイヤーをつかむと、抱き寄せるように機体を密着させる。周囲にキラやアスランがいるのも気にせず、ジャックはコクピットを開いた。

『ヴァイオラ！ どこだよ！ 吹き飛ばされたのか？ どこだ！ 通信に出ろよヴァイオラ……』

ジャックの顔はすでに涙で濡れていた。焼け焦げたスレイヤーの胴体に降りたジャックは、コクピットのあったあたりを必死に探し続けた。

キラとアスランはその光景をしばらく見つめていた。キラは自分が見たことを改めて実感し、暗い表情でモニターに映るジャック

を見つめる。

「キラ……行くぞ」

「アスラン……ぼくは……」

通信モニターにうつるキラの顔を見て、アスランはムリに厳しい表情を作った。そして、できるだけ感情を殺して言葉を続ける。

「俺たちにはまだやるべきことが残っている。罪を……殺人の罪を償うのはそれが終わってからだ」

「……」

キラは答えない。自分がなすべきことはわかっている。だが、そのためだけにだけ人間を殺せばいいのか。キラは己の業の深さを痛感しながら、ストライクフリーダムをインヘルノのほうへ向けた。

## 第44話「イントロード」

ギイ率いるアザナエル軍はLOW、ザフト両軍をインヘルノ表面で迎え撃っていた。

巨大な隕石を要塞化したインヘルノには無数の自動防衛砲台がある。それらが飛来するムラサメBやザクウォーリアを迎撃し、回避した敵機をベーオウルフやラピッドダガーなどのMS部隊が撃墜する。単純だが効果的な防衛陣のために数で勝るLOW、ザフト軍は苦戦を強いられた。

「！」

インヘルノの岩盤が灼熱のマグマと化す。背後からのビーム攻撃をかわしながら、シンは前方を高速移動しているアルマンのジェノサイドに照準を合わせた。

2連装長距離ビーム砲がジェノサイドを狙撃する。だが、その攻撃を予測していたアルマンは、ビームカノンでデルタステイニーを狙った。攻撃を受けたシンは機体を回避させるために狙撃位置を動かし、ジェノサイドへの攻撃はあらぬ方向へされる。

「さすがに……やる！」

シンの顔には疲労の色が濃い。いかにコーディネイターといっても限界はある。ましてやシンはこの数ヶ月まともな休息もとらずに戦闘を続けていた。気を抜けば失神しそうな体を驚異的な精神力でおさえつけ、シンはアルマンと刃を交えていった。

インヘルノ中央ゲート。大型艦艇が入港するために存在するこの宇宙用ゲートで、アスランとキラ率いるLOWのMS部隊がアザナエル軍に猛攻をしかけていた。

「くっ！」

損傷したインフィニットジャスティスをたくみに操り、アスランは確実に戦果をあげていく。だが、敵は量産型ナイトメアとベールウルフで構成された精鋭部隊である。その上、濃密な対空砲火が彼らを容易に近づけさせない。

「時間がないというのに！」

ベールウルフの胴体をビームサーベルで両断し、アスランはゲートの方をにらみつける。そこには真紅のベールウルフが見え、その機体は一直線にこちらに向かってきた。

「新手か！」

瞬時にアスランの左手がコンソールを叩く。敵の動きは悪くないが、アスランと戦うには実力不足であった。アスランは余裕さえもってビームライフルを敵MSのコクピットに向ける。

「やめてアスラン！」

「！」

キラからの通信にアスランは思わずビームライフルの筒先をひく。間合いを詰めた真紅のベールウルフはインフィニットジャスティスに攻撃をしかけるが、アスランはそれを回避した。

「どうしたキラ！」

「それに乗っているの……ルナマリアさんだよ！」

「何！」

驚きの声をあげ、アスランは目の前のベールウルフを見上げる。

たしかにどことなく動きがルナマリアに似ている気がする。かつてザフト艦と一緒に戦ったアスランにはそれがわかった。

「通信回線から声がするんだ！ ルナマリアさんの声だ！」

キラの言葉にアスランはアザナエル軍の通信回線を開く。すると聞きなれた声がアスランの耳に飛び込んできた。

「アルマンを守るんだああ！ 死ね！ ジャスティス！」

「ルナマリア！」

振り下ろされたビームサーベルをかわし、アスランは機体をベールウルフに接触させる。すぐさまふりほどこうとするベールウルフ

を押さえつけ、アスランは中にいるルナマリアに声をかけた。

「聞こえているんだろルナ！ 何でこんなところに！」

『貴様など知らん！ 離せ！ 殺してやる！』

いつもと違うルナマリアの声にアスランはシンから聞いた話を思い出した。ルナマリアは敵によって洗脳されている。アスランは唇をかみしめた。

「キラ！ ここは頼めるか！ 俺はルナをアークエンジェルに連れて戻る！」

『了解！ ここはボクが何とかする！』

「すまん！」

キラに礼を述べ、アスランはルナマリアを抱きかかえたまま、戦場を離脱しようとした。とりあえず、戦場から彼女を引き離すことが先決である。洗脳のほうはアークエンジェルの医療スタッフやカガリたちに任せればいい。

そう考えながら機体を操っていたアスランにはほんのわずかなスキができた。そのスキをルナマリアは見逃さず、ベーオウルフのバルカン砲でインフィニットジャスティスの右腕を銃撃した。

「！」

マニピュレーターがゆるんだスキをつき、ルナマリアはベーオウルフを離脱させる。すぐにアスランがその後を追おうとするが、その行為は1機のMSによって阻まれる。

『見つけたぜ！ キラ！！ ヤマト！ アスラン！！ ザラ！』

「くっ！ あいつか！」

ジャックの乗るウラヌスが恐ろしい速さでインフィニットジャスティスに斬りかかる。だが、その間にキラがわりこみ、ウラヌスのビームサーベルをストライクフリーダム of サーベルで受け止める。

『キラあああああ！』

「キラ！」

『アスラン！ ここはボクが何とかするって言ったろ！ キミはルナマリアを！』

視界の端に見えるルナマリア機はゲートの中へと入っていきこうとしている。このまま逃がしてしまえばまた会える保証はない。だが、強敵と対峙する親友を見捨てて行くことにアスランはわずかな戸惑いを見せた。

『早く行つて！ またシンに……辛い思いをさせたいの？』

ビームサーベル同士の閃光に照らされ、ストライクフリーダムが白く輝く。アスランはその姿に敬礼をすると、機体をインヘルノのゲートへと突入させた。

だが、インヘルノ中央ゲートの護りは堅い。すぐさまベールオウルフトナイトメアが殺到し、インフィニットジャスティスの前方を塞ごうとする。

『させるかよ！』

『いただきます！』

アスランの左右にムラサメBが飛来する。機体番号からしてシンの部隊のものである。そのほかにも数機のザクウオーリアがインフィニットジャスティスを援護するように展開する。

「貴様らは……」

『アスカ中隊副官ミツキー＝カウフマンであります！ ザラ司令！ 援護します！』

『同じくアスカ中隊グレッグ＝キンバリーです！ ここは俺たちにお任せを！』

ムラサメBがベールオウルフト戦闘を開始する。その間をすり抜けながらアスランは、シンが立派に指揮官としての務めを果たしていたことを実感した。

「あいつは俺の力になってくれた……」

前方でインヘルノのゲートがゆっくりと閉じていく。アスランはスロットルをふかして機体を加速させると、機体をねじりこむようにゲートをくぐった。

「今度は俺がお前の力になる番だシン！」

真紅のベールオウルフの後姿を追いながら、アスランは今も戦って



## 第45話「決着」

アルマンの苛立ちは頂点に達しようとしていた。

『邪魔だああ！』

ジェノサイドの連装ビームがデルタステイニーをかすめる。なぎ払うかのように次々とビームが発射されるが、集中力を途切れさせないシンは恐怖を感じることなく、これをかわし続ける。

（見えてきた……）

火力ではジェノサイドのほうが圧倒的に上回るのはわかっている。だが、運動性ではデルタステイニーのほうが上である。研ぎ澄まされたシンの感覚ならジェノサイドの雨のような砲撃をかわして、懐に飛び込むことができる。

「おおおおお！」

激しい機動によって、機体が軋みをあげ、シンの体もねじ切られるような痛み悲鳴もあげる。しかし、シンの精神は不思議なほど冷たく落ち着いていた。不規則に飛来するドラグーンからのビーム攻撃をかわし、拡散ビームをシールドで弾く。目標はただ1点。シンの精神はそこに集中した。

『ちい！』

砲撃で敵が止まらないことに焦りを覚えたアルマンは、すぐさま隠し腕に仕込まれたビームサーベルを抜いた。ドラグーンの攻撃で敵の移動ルートを限定し、その進行方向に先回りしてサーベルを振り下ろす。だが、万全のタイミングで振り下ろした斬撃は、デルタステイニーのアロンダイトで弾き返された。

『なっ！ なにい！』

「もらった！」

振り上げたアロンダイトがジェノサイドに振り下ろされる。アルマンは咄嗟に胴体部分を腕でカバーし、被害を左腕だけに抑える。

『まだまだ！ まだ負けじゃないよ！』

ドラグーンを牽制にアルマンはデルタステイニーと距離をとる。シンはそれにおいすがろうと機体の出力をあげるが、ジェノサイドの腰から放たれるビーム砲で進撃を阻まれる。

「くそっ！」

接近戦を諦め、シンは機体を垂直上昇させる。機動性に優れたドラグーンも直線加速ではデルタステイニーには追いつかない。一瞬でドラグーンをふりきったデルタステイニーは、長距離ビーム砲でジェノサイドを狙う。

「とどめえええ！」

大出力ビームがジェノサイドごとインヘルノの岩壁を焼き尽くす。だが、その光の爆発の中から黒い機体が姿を現す。金色の光が機体の周囲を包んでいることに気づき、シンは苦しげに舌打ちをする。

「アルミューレ・リュミエールか！」

2本の隠し腕にビームサーベルを握り、ジェノサイドが一直線に突進してくる。ドラグーンはすべて破壊されている。シンはアロンドイトを両手に構え、一気にジェノサイドめがけ機体を降下させた。

「おおおおおおお！」

『わあああああ！』

サーベルとアロンドイトの刀身が交錯する。その瞬間、ジェノサイドの胸部が開き、そこにビーム砲が姿を見せる。

「！ しまっ！」

『切り札は最後までとっておくものだ！ シン！』

すぐに機体を離脱させようとするシンだが、アルマンはジェノサイドの隠し腕でデルタステイニーを押さえつける。至近距離のビーム攻撃ならさすがのデルタステイニーもただではすまない。アルマンは狂気に支配された眼で勝利を確信した。

「なめるなあああ！」

『！』

デルタステイニーのウィングバインダーが閃光を吐き出す。一気に加速したデルタステイニーは、ジェノサイドをインヘルノの

岩盤に叩きつけ、そのまま岩盤をひきずる。

コクピットをゆるがす激しい振動の中、アルマンは必死に機体を操作する。切り札である胸部ビーム砲は充填に時間がかかる。これを外したら自分はシンに敗北する。その恐怖がアルマンに決死の覚悟をさせた。

「離すもんか！ お前はボクと……死ぬんだ！」

「死ぬもんか！ オレはルナと……生きてやる！」

接触回線越しのシンの言葉がアルマンの脳裏に衝撃を与える。一瞬、脳裏にルナマリアの笑顔が浮かび、アルマンの眼に涙があふれる。

その動揺はシンにとって十分なチャンスだった。出力を限界まであげたデルタステイニーは、インヘルノの防衛砲台の1つにジェノサイドを叩き付けた。隠し腕の1本がへし折れ、デルタステイニーは虎口を脱した。

やっと充填の終わった胸部ビームが哀しげに咆哮をあげる。アルマンはコンソールを思い切り殴りつけ、絶叫する。

「く、くそおおおお！」

アルマンはジェノサイドを方向転換させる。完膚なきまでにプライドを打ち砕かれ、少年はひたすらに安らぎの場所へと逃げようとしていた。

「逃がすか！」

シンはジェノサイドを追おうとコンソールを操作する。だが、彼の逸る気持ちとは裏腹に機体は警告音を鳴らす。モニターにはオーバーヒートの文字と急速冷却の残り時間が映し出されていた。

「ちくしょう！」

デルタステイニーは実験機である。限界ギリギリまで高まったエンジン回転数と、過度の高速機動にシステムがダウンしたのだ。つい熱くなつて機体の限界を忘れてしまった自分を、シンはしっかりとつけてやりたくなった。

ジェノサイドのバーニア光がインヘルノの岩盤に消えていく。残

り時間は12秒。シンにはその数秒が数年にも感じられた。

「総員、白兵戦の準備を！ 私が指揮を執る！」

「司令が!?!」

ヘッドレシーバーを外したメイリンは艦長席から立ち上がるラファエルを見上げる。ノーマルスーツを着たラファエルは、美しい金髪をヘルメットの中に押し込め、バイザーを下ろした。

LOW艦隊の旗艦ハンニバルは敵の対空砲火を強行突破し、インヘルノ中央ゲートへの侵入に成功していた。

無謀ともいえるこの攻撃を成功に導いたのはアスラン以下LOWのMS部隊である。彼らが突破口を開いたからこそ、ラファエルたちはインヘルノへ取り付くことができた。

「司令！ ムチャですよ！ 白兵戦だなんて！」

「外部からの攻撃ではこの岩の塊は陥落しない。内部から司令室を叩く。そのためには誰かが白兵戦をしないとね」

ラファエルが床をける。メイリンの目の前に降り立った彼は、彼女のバイザーを下ろし、ヘルメットを接触させる。

「アスランくんもキラくんも戦っているんだ。僕だけがここで座っているわけにはいかんよ。元々僕はロゴスの人間だ。決着は僕がつけるよ」

「……でも！」

メイリンが次の言葉をいう隙を与えず、ラファエルは彼女から離れる。右手にライフルを握り、彼は陸戦兵たちの集まっているほうへと浮遊していった。

「司令！ ぜつたいに！ 帰ってきてくださいね！」

メイリンの言葉は通信回線が繋がっていないラファエルに聞こえるはずはない。だが、ラファエルは少しだけこちらをむくと、左手で拳を作り親指を立てた。

## 第46話「復讐者ギイ」

暗い部屋にギイはアザナエルと対峙していた。

場所はインヘルノ最深部にある最高意思決定室。ロゴスが支配する最後の砦である。

「おしまいですな……」

「や、やめて……くれ……大佐」

ブラスターをアザナエルの額にあて、ギイは静かに引き金をひく。アザナエルの仮面が一瞬ぶれ、そして殻の体は床に崩れ落ちる。

頭部を撃ち抜かれたアザナエルをギイはゴミでも扱つかのように足で転がした。仮面が頭部から外れ、茶色の髪 of 若者が素顔を現す。

「さて……」

アザナエルの死体を放置して、ギイは部屋の奥へと進もうとする。その時、部屋のドアが開き、銃を構えたアスランが姿を見せた。

「！」

「ほう……アスラン・ザラか」

一瞬、ギイへと銃口を向けたアスランだが、その表情を見て撃つことをためらった。ギイはそんなアスランの様子に憫笑を向け、そのまま視線を部屋の奥へと注ぐ。

「……さて、道化師は退場しましたよ。そろそろ舞台裏から御登場願いましたどうか」

「ふん……戦争屋風情が増長しおつて」

不愉快そうな声と共に闇の中から老人の顔が浮かび上がる。1人、2人、3人。10人ほどの老人たちが電動制御の車椅子に座ったままでギイの前に姿を現した。

「！」

「やっとお目にかかれましたな元老の方々」

楽しくて仕方が無いといった表情でギイがわざとらしく礼をする。老人たちはその姿を不快げに眺めた。

「アスラン・ザラ。紹介しようこれがロゴスの中枢を担っていた元老の方々だ」

「なっ！」

アスランの表情が凍りつく。ブルーコスモスを操り、世界を戦乱の業火に叩き込んだ軍産複合体ロゴス。デュランダルらザフトの手によって崩壊したとされる組織の中心メンバーがここにいるのである。

銃口を向けたアスランに老人たちは表情ひとつ変えない。老人の中には意識があるのかさえ定かではないものもいる。彼らがじつとこちらを見つめる風景は、アスランの背筋に冷たいものを感じさせた。

「どうした？ 引き金をひかないのかね？」

老人の1人が口を開く。アスランはトリガーにゆびをかけるが、それを引くことができなかった。

「コーディネイター。遺伝子治療の副産物。人類の希望にして失敗作……」

「どういうことだ！」

「言葉どおりの意味だアスラン・ザラ」

アスランの横で老人たちに銃を向けたギイがつぶやく。アスランが横目でギイを見ると、彼の眼はさも楽しげに揺れている。

「人類の歴史は死との戦い」

「より長く、より若く、より美しく、数千年間人はそれを求めた」

「そして進歩した医学はついに遺伝子改良という禁断の果実を手にした」

老人たちが順に話し出す。アスランはその言葉をじつと聞く。

「だが、遺伝子改良によって作られた新人類……コーディネイターは失敗作であったのだ」

「生殖機能の大幅な低下。それは種として致命的な欠陥だった」

「コーディネイターは徹底した婚姻統制でそれを克服しようとしたが」

「それは所詮付け焼刃」

「われわれは作り損ねたのだお前たちを」

アスランの胸を黒いものがうずまく。コーディネイターはまるでモルモットのようには語る老人たちへの憎悪。それが吐き気を催すほどの不快感となってアスランを襲う。

「貴様たちが……！」

「我々は努力した。この世界から失敗作を一掃するために」

「アズラエル、ジブリール、愚かな道化どもはその役目も果たせず、いたずらに戦火ばかりを広げていった」

アスランの指が引き金にかかる。噴き出すほどの殺意が全身を支配するのを感じ、アスランは理性のすべてを動員してそれを抑えつける。

「我らは決断した……この手を汚すことを」

「そして、アザナエルという傀儡を作り上げ、我々を組織したわけですね」

ギイの言葉に老人たちがうなずく。

「自分の手を汚すといっておきながら最期の最期まで影に隠れる…

…さすがに老獪ですね」

「老人に世界はついていきはせんよ。カリスマと若さは極めて近いものだ」

「絶頂を極めた瞬間、それは衰える。なるほど……同じだ」

ギイの持つ銃が乾いた音をあげる。老人の1人が頭部をのけぞらせる。アスランはその光景を信じられないといった顔で見つめる。

「最期に聞こう。なぜだね？」

2人目の老人が射殺される。だが、その行為に表情ひとつ変えず、老人たちがギイに質問をする。

「私は連合軍の軍人ですな。あのヤキンにいたのですよ」

「知っているよ。我々の身上調査は完璧だ」

3人目が椅子から崩れ落ちる。アスランは銃口を向けることさえ忘れ、ギイを見つめた。

「あのジェネシスの光……忘れようとしても忘れられない」

4人目が背もたれごと後ろに倒れこむ。

「そして、あの戦場で私は奇跡的に助かった。まあ片目は失いましたかね」

5人目が首をうなだれる。ギイはなおも言葉を止めない。

「だが、多くのものを失った。部下、同僚、上官そして……」

6人目が弾けるように痙攣する。

「わが子をね……」

「なるほど。これは盲点だったな。すべての感情を排した冷徹な男かと思っていたよ」

「ええ、あなた方のお眼鏡違いですよ。私は待っていたのです。あのくだらない戦争を引き起こした張本人に近づける日をね」

7人目が倒れる。1人殺すたびにギイの顔には歓喜が浮かぶ。この3年間封印し続けてきた感情が闇の奥底からあふれたかのような昏い笑みだった。

「引き摺り下ろしてやりたかったのですよ。あなた方を。理不尽に命を奪われる地獄の戦場へね」

8人目が息絶える。恐怖の表情さえ浮かべず、従容として老人たちは銃弾を待っていた。ギイはその様子にやや不満げな色を浮かべる。

「命乞いはなさらないのですか？」

「無駄だろう？ それで君が見逃してくれるのかね？」

「いいえ」

9人目が眉間を撃ち抜かれた。ギイは最後の1人に銃口を突きつけた。

「最期に1つだけ。なぜ、コーディネイターなんかを作ったのですか？ 完璧な人類を作り上げて、旧人類であるあなた方の体は老いさらばえていくだけでは？」

「最期まで理解できなかったようだね。我々は己の保身など考えていないんだよ」

老人がニヤリを笑う。ギイは軽く眉をしかめた。

「コーディネイターは人類を永遠に生き延びさせるための計画だった。進化の袋小路に突き当たった人類に翼を与える偉大なる計画さ。結果は失敗に終わったが我々は善を行ったんだよ」

「黙れ」

最後の老人が死んだ。血の匂いが充満する室内でアスランとギイは静かに向かい合う。

「これでおしまいだ……アスラン・ザラ」

「やめる……俺は……あなたを……」

ギイは笑った。その笑みはすべての重荷から解放されたかのよう。清々しく、寂しそうだった。

銃声は室内に響き渡る。そして、1人の男が床に倒れた。

## 第47話「戦士相克」

インヘルノに逃げ込んだアルマンを追って、シンもまた要塞内に侵入していた。

デルタステイニーを外壁に残し、銃だけを片手にインヘルノ内の通路を走るシンは、その惨状に眼を見張った。

インヘルノ内はすでに軍事要塞の態をなしていない。指揮系統も何も無く、アザナエル軍の兵士たちは無統制に反撃をしてくる。組織だっていない分、どこから攻撃がくるか予想できず、シンら侵入したLOWの兵士たちはなかなか奥へと進めないでいた。

「しっかりしろ！」

通路に倒れた兵士を抱き起こし、シンはアルマンの行方を聞いた。兵士は負傷の痛み顔をしめながら、小柄なパイロットが奥へと進んでいるのを目撃したと告げた。

「よし！」

兵士に応急手当を施したシンは、銃を握ってアルマンを追う。無人の通路には雑多なガラクタが漂い、シンの世界をさえぎる。

「！」

一瞬の殺気を感じ、シンは身を翻した。通路の奥からロケット砲が飛来し、シンの背後で爆発する。

「外した！？」

「アルマンか！」

闇の奥に感じた気配にシンが銃撃を放つ。アルマンは崩れ落ちた瓦礫を防壁にして反撃する。

「ルナはどこだ！」

「教えるもんか！」

通路の曲がり角に身を隠し、シンはアルマンの攻撃をさける。アルマンは確実にルナマリアの元へ向かっている。そんな予感だけを頼りにシンはアルマンを追う。そして、アルマンもまたそんなシン

をルナマリアに近づけまいと、彼を殺すことに躍起になっていた。

『どうしてもいつもいつも僕を邪魔にするんだ!』

「俺は邪魔なんかしちやいない! お前が戦いをやめれば……」

『やめられるか!』

2発の銃弾がシンの足元で跳ねる。身動きがとれないシンはヘルメットの中で唇をかむ。

「!」

宙を何かが漂ってくる。黒い拳大の物体。それを見た瞬間、シンは反射的にそれを投げ返し、通路の床に体を伏せた。

「!!!」

背中を衝撃が伝う。激しい振動で息がつかまる。アルマンの放った手榴弾はパイロットスーツ越しにも十分な威力を發揮した。疲労とダメージに悲鳴を上げる体を引き起こし、シンはアルマンのいた通路を見る。

「逃げられた?」

そこにはアルマンの姿はなかった。暗い通路の奥にアルマンの姿を追って、シンは床を蹴った。

「ギイ!」

「アルマンか」

シンの追撃から逃れたアルマンは、非常用通路を歩くギイと鉢合わせした。ギイはいつもの険しい表情に疲労の色をにじませ、数人の兵士たちとMSデッキ方向へと歩いている。

「アルマン!」

「ルナ姉ちゃん!」

ルナマリアの姿を発見したアルマンは、思わず彼女に抱きついた。その光景に何も言わず、ギイは重い足取りで先を急ぐ。

「敵はインヘルノに取り付いたよ。もう僕だけじゃ防げない」

「情けないぞアルマン。約束はどうした？」

ギイのにもべもない言葉にアルマンが唇をかむ。ルナマリアはそんなアルマンの肩を優しく抱き、慰めるように声をかける。

「大丈夫ですよアルマン。第7宇宙ゲートにアイオーンが残っています。これで我々は脱出できます」

「脱出？ インヘルノを捨てるの？」

驚いた顔のアルマンにギイは静かな声で説明する。

「インヘルノの原子炉に自爆コードを入力した。今から1時間後にここは爆発する」

「……そんな」

ギイの言葉にアルマンは耳を疑う。難攻不落の要塞と信じていたインヘルノを放棄する。それは狭い価値観しかないアルマンには、衝撃的な決定だった。

「放棄して……どうするの？」

「どうもしない。要塞を吹き飛ばして、それで終わりだ」

「なっ！ LOWの連中は？ ザフトは？」

アルマンがギイに詰め寄る。ギイは表情を変えずにこう答えた。

「どうもしない。私にとって連中はどうでもいい」

「なっ！」

アルマンは言葉を失う。あれだけ威厳と自信に満ちていたギイの面影はそこにはなかった。目的を果たし、重荷の無くなった彼はただの疲れた中年にすぎなかった。

「アイオーンで戦域を離脱したら我々はブルーコスモス残党に合流します。戦いは終わりませんよアルマン」

「……いやだ」

アルマンの歩みが止まる。ギイとルナマリアもそれに合わせて歩みを止めた。

「アルマン？」

「いやだ！ 負けて逃げるなんて！ いやだ！」

アルマンがルナマリアに向かって叫ぶ。ルナマリアはアルマンの

言っている意味がわからず、首をかしげた。

「僕は……僕はルナ姉ちゃんをシンに勝って奪うんだ！ 盗みたいんじゃない！」

「シ……ン」

「アイツはステラ姉ちゃんの仇だ！ 絶対に負けたくない！」

シンの言葉を聞いてルナマリアが頭をおさえる。不安定になっていた記憶操作が解けかかっている。ギイは憎悪の炎を燃え上がらせるアルマンの肩に手を触れた。

「！」

アルマンの耳元に顔を寄せたギイはある言葉をつぶやく。その言葉聞いたアルマンの全身が冷水を浴びたように強張った。

「ルナ！」

アルマンが両目を見開いて立ち尽くしていると、通路からシンが飛び出す。アルマンとルナマリアの姿を見つけたシンがすぐさま銃口を向けるが、その様子の異常さに引き金を躊躇する。

「LOWの兵士か」

ギイは興味もなさそうに銃弾をシンへ向かって放った。そして、アルマンとルナマリアに一瞥をくれると、2人をその場に残して通路の向こうに走っていく。

「待て！」

銃弾を物陰に伏せてかわしたシンは立ち上がるとギイを追おうとする。だが、その眼前にふらりとアルマンが立ちふさがる。その両目は虚ろに開かれ、何か小声でつぶやいている。

尋常な様子ではない。シンはどう対処したらいいかわからず、その場に立ち尽くす。アルマンはゆらゆらと銃口をシンのほうへ向け、次第に瞳孔に正気の色を取り戻していった。

「シン……僕は……何もかも……失った……」

「アルマン……」

銃口を向け合いシンとアルマンは正対する。虚無感の漂うアルマンと焦りがにじむシン。2人の銃口はお互いの頭部に向けられ、一

触即発の空気が流れる。

「どけ！ 俺はルナを取り戻す」

「し、シ……ン・アスカ」

壁に手をつき、ルナマリアが不快げにうめく。シンはルナマリアの変化に気づき、大声で呼びかける。

「ルナ！ 俺だ！ シン・アスカだ！ ルナの居場所はこつちだ！ 戻って来い！ アスランも！ メイリンもルナを待ってる！」

「ア、スラン……メイ……リン。待ってる」

ルナマリアは苦しげに額をおさえる。その様子を静かに見つめ、アルマンはシンのほうへ視線を向ける。

「お前もだアルマン！ あいつらの言うことなんて聞く必要はない！ 戦う必要なんてないんだ」

「違う……」

陰を宿した瞳でアルマンが答える。銃口は依然としてシンのヘルメットへ向けられている。その声と表情の暗さにシンは背筋に冷たい汗をかいた。

「僕は……僕は……僕は……アルマン・シトリーだああああ！」

アルマンが引き金をひく。ルナマリアの様子に意識を集中させていたシンは、反射的に反撃したもののバランスを崩し、銃弾はあらぬ方向に飛んでいく。

「いやああああ！」

(ルナ……)

床に倒れたシンの脳裏にルナマリアの絶叫が聞こえた。

## 第48話「死線を越えて」

『こちらカウフマン！ 眼をやられた！ 敵はどっちだ！』

『キンバリーだ！ お前の左に敵巡洋艦1！』

『サンクス！ あばよ相棒！』

キラの見ている前でムラサメBがアザナエル軍の巡洋艦に特攻をかける。閃光が巡洋艦の横腹に突き刺さり、艦体が真っ二つに裂ける。

「あ、あ……ああ……」

『どこ見てやがる！』

ジャックの声と共に殺気が舞い降りる。ウラヌスが振り下ろしたビームサーベルをかるうじてさけると、キラはストライクフリーダムの全ドラグーンを発射した。だが、ジャックの乗るウラヌスは狂気じみた運動性能で、ドラグーンのビームをすべて回避する。

『来い来い来い！ ハアアア！』

ウラヌスのバスターライフルが閃光を放つ。キラはすぐに回避したものの、後方に展開していたLOWの艦艇が巻き込まれて吹き飛ばす。己の不注意に唇をかみつ、キラはストライクフリーダムのビームライフルでウラヌスを牽制する。

「もうやめろ！ この要塞はもう陥落する！ 君が戦う意味なんてない！」

『お前が生きている！ 俺が戦う意味はそれだ！』

「そんな理由！」

ウラヌスのビームが次々とストライクフリーダムをかすめる。高速移動しながらの射撃にもかかわらず恐るべき精度でジャックはストライクフリーダムを追い詰めていく。姉であるヴァイオラを失ったことによる異常な精神状態が、驚異的な集中力を彼に与えていた。『ヴァイオラが死んだのにお前がなんで生きている！ おかしいだろっがあああ！』

距離を詰めたウラヌスがサーベルで斬りかかる。それをストライクフリーダムがサーベルで受け止める。2機はそのまま勢いに乗ってインヘルノの岩盤に叩きつけられる。

「くっ！」

一瞬コクピットのモニターがブラックアウトする。衝撃で電気系統が損傷したらしい。キラはコンソールで破損箇所をチェックし、電装系のバイパスで急場をしのぐ。

「とどめえええ！」

ビームサーベルを振りかぶったウラヌスが眼前に迫る。キラはその光景に死を感じた。

「！」

死の感覚がキラの意識をはじけさせる。キラは一瞬でストライクフリーダムの操縦系統を取り戻し、機体をウラヌスの胴体へとぶつける。サーベルの刃はストライクフリーダムの左肩をつらぬくが致命傷ではない。

「おおおおおお！」

「ちいいいい！」

ストライクフリーダムがウラヌスの背後に回る。すぐさま反応するジャックだがキラの攻撃が早い。ストライクフリーダムのサーベルがウラヌスの背部バインダーを両方とも切り裂く。バーニアを失ったウラヌスは大きくバランスを崩した。

「これで戦えないだろう！」

「なめえええるなあああ！」

ジャックは絶叫と共にスティックを動かす。両脚を振り子のようには振ってウラヌスの体勢を立て直すと、ビームサーベルを突き出す。キラはジャックの執念に恐怖さえ覚えた。

「！」

しかし、ジャックの執念はキラの技量の前に敗れた。ストライクフリーダムのサーベルがウラヌスの両脚をも切り裂く。完全にバランスを失ったウラヌスのボディをストライクフリーダムの脚が蹴り

上げる。姿勢制御手段を失ったウラヌスはそのままの姿勢であらぬ方向へと流されていった。

『キラ・ヤマトオオオオ!』

キラのヘルメットにジャックの絶叫がこびりつく。キラは冷たい汗を唇に感じ、荒い息を吐いた。

「な、なんで……」

アルマンは腹部にひろがる熱い痛みで顔をゆがませながら、ルナマリアのほうを見た。

「ごめん……アルマン……」

アルマンに銃口を向けたルナマリアの顔は涙で濡れていた。その表情を見て、アルマンは彼女が記憶を取り戻したことを知った。

「ルナ……」

バランスを崩して床に倒れこんでいたシンは身を起こすと2人の姿を見比べる。そして、アルマンのほうに悲しげな一瞥をくれると、ルナマリアの側に立ち、その銃を受け取る。

「シン……あたし……」

「良いんだ。仕方ないんだ……」

かける言葉も見つからずシンはルナマリアを抱きしめた。ルナマリアはスーツ越しにシンの暖かさを感じようと、彼の体を抱きしめ返す。

「……」

銃弾を腹部に受けたアルマンは2人の姿をしばらく眺めていた。

右手には銃が握られていたが、それを2人に向ける気はすでない。

「さよなら……ルナ姉ちゃん」

小さな声でそうつぶやくと、アルマンは2人に気づかれないようにそっと通路の向こうに消えていこうとした。だが、その気配に気づいたシンが振り向く。

「どこへいくアルマン！　すぐに手当てを！」

「シン・アスカ！　ルナ姉ちゃんはお前にくれてやるよ！」

「アルマン！」

ルナマリアが駆け寄ろうとするのを銃口でさえぎり、アルマンは通路を流れて行く。

「いいんだ。ルナ姉ちゃんが元に戻って僕はうれしいんだよ……気にしないで」

「ごめん……ごめんなさいアルマン」

泣きじゃくるルナマリアを見てアルマンが微笑む。そして、その表情を引き締めるとアルマンはシンを見据えた。

「シン！　外で待つ！　決着をつけるぞ！」

「まだそんなことを！　お前は……」

そこまで言ってシンは言葉を途切れさせる。アルマンの表情は以前とは別人のように穏やかで悲しげな微笑を浮かべていたのだ。

「……アルマン……お前……」

「……待ってるよシン」

通路の向こうにアルマンは消えた。シンは次の出会いがアルマンとの最後の戦いになることを確信した。

## 第49話「運命」

第7宇宙ゲートにたどり着いたギイはアイオンのキャプテンシートに座り、出航の指揮をとっていた。

もはやアザナエルとロゴス残党を片付けたギイには、ここに居続ける意義はない。ミラージュコロイドを搭載する特殊艦アイオンなら敵に気づかれることなく脱出することができる。ギイはアザナエル一党殺害に協力してくれた旧連合軍兵士たちを乗船させ、出航の時を待った。

「これで終わりですか……」

「そうだな。すべて終わりだ……」

副官の言葉にギイは静かにつぶやく。

アザナエルを利用し、LOWを利用し成し遂げた復讐。目的を終えてアスランに討たれてやることも考えたがやはり死ぬのは惜しい。自分の覚悟の甘さを思い、ギイは軽く笑う。

「出航準備完了！ ゲート正面に障害物なし！」

「よし！」

ギイの脳裏にアルマンの顔が浮かぶ。罪悪感が胸に去来するがそれを振り払い彼は出航の合図をする。すべては終わったのだ。過去はこの要塞に葬ると彼は決意していた。

「！ 閣下！」

「どうした？」

オペレーターが正面を指差す。そこには黒ずんではいるものが見慣れた白い機体が流れてきていた。

「ウラヌス……」

ジャックの乗るウラヌスは自航手段を失い、ここまで流れてきていたのだ。それを残骸だと判断したギイは砲手に撃墜命令を下す。

『どこへ……逃げるつもりだ……』

「！」

ギイの隻眼が驚愕に見開かれる。ウラヌスはゆっくりと流れながら、まだ動く右腕でバスターライフルを握る。

「ヴァイオラが死んだぜ大佐……なのにアンタはどこに逃げるんだ？」

「お前が知る必要はないジャック。ヴァイオラの場所へ送ってやる」  
「そうかい……ありがたいね」

ギイが砲手に発射命令を出す。アイオーンの主砲がウラヌスに照準を定め、ビームを放つ。だが、それに呼応するようにウラヌスのバスターライフルが咆哮をあげた。

「なっ！」

「ヴァイオラが寂しいとさあ！ 付き合ってもらうぜ大佐！」

ウラヌスが閃光に溶けていく。だが、その放ったビームはアイオーンのブリッジを直撃し、ギイの肉体を蒸発させた。

ルナマリアをラファエルたち突入班に預けたシンは、損傷したデルタステイニーに戻って宇宙空間に出た。

「……」

黒いMSがデルタステイニーの正面に現れる。アルマンの乗るジエノサイドだ。シンはその機体を見つめ、大きく息を吐く。

「……よく来てくれたシン」

「ああ……決着だ」

「最後に1つだけ聞きたい」

アルマンの声に力はない。シンはかすかに眉をひそめ、質問を待った。

「ステラ姉ちゃんは……どんな人だった？」

「？」

「僕の……僕のステラ姉ちゃんとの記憶は作り物だ……」  
「！」

シンはあの時アルマンが安心してた理由を理解した。ギイはアルマンに彼の記憶が作り物であることを教えたのだ。ステラへの想いもルナへの想いも、おそらく彼の記憶に本来の記憶はほとんどないのだろう。

『僕は作り物だ。戦争のために体も記憶も作られた機械なんだ……』  
「……アルマン」

沈黙が流れる。シンは何も言えず、アルマンは何も言わず、ただ対峙するだけであった。

『終わりにしよう。どの道、僕はもう長くない……』  
「そうか……」

シンの頬を涙が伝う。デルタステイニーのエンジンが回転数を上げる中、シンは正面に浮かぶジェノサイドに意識を収束させる。

『いくぞ！ シン・アスカ！』

「こい！ アルマン・シトリー！」

ジェノサイドのビームライフルをデルタステイニーがかかわす。重傷を負っているとは思えない動きのアルマンに、シンは眼を見張った。

『僕の魂のすべてをかける！ これが僕の生きてきた証だ！』

ジェノサイドの左腕が射出される。死角から発射される5連ビームを間一髪でかわし、シンはジェノサイドとの距離を詰める。

『刻んで見せる！ 僕の名を！』

ジェノサイドの隠し腕がビームサーベルをつかむ。それを見たシンもデルタステイニーのアロンドライトをつかんで突きかかる。

「おおおおおお！」

『うおおおおお！』

2機のMSが交錯する。それと同時にインヘルノの自爆装置が作動を開始した。岩盤を引き裂いて噴き出す閃光に巻き込まれ、2機は白い世界に消えた。

## 最終話「つながる未来」

アザナエル動乱から3ヶ月が過ぎた。

インヘルノ陥落后、指導者を失ったアザナエル軍は地球連合とザフトに全面降伏。それに伴ってブルーコスモス残党も抵抗をやめ、各国で投降が相次いだ。

「お久しぶりです」

オーブの岬にある妹の墓に花をあげにきたシンは、そこに立つキラとアスランに声をかけた。2人はシンのほつを振り返ると静かに微笑んだ。

「元気だったか」

「体のほうはもういいの？」

「ええ、体は丈夫なほうですから。それよりもアスランこそ」

シンはあの爆発から奇跡的に生還した。普通なら戦死するところだったのだが、一緒に爆風に巻き込まれたジェノサイドのアルミューレ・リュミエールによって何とか致命傷を免れていたのだ。

「俺も本当は大丈夫なんだが……カガリがうるさいんだ」

アスランは包帯でつった左腕を苦笑しながらさすった。アザナエルとギイの問答の後で銃撃を受けたアスランは、ラファエルによって何とか命を救われ、事なきを得た。

「相変わらず女の子に弱いんですねえ」

「ほつとけよ」

「そついえばルナマリアは？」

キラの言葉にシンは頭をかく。

「いや……今日はちょっと寄るところがあつてですね」

「気をつけるよ。好きな子は側においとかないとどこかに行つてしまつぞ」

アスランが珍しく冗談を言う。シンは照れたように頭をかいた。

「でも、残念ですね。LOWが解散だなんて」

話題を無理やり変えようとシンは最近のニュースを持ち出した。

シンが入院している間に、LOWは解体が正式決定され、その兵員は各所属国に戻る事が決定したのだ。

「あの戦争でLOWは戦力のほとんどを失ったからね。再編するにも予算がかかりすぎるって各国がいい顔をしなかつたんだよ」

「でも、ああいう組織が世界平和のために必要だって……」

キラの言葉にシンが反論しようとする。アスランは笑顔で空を眺め、シンに応えた。

「世界を平和にする方法は何もLOWだけに限らないさ」

「え？」

「まだ別のやり方はあるってことさ。1つの方法に固執してちゃ前に進めないよ」

キラとアスランが顔を見合わせる。その表情にはLOWを失った無念さは微塵も感じられない。

「じゃ、じゃあ……」

「これからも俺たちなりの道を探していく。しばらく苦勞することにするよ」

アスランが右手を差し出す。シンはその手を見て、少しだけ戸惑った。

「また力を貸してくれシン」

「アスラン……」

感極まったシンはその手を強く握り締める。キラがその手にそつと手をそえ、笑みを浮かべた。

「いつでも呼んでください！俺やりますから！」

「ありがとうシン」

「すまないシン」

アスランが手を離し、キラが離れる。シンが見送る中、草原の向こうへ2人は去っていった。

「ねえ、シン？」

振り返るといつの間にかきたのかルナマリアが立っている。シンは

眼に浮かんだ涙をすばやく拭くと彼女に笑いかけた。

「アスランたちがいたみたいだけど？」

「うん、元気そうだったよ」

ルナマリアが自然な動作でシンの右腕に腕を絡める。シンはその行為に顔を赤らめる。

「お、おい、アスランが……」

「もう居ないわよ。ここには」

ルナマリアの体臭がシンの鼻腔をくすぐる。シンはその匂いと温もりを感じながら、歩き出す。

「あいつ、元気だったか？」

肩に頭をのせているルナマリアにシンが聞く。ルナマリアは少しだけ頭を動かして、耀表情を見せた。

「うん、ラファエル司令……じゃなかった理事が言うには、かなり順調だつて」

「話とかできるのか？」

「簡単な会話はできるよ。ルナ姉ちゃん、ルナ姉ちゃんってうるさくって……」

「そうかアルマンは元気が……」

あの戦闘後、アルマンは大破したジェノサイドから救助された。だが、激しい戦闘とベネ・ハⅡエロヒムとしての強化の反動から彼の精神は崩壊していた。現在は退役したラファエルが理事を務める戦災孤児院で治療を受けているのである。

「なあ、ルナ……」

「うん？」

ルナマリアの声が耳に心地よい。シンは何か言おうとしたが、首を軽く振って、柔らかい笑みを浮かべただけであった。

「いつか……いつかさ……アイツが元に戻ったら一緒にどこかに行こうな」

「うん、3人で一緒にね」

シンは空を見上げた。太陽は西に傾き、空には星が見えている。

「ねえ、シン……」

「うん？」

ルナマリアが空を見上げている。瞬く星を見つめる横顔にシンは一瞬見とれた。

「ステラってね。星って意味があるんだって」

「へえ……」

再びシンも空を見上げる。星の輝きは優しく、2人を見守っているかのようだった。

## 最終話「つながる未来」（後書き）

はい、おしまいです。長い長い！ 長編小説っていうよりも50話完結の短編連作ですから勝手が違います。戦闘が残り2話で終わってしまい、四苦八苦して49、50話を考えたのは秘密です。某友人をモデルにしたキャラをぶっ殺しましたが、まあカッコいい死に方だったのではないのでしょうか。オレはジャックが大好きです。

当初の予定通りの流れだったのですが、実はかなりはしょってます（ぶつちやけ飽きたからですが）。ベネ・ハ「エロヒムのMSはモデルがありました、ジェノ（エピオン+サイコ）、ウラヌス（ウイングゼロ）、スレイヤー（デスサイズ）なのですが、実は予定ではあと2機出る予定でした（アルトロンとヘビーアームズ）。中国娘とメガネ青年だったのですが、やむなく削りました。どっかで戦死したのでしよう。

正直後半はけっこうグダグダです。もう少しまとまりがあればよかったかな〜と思いますが、別に書きなおそうとか思いません。いや、すげえ大変だったコレ。全部終わると「両澤も（両澤なりに）がんばったよな」と思えるから不思議だ

ちなみに最後の部分は「ステラ「星」と「星を見る人」スターゲイザー」という隠しワードが隠れています。気づいたかな？ ちなみにイザークとディアッカの乗ってるヤツはスタゲのアレとほぼ同タイプです（核動力に換装されてますが）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8719j/>

---

機動戦士ガンダムSEED D-DESTINY

2010年10月8日10時35分発行